

ひょうご伝説紀行 妖怪も自然の世界

<http://www.hyogo-c.ed.jp/~rekihaku-bo/historystation/legend3/>



人々が、暮らしの中で生み出し、語り継いできた伝説。

そこからは、人々が日々抱いていた願いや希望、世の中や人間、自然の見方といった、

歴史の中での人々の意識の一断面を読み解くこともできます。

「ひょうご伝説紀行」は、兵庫県域に伝わる伝説とその舞台を訪ね、

歴史や地域の文化に触れていただく番組です。

第三作目となるこの番組では、妖怪や自然に関わる伝説から、

二十一話をとりあげました。

どうぞ伝説の世界をお楽しみください。

歴史博物館ネットミュージアム
ひょうご歴史ステーション

ひょうご伝説紀行
妖怪と自然の世界

1 . 播州皿屋敷	姫路のお菊井戸	3
2 . 子育て幽霊	墓場で生まれた赤ん坊	17
3 . 平家の怨霊	黒雲の彼方の武者	26
4 . 多可のあまんじゃく	夜明けに逃げ出すあわてもの	38
5 . 篠ヶ峰の鬼	のんきな鬼のお手伝い	39
6 . おさかべ姫	姫路城 天守閣の主	52
7 . 千草の老人	長生きな大男の伝説	65
8 . 夢前川の河童	穴淵の綱引き、大勝負	75
9 . 神池寺の澄まざる池	お坊さんの大蛇退治	84
10 . 佐用安川の猫堂	魚を盗んだ猫のとむらい	94
11 . 東本郷村の火の玉	腕に残った青い痕	96
12 . 芝右衛門狸	洲本にひびく腹つづみ	106
13 . およし狐	狩人と暮らしたお相手は	108
14 . 犬飼村の猿神退治	芝左太夫の賢いお供	123
15 . 犬寺ものがたり	白と黒の二頭の犬	124
16 . 唐櫃の黄金の鶏	村の行事と大きな石	136
17 . 鷲の地主神	如意尼とソランジン	137
18 . 明石の大ダコ	三郎左衛門の知恵	145
19 . 沼島女郎	島から妃が流した絵	146
20 . 益気の八十橋	天まで届く岩の段	158
21 . おりゅう柳	柳の精との悲しい恋	159
参考情報		170

ひょうご伝説紀行
妖怪と自然の世界

播州皿屋敷
姫路のお菊井戸

伝説

播州皿屋敷
姫路のお菊井戸

紀行

『播州皿屋敷』を訪ねて

- ・怪談皿屋敷
- ・青山を訪ねる
- ・姫路城と城下町
- ・随願寺と御着城
- ・県域のお菊伝説
- ・『竹叟夜話』の皿屋敷

関連情報

用語解説
参考書籍
所在地リスト

伝説

播州皿屋敷 姫路のお菊井戸

戦国時代、姫路（ひめじ）を小寺（こでら）氏が治めていたころのことです。小寺氏の重臣で青山（あおやま）に館（やかた）をかまえる青山鉄山（あおやまてつざん）という人がいました。

鉄山は常々、小寺氏に代わって自分が姫路城主になりたいと思っていました。小寺氏もこうした鉄山の野望に気づいていて、様子を探るためにお菊という女性を、鉄山の館に召使いとして住みこませていました。

永正元（1504）年、小寺氏の当主が亡くなり、まだ若い則職（のりもと）があとを継ぎました。これをチャンスと見た鉄山は、翌年の春、姫路の北にある随願寺（ずいがんじ）で開かれる花見のときに、酒に毒をしこんで、小寺一族を暗殺してしまおうとたくらみました。しかし、鉄山の子息小五郎（こごろう）が父を止めようとしています。

「父上、そのような恐ろしいくわだてはおやめください。」

「おのれ小せがれ。じゃまをするな。」

怒った鉄山は小五郎を牢屋（ろうや）に閉じこめました。これを知ったお菊は小五郎をかばい、小五郎から鉄山の悪いたくらみを知らされると、急いで主君の小寺則職に伝えました。そのおかげで、鉄山たちのくわだては、すんでのところで防がれました。

しかし、それからすぐに播磨（はりま）では大名（だいみょう）同士の大きな争いがおこりました。その中で勝った方についた鉄山はついに姫路城を占領し、敗れた小寺則職は瀬戸内海に浮かぶ家島（いえしま）へと落ちのびていきました。

季節は梅雨のころ、姫路城を手に入れて大喜びの鉄山は、近くの土豪（どごう）たちを集めて宴会（えんかい）を開きました。そして、そばを振る舞うために、「こもがえの具足皿（ぐそくざら）」と呼ぶ小寺家の家宝であった十枚ぞろいの皿を出すことにしました。

伝説

播州皿屋敷 姫路のお菊井戸

鉄山の家来である町坪弾四郎（ちょうのつぼだんしろう）は、常々お菊に好意を持っていたのですが、お菊は相手にしませんでした。これをうらみに思った弾四郎は、お菊が用意することになっていた十枚ぞろいの皿のうち一枚をかくし、お菊がなくなると疑われるようにたくらみました。

皿が一枚足りないことを知った鉄山は、お菊をきびしく責めようとしています。そこを弾四郎がなだめすかし、お菊は弾四郎の屋敷（やしき）に預けられることになりました。ねらいどおりに事はこんで喜ぶ弾四郎は、この時とばかりお菊に思いを伝えますが、やはりお菊は相手にしません。おこった弾四郎は、お菊を屋敷の庭の松につるしあげるなど散々に暴力をふるった末に、井戸へ投げこんで殺してしまいました。

するとその夜から、井戸のあたりで「一枚、二枚、三枚、四枚、五枚、六枚、七枚、八枚、九枚...。」と皿を数えるお菊の悲しげな声が聞こえ、屋敷中にガラガラと皿の音が鳴りひびくようになりました。人々はこれをおそれ、この屋敷を「皿屋敷」と呼ぶようになりました。

やがて、小寺則職は味方の大名の助けをえて姫路城を取り返しました。青山鉄山は討ち死にし、小五郎も父の行いをはじて自殺しましたが、町坪弾四郎はかくしていた皿を持って降伏を願い出ました。しかし、則職は許さず、室津（むろつ）にいたお菊の妹二人の仇討ち（あだうち）の願いを聞き入れ、弾四郎を討ちとらせました。

小寺則職は、姫路の十二所神社（じゅうにしよじんじゃ）境内に社（やしろ）を建てて、お菊をまつりました。お菊が弾四郎につるしあげられた松は、毎年梅雨のころになると枯れ、梅雨が過ぎるともとの緑の葉にもどるので、「梅雨の松」と呼ばれたといひます。さらにお菊の亡霊（ぼうれい）は虫となって、命日（めいにち）が来るたびにあらわれるとされています。

（『姫路城史』をもとに作成）

紀行

『播州皿屋敷』を訪ねて

怪談皿屋敷

「一つ、二つ、…」との皿数えが登場する『播州皿屋敷（ばんしゅうさらやしき）』。江戸を舞台とした怪談『番町皿屋敷（ばんちょうさらやしき）』とあわせて、全国的に有名な怪談の一つと言ってよいだろう。江戸時代から近代にかけて、浄瑠璃（じょうりり）、歌舞伎、落語、小説、映画とさまざまな分野の作品にリライトされてきており、古くからよく知られてきた。

このサイトでは、『姫路城史』（姫路城史刊行会、1952年）に掲載された筋に沿って紹介した。これは江戸時代後期に書かれたと見られる、『播州皿屋敷実録』という書物を要約したものである。

ただし、このサイトでは、小学生にも読みやすくするために、かなり枝葉をそぎ落として紹介した。『播州皿屋敷実録』では、お菊は実は小寺氏の家臣である衣笠元信（きぬがさもとのぶ）と恋仲で、主家への忠義のために元信から命じられて青山家で働いているとされ、また青山鉄山（あおやまてつざん）の子供小五郎も、小寺則職（こでらのりもと）の妹である白妙姫（しろたえひめ）と恋仲になっていて、そのために父のくわだてを止めようとしたなど、もっと複雑な恋愛関係が描かれ、そのほかにもさまざまなサブストーリーが組み込まれている。

こうした複雑な構成は、もはや素朴な「伝説」というよりは、現代の小説のような、「戯作（げさく）」と言うべきものである。『播州皿屋敷実録』のような、非道な主家や男たちの横暴にさいなまれる女性が、亡霊となって復讐（ふくしゅう）を遂げるとの構成は、封建社会における主従関係や、義理や道徳にしばられた家族関係などに日々直面していた当時の人々にとっては、共感しやすい話だったようだ。



菊女ケ霊（『北斎漫画』）

青山を訪ねる

さて、話の舞台は姫路周辺に設定され、姫路城のほかに、青山や随願寺（ずいがんじ）といった、姫路付近に住む人々にはなじみの深い地名が現れる。まずは、青山から訪ねてみよう。

青山には、江戸時代からの集落の北側に小さな丘があり、その麓に氏神をまつる稲岡神社（いなおかじんじゃ）がある。青山という地名は、この丘が鎮守の森として、常に青々と木々が茂っていたところからついたとされている。



稲岡神社



宗全寺跡

青山の現地を訪ねると、皿屋敷伝説よりも、室町時代後半の一時期播磨を治めていた、山名（やまな）氏に関する寺跡や居館跡の伝承が目立つ。まず、江戸時代からの集落の中には宗全寺（そうぜんじ）と呼ばれる寺跡があり石仏が数体まつられている。ここは山名宗全の菩提寺（ぼだいじ）であったとされている。



小丸山

また、西方の小丸山（こまるやま）には山名氏が播磨を治める拠点とした館があり、守護代の太田垣（おおたがき）氏がいたと伝えられている。さらに青山地区の北部、かつては「遠山（どやま）」と呼ばれた集落内には、太田垣氏の菩提寺として法灯寺（ほうとうじ）があったと伝えられ、跡地には「遠山の地藏さん」と呼ぶ石仏をまつる小堂がある。



法灯寺跡

このように、青山に山名氏関連の伝承が多いことは、皿屋敷伝説を考える上でも興味深いのだが、このことは、また後ほど述べてみたい。

姫路城と城下町

姫路城天守閣の二段下、上山里曲輪（かみやまざとくるわ）の中には「お菊井戸」とされる古井戸がある。もちろんお菊が投げ込まれた井戸、ということになっているが、この井戸自体は、江戸時代の文献では「釣瓶取井戸（つるべとりいど）」と呼ばれており、大正初めに姫路城が一般公開されるようになったころから、「お菊井戸」と呼ばれるようになったのではないかと考えられている。



姫路城内の「お菊井戸」



姫路城天守閣と「お菊井戸」



車門跡付近
(左が中堀、右が船場川)

『播州皿屋敷実録』では、お菊の身柄を引き取った町坪弾四郎（ちょうのつぼだんしろう）が、姫路城の車門（くるまもん）の近くにあった自らの屋敷で、庭の松につるし上げるなどしてお菊を拷問し、さらに姫路城内へ連行して鉄山が見ている前で井戸に投げ込んだとされている。

伝説の末尾には、このお菊がつるされたという「梅雨の松」が出てくるが、実際に江戸時代中ごろまでは、車門の外、中堀（なかぼり）と船場川（せんばがわ）との間に、梅雨になると枯れ、梅雨があげると緑になる「梅雨の松」があった。ただし、この松については宝暦12（1762）年成立の『播磨鑑（はりまかがみ）』では、元和年間（1615～24）に姫路藩士が植えたものであるとされている。また『播磨鑑』では、お菊との関連には触れられておらず、純粋に不思議な樹木として紹介されている。名物の松が先にあって、それが皿屋敷の話に取り込まれていったようだ。



また、青山鉄山は城下の桐の馬場地区に屋敷を構えており、お菊が殺されたあと、この屋敷の井戸からも皿敷えの音が聞こえたという。「桐の馬場」という地名は江戸時代の姫路城下町の中にも見られ、現在の県立姫路東高校や国立病院機構姫路医療センターの裏手付近にあたる。しかし、この馬場は江戸時代前半にできたものである。

車門も桐の馬場も、いずれも江戸時代初めに池田輝政（いけだてるまさ）が現在の姫路城と城下町を建設して以降の地名で、伝説で語られている戦国時代にはなかったはずである。この話は、あくまで江戸時代の戯作として、事実とは混同せずに楽しんだほうがよい。

そのほか、『播州皿屋敷実録』からは離れるが、18世紀末～19世紀初頭に、姫路藩酒井家の家臣たちが編纂した史書『六臣譚筆（ろくしんたんぴつ）』には、姫路城下町の東側、五軒邸（ごけんやしき）地区にあった小幡九郎右衛門（おぼたくろうえもん）の屋敷内に、「お菊の墓」があるとされている。この話には若干の手がかりがあり、文化3（1806）年の『姫路城下絵図』（当館蔵）では、五軒邸地区内の竹の門（たけのもん）近くに、小幡加賀右衛門の屋敷が記されており、この屋敷のことかと考えられる。しかし残念ながら、『六臣譚筆』に見えるお菊の墓は、現在確認できない。



桐の馬場跡
（県立姫路東高校東側）



竹の門跡



お菊神社



お菊神社



奉納用の皿

お菊の霊がまつられている、十二所神社（じゅうにしよじんじゃ）境内にあるお菊神社。境内の案内板によれば、皿にちなんで飲食店関係の人々が皿に願いを書いて奉納すると霊験があるという。この神社については、幕末期に姫路藩士の福本勇次が著した『村翁夜話集（そのうやわしゅう）』（姫路市立城内図書館蔵）では、「是ハ近年祭りヨシ」と記されていて、伝説の時代である戦国時代まではさかのぼりそうもない。ただし、大坂で寛保元（1741）年から上演されていた浄瑠璃『播州皿屋敷』で、お菊が十二所神社境内にまつられているとされているので、お菊神社の存在はこのころまではさかのぼるようである。



奉納された木像
（左から小寺則職、
お菊、青山鉄山）

随願寺と御着城



随願寺本堂

悪役青山鉄山が小寺氏暗殺の陰謀を仕組んだ舞台となった随願寺。この寺は、古代以来の天台宗（てんだいしゅう）の寺院で、平安後期以降は播磨天台六ヶ寺の一つとして、播磨一国全体の安穩を祈る寺院として信仰を集めた。戦国時代末期には、小寺氏出身の僧侶である休夢（きゅうむ）が寺内の実権を握っていた時期もある。この伝説で小寺氏の花見の舞台とされたのも、こうした歴史的背景を踏まえたものであろう。

現在の伽藍（がらん）は、江戸時代中ごろに姫路藩主榊原（さかきばら）氏の寄進によって再建された本堂を中心としたものである。いまは静かな境内だが、かつては「三十六坊」と呼ばれる多数の子院（しいん＝寺僧の住居）もあったと

伝えられ、かなり繁栄していたようだ。境内を訪れると、こうした子院の跡地に梅林が開かれている。伝説では春の花見の舞台となっているが、現在の随願寺は梅見の名所である。

小寺氏は、戦国時代に姫路周辺を治めていた領主である。播磨守護赤松氏の南北朝時代以来の重臣で、戦国時代には、御着（ごちゃく）を拠点に飾東郡（しきとうぐん）周辺に勢力を広げ、戦国後期には守護赤松氏から半ば独立して地域を治めるようになった。小寺氏が本拠とした御着城跡には、現在も部分的にはあるが堀跡が残っている。



御着城

県域のお菊伝説

さて、皿屋敷伝説は姫路や江戸だけではなく、全国にたくさんある。伊藤篤『日本の皿屋敷伝説』（海鳥社、2002年）では、岩手から鹿児島まで、合わせて48ヶ所の伝承地が紹介されている。

こうした皿屋敷伝説の広がり背景としては、たとえば姫路から黒田氏が藩主として移っていった福岡県内に皿屋敷伝説が見られるなど、領主層の移住や親戚関係にともなって広がっていったと見られるものもある。このほか、宗教者の布教活動や流通業者の活動、さらには演劇を通じた伝播などが考えられている。

兵庫県内では、姫路のほかに、佐用郡佐用町口長谷（くちながたに）に「お菊の墓」があり、背後にある利神城跡（りかんじょうし）にはお菊が身を投げた井戸があるとされている。また、尼崎市大物（だいもつ）の深正院（じんしょういん）にも、お菊が投げ込まれたとされる井戸の跡がある。

尼崎のお菊伝説は、時代を元禄の頃（17世紀末）とし、藩主青山氏の悪家老と、それに恋慕される侍女お菊が主人公となっている。尼崎のお菊伝説は、尼崎藩主の青山氏と、姫路の皿屋敷伝説の悪役青山鉄山との名字が共通することからできあがったのであろう。

このほか、お菊の亡霊が虫に姿を変えて現れるという、お菊虫の伝説がある。この虫は、アゲハチョウのさなぎのことで、かつて姫路などでは夏の縁日でも売られていたようだ。こうした伝説は、姫路や尼崎のほかに、加東市（かとうし）の旧滝野町（きゅうたきのちょう）などにもある。



利神城跡（奥の山頂部）と口長谷の集落



深正院の井戸跡（右側の堀の下）

『竹叟夜話』の皿屋敷

さて、『播州皿屋敷』には、このサイトで掲載したもののほかにもいくつかの異なった筋立てがある。

このうち最も古い形態を示すと見られているのが、『竹叟夜話（ちくそうやわ）』に収録された話である。『竹叟夜話』は、天正5（1577）年に永良竹叟（ながらちくそう）という人物が著したとの奥書があり、これが事実であるとすれば、現在のところ『播州皿屋敷』を掲載した最も古い書物となる。江戸の『番町皿屋敷』と姫路の『播州皿屋敷』との、どちらが古いのかという議論が古来あるが、近年では、『竹叟夜話』の奥書に注目して、『播州皿屋敷』の方がより古いとの見方が有力となっている。

『竹叟夜話』収録の話は、時代を室町時代後半、播磨を山名氏が守護として治めていた時期に設定している。舞台は青山に拠点構えていた山名氏重臣の小田垣主馬助（おだがきしゅめのすけ）の館となっており、ヒロインは花野（はなの）という名前で書かれている。また、皿数えの皿は、小田垣氏が主君山名氏から拝領した5枚そろいの鮑貝（あわびがい）の盃で、これを花野に想いを寄せる若侍の笠寺新右衛門（かさでらしんえもん）が隠し、花野を拷問して殺害したとされる。そして、花野の怨念が夜な夜な現れては仕返しをくわだて、また花野がつるされた松を「首くくりの松」と呼んだ、と記されている。

山名氏が青山に拠点を構えていたことは、同時代の史料では確認できない。しかし、現地に比較的濃密な伝承が残されており、個々の具体的な場所は別として、大まかに青山付近に拠点の一つがあったという程度であれば、事実とみてよいのではないかと。

また、『竹叟夜話』に山名氏の重臣として登場する「小田垣」なる人物も、実際の山名氏の重臣で播磨守護代の一人となった太田垣主殿助（おおたがきとのものすけ）をモデルとしたものであろう。そして、その後の『播州皿屋敷』で一般的となる悪役の「青山鉄山」とは、この「小田垣」が青山にいたとされてきたことから創造された人物と見ることができよう。

しかし、『竹叟夜話』では、皿は5枚であり、ヒロインの名前も「お菊」ではない。井戸も登場しない。よく知られた皿屋敷の話になるまでには、いまだ要素が不足している。『竹叟夜話』の筋立てに、いつ「お菊」というヒロインの名と10枚の皿が重なったのだろうか。その過程は現在のところはっきりしない。



おもちゃ絵 怪談皿家敷

用語解説

【『番町皿屋敷』】ばんちょうさらやしき

一般的なものは、江戸番町に住む旗本（はたもと）の青山主膳（あおやましゅぜん）の下女お菊が、皿を紛失したことを責められて井戸に投げ込まれて殺され、そのたたりが青山を苦しめたとする話。江戸を舞台とした皿屋敷話としては、現在のところ正徳2（1712）年の『当世知恵鑑』に見える牛込（うしごめ）を舞台とした話が、残された書物の中では最も古いと見られている。なお、歌舞伎の演目としては、現在は1916（大正5）年の岡本綺堂（おかもとときどう）による新歌舞伎作品がよく知られている。

【浄瑠璃】じょうり

楽器の伴奏にのせて章句を語る音曲。語り手を「太夫（たゆう）」と呼ぶ。このうち義太夫節（ぎだゆうぶし）という流派の語りに、あやつり人形が加わるものを人形浄瑠璃（文楽、ぶんらく）と呼ぶ。本来は演劇的要素が希薄な語り物であったが、江戸時代中ごろから人形劇を伴うものが主流となっていった。

【山名氏】やまなし

南北朝の内乱の中で、山陰地方を中心に勢力を広げた一族。南北朝最末期には一族で11ヶ国の守護職を持ち、「六分の一殿」とも呼ばれたが、明徳の乱（1391年）によって勢力を削減された。乱後は、但馬（たじま）などの守護職を一族で分有したが、嘉吉の乱（1441年）によって、赤松氏旧領国の播磨（はりま）、備前（びぜん＝現在の岡山県南東部）、美作（みまさか＝現在の岡山県北部）の守護職を獲得した。

応仁・文明の乱（1467～77年）では宗全（そうぜん）が西軍の主将となった。戦国時代前半には、播磨の再占領を目指して赤松氏と数度戦ったが、その後、但馬、因幡（いなば＝現在の鳥取県東部）の一族間での争いや、重臣層の台頭によって次第に衰えていった。

但馬守護家は天正8（1580）年に羽柴秀吉（はしばひでよし）によって滅ぼされ、子孫は旗本となった。また、因幡守護家の子孫は但馬の村岡（むらおか＝現在の香美町村岡区）に6,700石の領地を持つ上級の旗本（はたもと）として存続し、明治初年の高直しによって11,000石の大名となって廃藩置県を迎えた。

【太田垣氏】おおたがきし

但馬国南部の朝来郡（あさごくん＝現在の朝来市）を本拠とした中世後期の領主。但馬の多くの中世在地領主と同様に、古代の日下部氏（くさかべし）の子孫と称した。山名氏が但馬の守護となると重用され、但馬や備後（びんご＝現在の広島県東部）の守護代に任命された。

嘉吉の乱後に山名氏が播磨守護職を獲得すると、播磨に置かれた三人の守護代の一人ともなった。戦国時代には一時期領内に発見された生野銀山（いくのぎんざん）の権益を掌握したとも伝えられるが、天正年間における羽柴秀吉（はしばひでよし）の播磨・但馬進出によって没落した。

【『播磨鑑』】はりまかがみ

宝暦12（1762）年ごろに成立した播磨の地理書。著者は、播磨国印南郡平津村（はりまのくにいなみぐんひらつむら＝現在の加古川市米田町平津）の医者であった平野庸脩（ひらのつねなが、ひらのようしゅう）。享保4（1719）年ごろから執筆が始められ、一旦完成して姫路藩に提出した宝暦12年以降にも補訂作業が進められた。著者の40年以上にわたる長期の調査・執筆活動の成果である。活字化されたものは、播磨史籍刊行会校訂『地志 播磨鑑』（播磨史籍刊行会、1958年）がある。

用語解説

【池田輝政】いけだてるまさ

1565 - 1613。織田信長（おだのぶなが）の家臣である池田恒興（いけだつねおき）の次男。父と兄の元助（もとすけ）が小牧・長久手（こまき・ながくて）の戦い（1584年）で戦死したために家督を継ぐ。関ヶ原の戦い（1600年）の後、三河吉田（みかわよしだ = 現在の愛知県豊橋市）15万石から加増されて、播磨姫路（はりまひめじ）52万石の領主となる。慶長6（1601） - 14（1609）年にかけて、羽柴秀吉（はしばひでよし）が築いていた姫路城を大改修し、現在見られる城郭と城下町を建設した。

徳川家康の娘である督姫（とくひめ）を妻としたために江戸幕府から重用され、長男の利隆（としか）のほか、督姫が生んだ子供たちなども順次それぞれに所領を得て、一時は一族で播磨、備前（びぜん = 現在の岡山県南東部）、淡路（あわじ）、因幡（いなば = 現在の鳥取県東部）に合計100万石近くを領有した。慶長18（1613）年死去。

【『六臣譚筆』】ろくしんたんぴつ

姫路藩士が編纂した藩主酒井家にまつわる逸話を集成した書物。編者は松下高保、石本勝包、新井有寿、大河内規章、山川能察、藤塚義章の6人。もとは『官暇雑記（かんかざつき）』という書名であったが、享和元（1801）年に藩主酒井忠道（さかいただみち）が、6人の家臣が編纂した書物というところから『六臣譚筆』と命名した。

【十二所神社】じゅうにしよじんじゃ

現在の姫路市十二所前町にある神社。この場所は旧城下町の南西隅近くにあたる。現在の祭神は少彦名神（すくなひこなのかみ）。社伝では、延長6（928）年、一夜のうちに十二茎の蓬（よもぎ）が生え、その葉で病を治すようにとの神託に従って、南畝（のうねん）の森（現在の姫路駅西側付近）に創建されたという。その後、安元元（1175）年に現在地へ移ったとされている。

【随願寺】ずいがんじ

現在姫路市白国（ひめじししらくに）の増位山（ますいやま）にある天台宗（てんだいしゅう）の寺院。古代以来の寺院で、もとは山麓の平地部にあったが、元徳元（1329）年の洪水被害によって現在地に移転したとされている。書写山円教寺（しよしゃざんえんぎょうじ）などとともに「播磨天台六ヶ寺」の一つで、平安時代後期以来、播磨全体の安穩のための法会が行われる寺院と位置づけられていた。

【播磨天台六ヶ寺】はりまてんだいろうっかじ

円教寺（えんぎょうじ、姫路市書写）、随願寺（ずいがんじ、姫路市白国）、八葉寺（はちようじ、姫路市香寺町相坂）、神積寺（じんしゃくじ、福崎町東田原）、一乗寺（いちじょうじ、加西市坂本町）、普光寺（ふこうじ、加西市河内町）の6ヶ寺のこと。平安時代後期以来、播磨の国衙（こくが = 国の役所）が主催する法会に参加するなど、播磨全体の安穩を祈る寺院として位置づけられていた。

用語解説

【小寺氏】こでらし

播磨守護赤松氏の重臣の一つで、南北朝時代に播磨の守護代を務めた宇野頼季（うのよりすえ）の子孫とされる。応仁の乱後、赤松氏が播磨・備前（びぜん＝現在の岡山県南東部）・美作（みまさか＝現在の岡山県北東部）を回復すると、播磨の段銭奉行（たんせんぶぎょう）という租税徴収の役職につき、御着（ごちゃく＝現在の姫路市御国野町御着）を拠点に勢力を広げた。

戦国前半には、赤松氏当主を支えて備前（びぜん＝現在の岡山県東部）を拠点とする浦上（うらがみ）氏との抗争を繰り返した。戦国最末期の当主である政職（まさもと）は、天正3（1577）年に織田信長に服属したが、翌年三木の別所長治（べっしょながはる）が離反するとこれに同調して御着城に籠城した。しかし、三木城落城にもなつて没落した。

戦国時代後半に重用された家臣に黒田氏があり、小寺の姓を名乗ることを許されている。この黒田氏から出て豊臣秀吉（とよとみひでよし）に仕えたのが黒田孝高（くろだよしたか）で、黒田氏は江戸時代には筑前国（ちくぜん）のくに＝現在の福岡県）福岡藩主となった。小寺氏の子孫も江戸時代には黒田家に仕えるようになった。

【赤松氏】あかまつし

播磨国佐用荘（はりまのくにさようのしょう）内を本拠とする領主で、則村（のりむら）は鎌倉幕府倒幕戦で活躍し、室町幕府から播磨守護に任命された。明徳の乱（1391年）後は、播磨、備前（びぜん＝現在の岡山県南東部）、美作（みまさか＝現在の岡山県北東部）の守護職を持ち、幕府の侍所所司（さむらいどころしよし）に任命される家柄（いわゆる「四職（ししき）」）として中央政界でも活躍した。

しかし、嘉吉元（1441）年に、満祐（みつすけ）が將軍の義教（よしのり）を殺害する嘉吉の乱を起こし、幕府軍に討伐されて一旦滅亡する。その後、一族の遺児である政則（まさのり）が加賀半国の守護としての再興を許された。応仁の乱が始まると、東軍方について旧分国の播磨、備前、美作を回復したが、その後も但馬（たじま）の山名氏（やまなし）や、重臣の浦上氏（うらがみし）との対立抗争を繰り返し、天文年間には山陰の尼子氏（あまごし）の進出によって一旦淡路（あわじ）へ脱出したこともあった。

戦国後半には分国各地の有力者が自立傾向を強めたが、守護家としての権威をもとに、影響力の及ぶ範囲を狭めながらも存続していった。最後の当主である則房（のりふさ）は、織田政権に服属した後、豊臣政権によって阿波（あわ＝現在の徳島県）へ移され、そのまま病没したとも、関ヶ原の合戦で西軍方についたため自害させられたともされ、最後は定かではないが、これ以後断絶した。

【御着城跡】ごちゃくじょうし

姫路市御国野町御着（ひめじしみくにのちょうごちゃく）にあった城。赤松氏（あかまつし）の重臣である小寺氏（こでらし）の居城。江戸時代中ごろの絵図では、四重の堀の中に山陽道や町家を取り込んだ、いわゆる「惣構（そうがまえ）」を持つ大城郭として描かれている。この絵図の描写がどこまで信頼できるかは慎重な検討が必要であるが、中心部付近の堀跡の一部は現在も地表面から推測でき、また近年の発掘調査で二の丸跡の建物群や堀跡などが検出されている。現在二の丸跡の一部は城址公園となっている。

用語解説

【利神城跡】りかんじょうし

佐用町平福（さようちょうひらふく）にある城跡。播磨の西北部、美作市（みまさかし）を経て鳥取市（とっとりし）へ至る因幡街道（いなばかいどう）の沿道にある。伝承では中世においては赤松氏一族の別所氏（べっしょし）の城であったとされる。南方の口長谷（くちながたに）には、別所構跡（べっしょかまえあと）と伝える平地の領主居館の跡も残されている。

慶長6（1601）年に池田輝政（いけだてるまさ）が播磨に入ると、平福周辺で22,000石が甥の由之（よしゆき）に与えられ、現在遺構が見られる城郭の建設が始められた。山上に石垣造りの主郭を構え、山麓に城主屋敷、武家屋敷と街道沿いの町家などの城下町が形成された。元和元（1615）年からは輝政の6男である輝興（てるおき）が25,000石の平福藩を与えられ居城としたが、寛永8（1631）年に輝興が赤穂藩（あこうはん）を継承したことによって平福藩は廃藩、利神城も廃城となった。

【『竹叟夜話』】ちくそうやわ

『播陽万宝知恵袋（ばんようばんぼうちえぶくろ）』巻40に収録。主に姫路（ひめじ）や龍野（たつの）の周辺にあった逸話、霊験、奇聞などを集めた書物。奥書によれば、天正5（1577）年に永良竹叟（ながらちくそう）という人物が記したとされている。永良竹叟は、『播陽万宝知恵袋』に収録された他の数種の書物にも名前が見え、実在の人物と見てよい。赤松氏一族で、永良荘（ながらのしょう = 現在の市川町北西部）を本拠とした永良氏の一族と見られる。

【『播陽万宝智恵袋』】ばんようばんぼうちえぶくろ

天川友親（あまかわともちか）が編纂した、播磨国の歴史・地理に関する書籍を集成した書物。宝暦10（1760）年に一旦完成したが、その後も若干の収録書籍の追加が行われている。天川友親は現在の姫路市御国野町御着（ひめじしみくにのちょうごちゃく）の商家に生まれた。収録された書物は、戦国末・安土桃山時代から、友親の同時代にまでわたる125件に及ぶ。これらのほとんどは、現在原本が失われてしまっており、本書の価値は高い。活字化されたものは、八木哲浩校訂『播陽万宝知恵袋』上・下（臨川書店、1988年）がある。

参考書籍

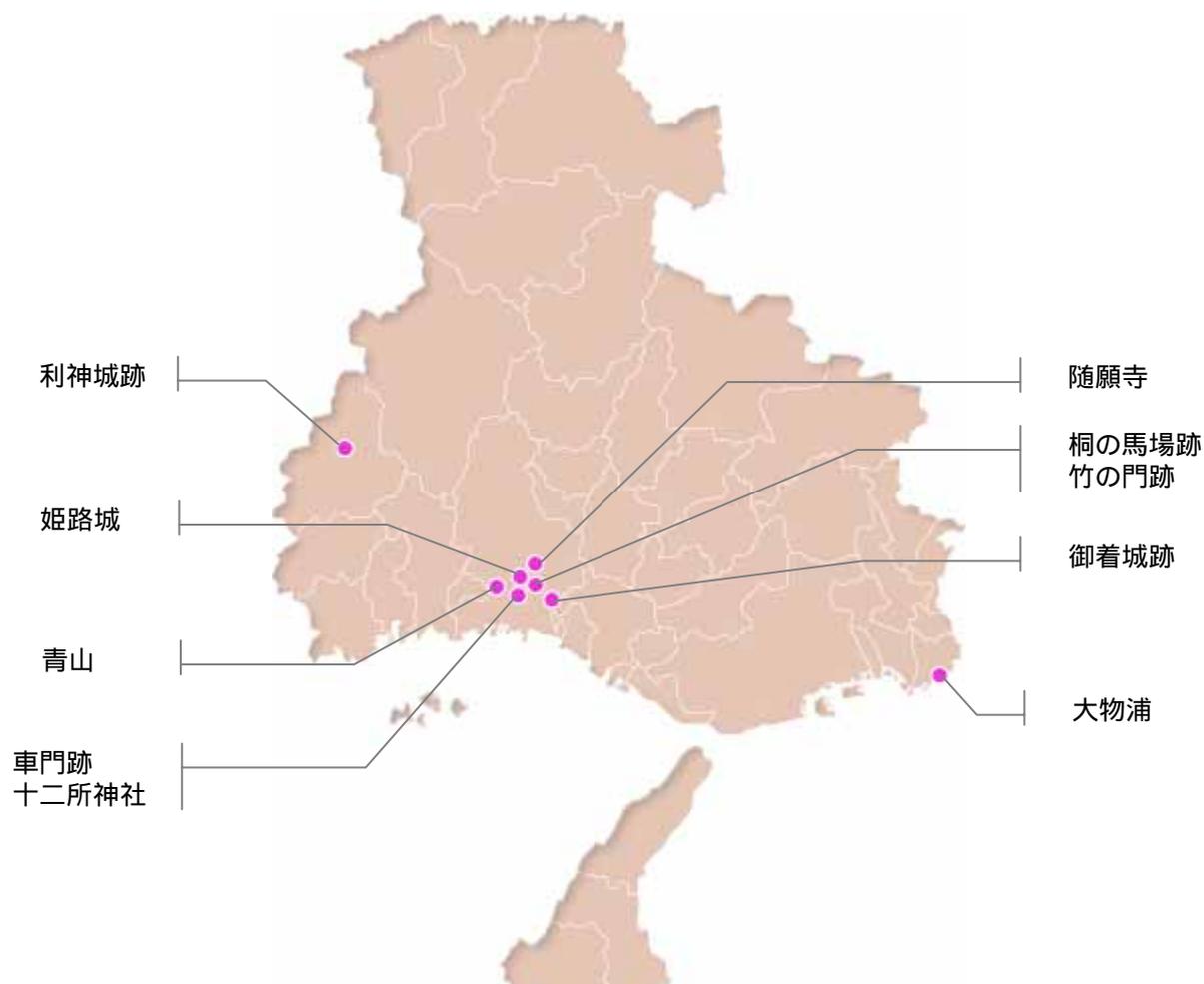
伝説の参考書籍

書籍名	刊行年	著者名	発行者
竹叟夜話(収録:『播陽万宝知恵袋』下)	1988	編纂:天川友親、校訂:八木哲浩	臨川書店
播州皿屋敷并入梅松(収録:『播陽万宝知恵袋』下)	1988	編纂:天川友親、校訂:八木哲浩	臨川書店
播磨の妖怪たち 「西播怪談実記」の世界	2001	小栗栖健治・埴岡真弓	神戸新聞総合出版センター
実録 姫路城とお菊皿屋敷	1930	清瀬永治	清瀬黙堂書房
日本伝説 播磨の巻	1918(1978復刻)	編著:藤沢衛彦	日本伝説叢書刊行会
姫路城史 上	1952	橋本政次	姫路城史刊行会
兵庫の伝説	1980	編著:兵庫県小学校国語教育連盟	日本標準
兵庫の伝説 2	1986	編集:有井基、絵:のざきジョー	神文書院

歴史・文化の参考書籍

書籍名	刊行年	著者名	発行者
播州皿屋敷(収録:叢書江戸文庫11『豊竹座浄瑠璃集』2)	1990	作:為永太郎兵衛、浅田一鳥、 校訂:早川久美子	国書刊行会
近村めぐり一歩記(収録:『播陽万宝知恵袋』上)	1988	編纂:天川友親、校訂:八木哲 浩	臨川書店
播州古処拾考(収録:『播陽万宝知恵袋』上)	1988	編纂:天川友親、校訂:八木哲 浩	臨川書店
播陽因果物語(収録:『播陽万宝知恵袋』下)	1988	編纂:天川友親、校訂:八木哲 浩	臨川書店
播州続古処拾考(収録:『播陽万宝知恵袋』下)	1988	編纂:天川友親、校訂:八木哲 浩	臨川書店
播磨鑑	1958	著者:平野庸修、校訂:播磨史 籍刊行会	播磨史籍刊行会
播州名所巡覧図絵	1974	著者:秦石田、校訂:井口洋	柳原書店
尼崎志 1	1930(1974 復刻)	編纂:尼崎市役所	尼崎市(復刻:名著出版)
伝説の兵庫県	1961(2000 再刊)	西谷勝也	神戸新聞総合出版センター(再刊)
郷土の民話 東播編	1972	編集:"郷土の民話"東播地区編 集委員会	兵庫県学校厚生会
国宝姫路城 播州皿家敷お菊物語	1973	岡本常太郎	いろは産業社
播磨伝説風土記	1976	編集:読売新聞社姫路支局	姫路駟路の会
史蹟の里 あお山	1979	編集:青山自治会、青山史蹟保 存協会	青山自治会、青山史蹟保存協会
佐用町史 中	1980	編集:佐用町史編さん委員会	佐用町
日本の伝説 43 兵庫の伝説	1980	宮崎修二郎、足立巻一	角川書店
妖怪の民俗学(ちくま学芸文庫)	2002(初出 1985)	宮田登	筑摩書房(初出:岩波書店)
日本伝説大系 4 北関東編	1986	編集:渡邊昭五	みずうみ書房
阪神間の民話散歩 むかしと今と	1987	編集:読売新聞阪神支局	阪神読売会
姫路市史 14 別編姫路城	1988	姫路市史編集専門委員会	姫路市
日本伝説大系 8 北近畿編	1988	編集:福田晃	みずうみ書房
「城東地区」をたずねて 文化財見学シリーズ 24	1990	横山忠雄	姫路市教育委員会文化部文化課
姫路市史 11上 史料編近世2	1996	姫路市史編集専門委員会	姫路市
江戸東京の怪談文化の成立と変遷	1997	横山泰子	風間書房
「青山地区」をたずねて 文化財見学シリーズ 40	1998	出口隆一	姫路市教育委員会文化部文化課
雅楽頭酒井家の『六臣譚筆』について(収録:兵 庫県立歴史博物館紀要『塵界』12号)	2000	堀田浩之	兵庫県立歴史博物館
日本の皿屋敷伝説	2002	伊藤篤	海鳥社
『皿屋敷』はワンダーランド 『播州皿屋敷』の ヒロイン、お菊さん (収録:橘川真一編著『は りま伝説散歩』)	2002	埴岡真弓	神戸新聞総合出版センター

所在地リスト



利神城跡	佐用町平福、口長谷
青山	姫路市青山2丁目、青山5丁目、青山西4丁目、青山北3丁目
車門跡	姫路市本町
十二所神社	姫路市十二所前町120
姫路城	姫路市本町
桐の馬場跡	姫路市本町
竹の門跡	姫路市城東町竹之門、五軒邸4丁目
随願寺	姫路市白国5
御着城跡	姫路市御国野町御着
大物浦	尼崎市大物町

ひょうご歴史ステーション「ひょうご伝説紀行」は、兵庫県立歴史博物館により管理・運営しております。サイトで使用するテキスト・画像などのコンテンツ全般の著作権は当館に帰属し、無断での複写・転用・転載などを禁止いたします。

ひょうご伝説紀行 妖怪・自然の世界
<http://www.hyogo-c.ed.jp/~rekihaku-bo/historystation/legend3/>

編集発行 兵庫県立歴史博物館
 〒670-0012 兵庫県姫路市本町6-8 079-288-9011

第1刷 2009年4月1日

ひょうご伝説紀行
妖怪と自然の世界

子育て幽霊
墓場で生まれた赤ん坊

伝説

子育て幽霊
墓場で生まれた赤ん坊

紀行

高僧と幽霊
・三田永沢寺
・曹洞宗寺院と子育て幽霊伝説
・産女と餅を買う女

関連情報

用語解説
参考書籍
所在地リスト

伝説

子育て幽霊 墓場で生まれた赤ん坊

三田市（さんだし）の北部、篠山市（ささやまし）との境目近くに、永沢寺（ようたくじ）というお寺があります。このお寺を開いた通幻禅師（つうげんぜんじ）は、お墓から生まれたと伝えられています。ある夜のこと、村にある飴屋（あめや）さんは、コツコツと戸をたたく音に気づきました。

「こんな時間にだれじゃろう。」

と、戸を開けると、青白い顔をした女の人が立っていて、

「夜分にすみません。飴を一つください。」

と、銭を出しました。その銭の冷たいこと冷たいこと。飴屋のおじいさんはぞっとしました。女の人は飴を買うと、夜のやみにとけるように消えていきました。

それからというもの、毎晩毎晩、同じ女の人が飴を買いにくるようになりました。おじいさんとおばあさんは、どうにもうす気味悪くなって、お寺の和尚（おしょう）さんに相談しました。

「おかしな話じゃな。わしが様子を見てみるとしよう。」

和尚さんは飴屋さんにやってきて、女の人がくるのを待つことにしました。

その夜も、やはり女の方は飴を買いにきました。買った飴を大事そうにかかえてまた夜のやみに消えていこうとします。和尚さんがその跡をつけて行くと、女の方は村の墓場へ向かい、新しくうめられたばかりの墓へ、すーっと吸いこまれるように消えていきました。

するとその墓の中から、「おぎゃあ、おぎゃあ。」という赤ん坊の泣き声と、それをあやす女の方の声が出ます。

和尚さんはおどろきましたが、すぐに気をとりなおして、声が出るお墓を掘り返しました。すると、このあいだ亡くなったばかりの女の方の遺体のそばで、まるまると太った男の子が泣きながら飴をしっかりとにぎりしめていたのです。

和尚さんはすぐにこの子をだきかかえると、飴屋さんへ急いで帰りました。

「この子は、仏様がさずけてくださった子供じゃ。大事に育ててはもらえないだろうか。」

おじいさんとおばあさんも、和尚さんの言うとおりの思い、大切に赤ん坊を育てることにしました。

赤ん坊は、大きくなってからきびしい修行をつみ、立派なお坊さんになりました。このお坊さんが、永沢寺を開いた通幻禅師だと伝えられています。

（『郷土の民話』丹有編をもとに作成）

紀行 高僧と幽霊

三田永沢寺

三田市（さんだし）北部の山中にある永沢寺（ようたくじ）。すでに「ひょうご伝説紀行 神と仏」の「『くわばらの里』から武庫川左岸に沿って」でも紹介しているが、この寺は、南北朝時代に通幻寂霊（つうげんじゃくれい）という曹洞宗（そうとうしゅう）の僧侶が開いた寺である。通幻は、比叡山（ひえいざん）で出家し、能登国（のとのくに＝現在の石川県北部）総持寺（そうじじ）などで修行をつんだ後、応安3（1370）年、室町幕府の重臣だった細川頼之（ほそかわよりゆき）の招きによって永沢寺を開いたとされる。弟子たちにも通幻十哲（つうげんじゅってつ）とよばれる優れた人々が出て、各地に多数の寺を開き、曹洞宗の中で通幻派と呼ばれる一派を形成することとなった。



永沢寺



永沢寺

こうした永沢寺に伝わっているのが、妊娠中に亡くなって葬られた母親から、墓の中で生まれたのが通幻であるとする伝説である。死んでもなお子供を守ろうとする母の愛の深さが、幽霊の薄気味悪さとともに人々の心をつかんだのであろう。この伝説は、全国各地の曹洞宗系の寺院でも布教のために語られていたことが指摘されていて、類話は全国的に存在する。その広がりが宗教と密接に結びついていたことがわかりやすい事例として、この伝説は興味深い。

曹洞宗寺院と子育て幽霊伝説

たとえば、県域でも伊丹（いたみ）や香美町（かみちょう）などの各地で伝えられている。ここでは、香美町香住区（かすみく）の通玄寺（つうげんじ）を紹介しておこう。訪れたのはちょうど秋の紅葉たけなわの時期、写真の通り境内の中央に立つ銀杏の木があざやかな黄金色に輝いていた。



通玄寺

このお寺に伝わる伝説も、三田永沢寺と全く同じもので、臨月で亡くなった母親の幽霊が夜な夜な飴を買いにくること、墓の中で産み落とした子供が通幻であること、が伝えられている。また、お寺のお話では、伝説に登場する飴屋さんも、現在は廃業しているものの、近くにあるという。なお、通玄寺は宗派上では臨済宗（りんざいしゅう）の寺院であるが、通幻が出生地の浦富（うらどみ）に帰る途中に再興した寺であると伝えられている。

つぎに、鳥取県岩美町浦富を訪ねてみた。浦富は、鳥取藩の重臣鶴殿（うどの）氏の陣屋があった近世以来の町場で、現在でも旧街道に沿って商家が並ぶ街村の雰囲気をよく残している。こうした浦富市街地の北はずれに、香林寺（こうりんじ）というお寺の跡がある。ここに、「土葬神碑（つげのさいひ）」、「子持地蔵」、「母子愛碑」という3つの石碑が並べられていて、通幻の生誕地であると伝えられている。



香林寺跡



土葬神碑



子持地蔵



母子愛碑



浦富の町並み

通幻の生誕地には書物によって諸説があり、曹洞宗関係者が著した書物だけで見ても、浦富説のほかに、豊後国（ぶんごのくに＝現在の大分県）武蔵郷（むさしごう）の出身とする説、京都出身とする説などがある。書物の数としては京都とするものが多いようだが、出生地をめくってこうした諸説が出てくる背景には、子育て幽霊伝説の広まりがある。語り手によっては、通幻の出生地をそれぞれの地域に引き付けて語ることもあったようだ。

産女と餅を買う女

子育て幽霊伝説とよく似た話として、「産女（うぶめ）」という妖怪の話がある。妊娠中に亡くなった女性が、赤子を抱いて幽霊として現れる、というもので、これも全国的に分布している。産女は、通りかかった人に赤子を抱かせ、抱いた人は一定の試練を乗り越え、怪力や金品などの福を得る、という話になっているものが多い。産女の話は、12世紀成立の『今昔物語集』にその原型が見え、比較的古い話である。

また、妊娠したまま死亡した女性を葬るときには、腹を割いて胎児を取り出してから葬るべきとする慣習が全国的にあったことが指摘されている。母親の霊を、胎児に対する心残りから解き放って成仏させるために、母体と胎児を分離する必要があると考えられていたようだ。ただし、こうした慣習や考え方は、中世の末期ごろから社会に広まっていったと見られていて、産女の話よりは新しい。

そして、このような慣習や考え方の広まりに対応して、妊娠したまま死亡した女性に関する葬送儀礼も発達していったようだ。たとえば江戸時代の曹洞宗の場合、実際に腹を割いて胎児を取り出すのではなく、僧侶の呪法によって母子が分離したと信じさせる方法が採られていたという。

子育て幽霊伝説は、こうした妊娠女性の葬送に関する知識や経験をもとに、僧侶たちによって、その効験を広める説法の中で生み出されたものと考えられている。その際、古くから語り継がれてきた産女の話も、素材の一つとなったと見てよいだろう。

なお、通幻と似たような子育て幽霊伝説は、別の宗派の僧侶にも見られる。たとえば、関東地方で伝えられている頭白上人（ずはくしょうにん）伝説がある。頭白は15世紀末～16世紀初頭に実在した人物で、北関東を中心に石塔造立などの宗教活動を進めた僧侶である。彼にも、殺された母親から墓の中で生まれ、母親の幽霊が夜な夜な飴を買いにきた、との伝説があり、そのため生まれながらに頭髪が白かったという。さらに話によっては、死後大名に生まれ変わって、自らの敵である別の大名を討ったとするものもある。

頭白伝説は、天台宗や真言宗、浄土宗などの寺院と結びつけて語られていて、曹洞宗との結びつきは希薄である。このほか、時宗の国阿（こくあ）、浄土宗の学信（がくしん）、浄土真宗の大巖（だいごん）、日蓮宗の日審（にっしん）など、さまざまな宗派の僧侶にも、子育て幽霊伝説がある。マイナスイメージの言葉ではあるが、一般に「葬式仏教」とも言われるように、江戸時代以降は、僧侶が庶民の葬送儀礼にたずさわることは宗派を問わず一般化していた。そうした状況の中で、さまざまな宗派で、布教や説法のために、高僧に関する子育て幽霊伝説が語られるようになったと考えられるのである。



産女（『怪物画本』、個人蔵）



頭白が勧進した板碑
（千葉県香取市大根）

さらに、子育て幽霊伝説は、中国の説話との関連も指摘されている。12世紀の南宋（なんそう）のころに成立した『夷堅志（いけんし）』に、「餅（ピン）を買う女」として、よく似た話が載せられている。

ある民家の妻が妊娠中に死亡したので墓地に葬った。そのころから餅屋へ赤子をかかえて毎日餅を買いに来る女があり、餅屋の者が怪しんであとをつけると墓場のあたりで消え失せた。いよいよ怪しく思ったので、女の裾に赤い糸を縫いつけてあとをつけていくと、果たして糸は草むらの塚の上にかかっていた。死んだ女の家族が塚を掘り返すと、赤子は棺の中で生きていたという。

この話に出てくる「餅」とは、日本の「もち」ではなく、小麦粉を練った生地を焼いたパンに近い食べ物である。曹洞宗を含む禅宗の僧侶たちは、こうした中国のものを含むさまざまな説話集をよく読んでおり、説法の素材としてよく使っていたとされている。

このように、子育て幽霊の場合は、伝説の生成と伝播において、曹洞宗をはじめとする僧侶たちが深くかかわっていたことがわかっている。歴史の中で、僧侶たちは布教のために、日本国内はもとより、海を越えた中国の説話なども参考にしながら、さまざまな物語をアレンジしながら語り広めていたようだ。このことは紀行文「犬と人」や「岩と樹木」でも述べている。宗教に限らず、何か大切なことを社会に伝えるためには、受け入れやすくするためのいろいろな工夫も必要であるが、これは今に始まったことではないようだ。ただし、その工夫の仕方には、時代ごとの特徴がある。



産女（『復襲爰八高砂
（かたきうちこはたかさご）』、
個人蔵）

用語解説

【通幻寂霊】つうげんじゃくれい

1322 91。南北朝時代に活躍した曹洞宗（そうとうしゅう）の僧侶。比叡山（ひえいざん）で出家後、豊後国（ぶんごのくに＝現在の大分県）大光寺、加賀国（かがのくに＝現在の石川県）大乘寺などで修行し、応安元（1368）年には曹洞宗大本山総持寺（そうじじ）の住持となる。また、応安3（1370）年には丹波国に永沢寺を開き、そのほか、加賀国聖興寺、越前国（えちぜんのくに＝現在の福井県東部）竜泉寺を開いた。了庵慧明（りょうあんえめい）ら通幻十哲（つうげんじゅってつ）と呼ばれる弟子たちが全国に寺院を開き、曹洞宗の中での一流派となった。

【曹洞宗】そうとうしゅう

禅宗の宗派の一つ。日本では、鎌倉時代にこの宗派の教えを伝えた道元（どうげん）の法系によって代表される。道元は、現在の福井県永平寺町（ふくいけんえいへいじちょう）に永平寺を開いた。曹洞宗は、南北朝・室町時代以降になると、庶民の葬送儀礼に積極的に関わることによってその教線を広げていった。

【総持寺】そうじじ

石川県輪島市門前町（いしかわけんわじましもんぜんまち）にあった曹洞宗の大本山の一つ。もとは真言宗の寺であったというが、元亨元（1321）年、瑩山紹瑾（けいざんじょうきん）が律宗から禅宗にあらため、永平寺（えいへいじ）とならぶ曹洞宗の大本山となった。1898（明治31）年、火災による焼失を契機に移転計画が進められ、1911（明治44）年に神奈川県横浜市鶴見区（かながわけんよこはましつるみく）に移転した。なお、輪島市門前町には現在も総持寺祖院が残る。

【『夷堅志』】いけんし

中国南宋（なんそう）の時代に洪邁（こうまい、1123 1202）が編纂した奇談集。洪邁は政府の官僚で、歴史書の編纂にも従事した知識人。もと420巻あったが、多くは早く散逸したと見られている。人智を超えた怪異・奇跡の話を集める書物は、中国では六朝時代（りくちょうじだい、3世紀～6世紀）に盛んで、こうした書物を「志怪（しかい）」と呼んだ。『夷堅志』は、こうした流れをくむ新しい時期の書物である。

参考書籍

伝説の参考書籍

書籍名	刊行年	著者名	発行者
兵庫の民話(日本の民話 25)	1960	編集:宮崎修二郎、徳山静子	未来社
郷土の民話 丹有編	1972	編集:"郷土の民話"丹有地区編集委員会	兵庫県学校厚生会
兵庫のむかし話	1978	編著:兵庫県小学校国語教育連盟	日本標準
日本伝説大系 8 北近畿編	1988	編集:福田晃	みずうみ書房
三田の民話 上	1990	編集:三田の民話編集委員会	三田市教育委員会

歴史・文化の参考書籍

書籍名	刊行年	著者名	発行者
葬送墓制研究集成 1 葬法	1979	編集:土井卓治、佐藤米司	名著出版
赤子塚の話(収録:『定本柳田國男集』12)	1963	柳田國男	筑摩書房
亡霊子育て伝説(収録:『兵庫県民俗資料』17)	1935	桜谷忍	兵庫県民俗研究会
伝説の兵庫県	1961 (2000再刊)	西谷勝也	神戸新聞総合出版センター (再刊)
但馬海岸 但馬海岸地区民俗資料緊急調査報告書	1974	編集:兵庫県教育委員会文化課	兵庫県教育委員会
日本物語通観 16 兵庫	1978	責任編集:稲田浩二、小沢俊夫	同朋舎
日本の伝説 43 兵庫の伝説	1980	宮崎修二郎、足立巻一	角川書店
兵庫の伝説 1	1981	編集:有井基、絵:のざきジョー	神文書院
日本伝説大系 4 北関東編	1986	編集:渡邊昭五	みずうみ書房
近世仏教説話の研究 唱導と文芸	1996	堤邦彦	翰林書房
近世説話と禅僧	1999	堤邦彦	和泉書院
怪異の民俗学 6 幽霊	2001	責任編集:小松和彦	河出書房新社
「胎児分離」埋葬の習俗と出産をめぐる怪異のフォークロア その生成と消滅に関する考察 (収録:小松和彦編『日本妖怪学大全』)	2003	安井真奈美	小学館
三田市史 9 民俗編	2004	編集:三田市総務部市史編さん課	三田市
勸進聖頭白上人の探索(収録:『栃木県立文書館研究紀要』11)	2007	峰岸純夫	栃木県立文書館
怪力乱神	2007	加藤徹	中央公論新社

所在地リスト



永沢寺	三田市永沢寺210
通玄寺	香美町香住区香住236-1
浦富	鳥取県岩美町浦富
大根	千葉県香取市大根

ひょうご歴史ステーション「ひょうご伝説紀行」は、兵庫県立歴史博物館により管理・運営しております。サイトで使用するテキスト・画像などのコンテンツ全般の著作権は当館に帰属し、無断での複写・転用・転載などを禁止いたします。

ひょうご伝説紀行 妖怪・自然の世界
<http://www.hyogo-c.ed.jp/~rekihaku-bo/historystation/legend3/>

編集発行 兵庫県立歴史博物館
 〒670-0012 兵庫県姫路市本町6-8 079-288-9011

第1刷 2009年4月1日

ひょうご伝説紀行
妖怪と自然の世界



平家の怨霊
黒雲の彼方の武者

伝説

平家の怨霊
黒雲の彼方の武者

紀行

戦争と怨霊
・義経の都落ち
・布引の滝と悪源太義平
・秦武文の怨霊
・敗者の鎮魂

関連情報

用語解説
参考書籍
所在地リスト

伝説

平家の怨霊 黒雲の彼方の武者

今からおよそ800年前のこと、平家一門を今の山口県（やまぐちけん）にある壇ノ浦（だんのうら）でほろぼした源義経（みなもとのよしつね）は、兄の頼朝（よりとも）と仲たがいでしてしまい、とうとう兄と戦う決心をかためました。しかし、都にいては従う軍勢も少なく、とても兄には勝てません。そこで義経は、九州・四国へ下り、その地の武士たちを味方につけて戦おうと考え、京の都を落ちることにしました。

途中で頼朝に味方をする武士たちが攻めかかってきましたが、義経たちはなんとかこれを追いはらい、今の尼崎（あまがさき）にあった大物浦（だいもつうら）から船出しました。今も三宮（さんのみや）にある生田神社（いくたじんじゃ）の森や、今は大きな工場がある和田岬（わだみさき）を見ながら進んでいくと、明石（あかし）の海峡（かいきょう）が近づいてきました。このあたりは、かつて義経たちが平家をさんざんに打ち破った一ノ谷の戦場の沖合（おきあい）です。

しかしそのころから、遠い西の山の奥に真っ黒な雲がわき上がってきました。そして、見る見るうちにあたりをおおうと、横なぐりの雨と風が吹きつける大嵐（おおあらし）になりました。義経たちの乗った船は、木の葉のように波にもまれていきます。そんな中、真っ黒い雲の彼方（かなた）に武者の姿がうかび上がってきました。

「あれは、壇ノ浦で海にしずんだ平知盛（たいらのとももり）だ。」

だれかがさげびました。みな息をのんで見つめていると、今度は海の中からたくさんの武者たちの手があらわれ、はい上がろうと船べりにつぎつぎと手をかけてきました。義経たちは、必死で刀をふるって、はらいのけようと戦いはじめました。

伝説

平家の怨霊 黒雲の彼方の武者

「弁慶（べんけい）、これはどうしたことが。」

「義経様、平家一門は、海に身を投げるとき、口々にこう言ったそうです。『われわれが負けたのは天運がなかったまでのこと。やむをえない。しかし、われわれはどこまでも怨霊（おんりょう）となって源氏をたたってやる。』いま、その怨霊たちがあらわれたのです。ここは私におまかせください。」

弁慶はそう言うと白木（しらき）の弓を持ち、船のへさきに仁王立ち（におうだち）になると、神仏の加護（かご）を祈りながらつぎつぎと黒雲に向けて矢を射かけました。すると、海の中の怨霊たちの勢いもしだいに弱まっていき、やがて消えてしまいました。

しかし、その後も嵐はやむことはありませんでした。義経たちの乗った船は、とうとう西へ向かうことはできず、今の大阪の海辺に流れ着きました。その後、義経は吉野（よしの = 現在の奈良県吉野町）の山にかくれ、さらに奥州平泉（おうしゅうひらいずみ = 現在の岩手県平泉町）へと落ちのびていくことになったのです。

（『義経記』をもとに作成）

紀行 戦争と怨霊

義経の都落ち

源平合戦のヒーロー、源義経（みなものよしつね）。平家との戦争で大きな功績をあげながら、直後に兄頼朝（よりとも）と対立し、ついに奥州平泉（おうしゅうひらいずみ）で滅んだ生涯は、古来たくさんの物語や伝説を生み出してきた。県域にかかわるものについては、すでに「ひょうご伝説紀行 語り継がれる村・人・習俗」のいくつかの紀行文でも紹介している。



大物主神社

今回とりあげた話は、文治元（1185）年、都にいた義経が、頼朝から刺客（しかく）を送られたためついに兄と戦うことを決意し、11月初めに軍勢を集めるため西国を目指して都落ちをした事実を基礎としている。

現在、尼崎市街地の東部にその名を残す大物浦（だいもつうら）は、「ひょうご歴史の道 江戸時代の旅と名所」でも紹介したとおり、古代以来、瀬戸内海水運と、都へつながる淀川・神崎川水運（よどがわ・かんざきがわすいうん）との結び目として繁栄した港町である。ここを出航した義経一行が嵐にあって難破し、その後いったん行方不明になったことは、同時代の公家日記『玉葉（ぎょくよう）』にも記されている。



大物主神社境内の
義経・弁慶隠家跡碑

義経一行の難破が、平家の怨霊（おんりょう）のたたりであるとする話は、鎌倉時代前半に成立した『平家物語』でも記されている。ただし、『平家物語』は平家の滅亡を描くことに主題があり、義経の話はそれほど詳しくない。この話も、あらすじとして述べられるにとどまっている。

今回とりあげた話は、室町時代に成立した『義経記（ぎけいき）』をもとにして紹介した。『義経記』は、『平家物語』とは逆に、義経を主役として描かれた文芸作品である。また、この話では武蔵坊弁慶（むさしぼうべんけい）が活躍し、怨霊を退散させているが、このように弁慶が重要な役割を演じるようになるのも『義経記』の特徴である。



錦絵
摂州大物浦平家怨霊顕るゝ図
(個人蔵)



明石海峡



明石海峡から一の谷古戦場を
望む(中央の山が鉢伏山)



一の谷古戦場

布引の滝と悪源太義平

この話と同様に、源平合戦を素材とした伝説として、義経や頼朝の兄である悪源太義平（あくげんたよしひら）を主人公にした怨霊話がある。舞台はこれも「ひょうご歴史の道」で紹介した神戸市中央区の布引の滝。悪源太義平は、源氏の棟梁（とうりょう）源義朝（みなもとのよしとも）の長男で、父義朝が平清盛（たいらのきよもり）と戦った平治の乱（へいじのらん）でも奮戦したが、敗戦後捕らえられ、清盛の郎党（ろうとう）難波経房（なにわのつねふさ）の手によって斬首された。

その後清盛は朝廷の実権を握るまでに上りつめ、現在の神戸市兵庫区内にあたる福原（ふくはら）に別荘をかまえた。そうしたころ、名所として名高い布引の滝（ぬのびきのたき）を遊覧した清盛一行の前に、義平の怨霊が姿を現した。清盛を守るために難波経房が立ち向かうが、怨霊の火の玉の前にあえなく敗れ、太刀（たち）をふりかざしたまま死んでいた、という話である。

この怨霊話の源流も、源平合戦を描いた軍記物の『平治物語』にある。『平治物語』は、鎌倉時代前半に成立したもので、伊丹（いたみ）の昆陽野（こやの）で難波経房が雷となった義平の怨霊に殺されるという話が載せられており、ここから発展した話と考えられるのである。



布引の滝雄滝



布引の滝雌滝



布引滝
（『摂津名所図会』）



平相国布引瀧詣
（『摂津名所図会』）



版本『平治物語』

秦武文の怨霊

もう一つ、尼崎を舞台とした怨霊話を紹介しておこう。紀行文「海からやってくるもの」でも紹介している沼島女郎（ぬしまじょうろう）の伝説である。この話の前半に、土佐国（とさのくに = 現在の高知県）に流された尊良親王（たかよしんのう）を追って、お妃（きさき）が尼崎から船出をする場面がある。ここでお妃は海賊にだまされ、お供をしていた秦武文（はたのたけぶん）という武士から引き離されて連れ去られてしまう。だまされたことに気づいた秦武文は大急ぎで小舟に乗って海賊船を追いかけるが、ついに追いつけず、無念のあまり海に飛び込んで自殺してしまう。その後、海賊船が鳴門海峡（なるとかいきょう）にさしかかったところで、大嵐とともに海から武文の怨霊が現れ、これを恐れた海賊がお妃を小舟に乗せて放す、という話である。

これは、南北朝の内乱を描いた軍記物『太平記』に見えるもので、江戸時代の名所案内類にもよく載せられている話である。かつてはよく知られていた尼崎の伝説の一つであった。



大物橋
（『兵庫名所図巻』）



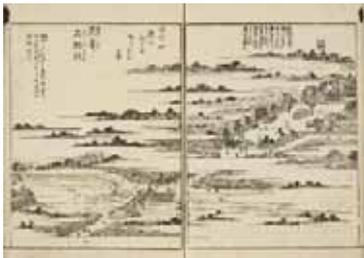
秦武文
（『淡路国名所図絵』）



秦武文
（『淡路国名所図絵』）

敗者の鎮魂

ここでは、いずれも争いに負けたものが怨霊となって勝者をおびやかす伝説を紹介した。いつの世も、敗者の怨霊はたやすく放置できない深刻なものであった。「ひょうご伝説紀行 語り継がれる村・人・習俗」の「道真の旅」で紹介した菅原道真（すがわらのみちざね）伝説もこうした心情から生まれたもので、敗者の霊を慰め、逆にその霊威によって守ってもらおうとの願いが天神信仰として広まっていったのである。



尼崎大物社（『撰津名所図会』）



尼崎大物橋跡



尼崎大物橋跡

中世には、源平合戦をはじめとして、多数の敗者が出る内戦が断続的に繰り返された。つぎつぎと生み出される敗者への鎮魂は、その時々政府にとっても重要な政治課題であった。源平合戦の後、朝廷は高野山の根本大塔（こんぼんだいとう）に荘園を寄進するなどして平家の霊の供養に努め、南北朝内乱においても、室町幕府は諸国に安国寺（あんこくじ）を建て、戦没者の慰霊を行っている。



尼崎より須磨浦まで遊覧の風景
（『撰津名所図会』）



尼崎左門殿川河口付近
（かつてはこのあたりは海であった）

そして、敗者の戦いのありさまを語り伝えることも、そうした鎮魂の行いの一環としての意味を持っていたようだ。『平家物語』などの軍記物は、それを語ること自体に、敗者への鎮魂という性格があった、という説も有力である。

歴史の中では人々のさまざまな考え方が変わっていく。しかし、こうした敗者への畏れについては、程度の差はあるが、現代の我々も持ちつづけているのではないだろうか。

用語解説

【源義経】みなもとのよしつね

1159 89。源義朝（みなもとのよしとも）の九男。平治の乱（1159年）で父が敗死した後、鞍馬山（くらまやま）に預けられるが、後に脱出して陸奥国平泉（むつづくにひらいずみ＝現在の岩手県平泉町）へ向かい、藤原秀衡（ふじわらのひでひら）の庇護を受けた。

治承4（1180）年に兄の頼朝（よりとも）が挙兵すると平泉を離れてこれに合流する。寿永2（1183）年末に兄の範頼（のりより）とともに頼朝の代官として軍勢を率いて出陣し、翌年1月に源義仲（みなもとのよしなか）を討ち取る。ついで同年2月には一の谷の戦い（いちのたにのたたかい＝現在の神戸市）で平家に壊滅的打撃を与えた。翌元暦2（1185）年2月に讃岐国屋島（さぬきのくにやしま＝現在の香川県高松市）で平家を破り、続いて3月に長門国壇ノ浦（ながとのくにだんのうら＝現在の山口県下関市）で平家を滅ぼした。

しかしその直後から頼朝との対立が深まり、文治元（1185）年11月に西国へ向けて都を離れるが、大物浦（だいまつうら＝現在の尼崎市）付近で嵐のために遭難、以後陸奥国平泉へ逃れて再び奥州藤原氏の庇護を受ける。しかし、秀衡没後の文治5（1189）年4月、頼朝からの圧力に屈した藤原泰衡（やすひら）によって殺害された。

【源頼朝】みなもとのよりとも

1147 99。源義朝（みなもとのよしとも）の三男。平治の乱（1159年）後捕らえられ、伊豆国（いずのくに＝現在の静岡県東部）に流罪（るざい）となる。治承4（1180）年8月、反平家の兵を挙げ、同年末には鎌倉を拠点とする地方政権を確立した。

寿永2（1183）年10月には東国の軍事支配権を朝廷から認められ、ついで弟の範頼（よりのり）、義経（よしつね）を西国へ派遣して源義仲（よしなか）や平家との戦いを進め、元暦2（1185）年3月の壇ノ浦の戦い（だんのうらのたたかい）で平家を滅亡させる。同年11月には、反旗を翻した義経を逮捕するためとの名目で、全国に守護・地頭（しゅご・じとう）を置く権限を朝廷に認めさせる。さらに義経を庇護する奥州藤原氏に圧力を加え、文治5（1189）年にこれを征服した。

建久3（1192）年7月に征夷大將軍（せいいたいしょうぐん）に任命される。晩年は娘を天皇の後としようとするなど朝廷への影響力拡大に努めたが、病を得て建久10（1199）年1月に死去した。

【平泉】ひらいずみ

現在の岩手県平泉町（いわてけんひらいずみちょう）。平安時代後半に東北地方で勢力を広げた奥州藤原氏の本拠地。11世紀末～12世紀初めに、奥州藤原氏初代の清衡（きよひら）が本拠をこの地に移したとされる。藤原氏の居館として柳之御所（やなぎのごしょ）、加羅御所（からのごしょ）などがあり、初代清衡の中尊寺（ちゅうそんじ）、2代基衡（もとひら）の毛越寺（もうつうじ）、3代秀衡（ひでひら）の無量光院（むりょうこういん）など、歴代の当主が造営した大寺院が薨（いらか）を並べていた。

用語解説

【大物浦】だいもつうら

現在の尼崎市街地東部。淀川へとつながる神崎川の河口に開けた都市。物流の大動脈であった瀬戸内海と都とを結ぶ、淀川・神崎川水運との結節点として、平安時代後期以来繁栄した。平安時代には、大物や神崎（現在の尼崎市西川付近）など神崎川河口部に展開していたいくつかの港を総称して「河尻（かわじり）」とも呼ばれていた。その後、河口部の土砂堆積によって陸地が少しずつ沖合に前進していった結果、鎌倉後期ごろからは、大物から見て西南の地域を指す地名である尼崎が、この周辺を代表する地名として定着していった。

【『玉葉』】ぎょくよう

12世紀末期の摂政（せつしょう）・関白（かんぱく）であった九条兼実（くじょうかねざね）の日記。現存するものは、長寛元（1164）年から建仁3（1203）年までにわたる。現在は欠落してしまっている時期のものも多い。しかし、平家の最盛期から鎌倉幕府の創設期に関する記録であり、兼実の上級公家という立場から、記された情報は公家・武家双方について比較的豊富かつ正確であり、史料的价值は高い。

【『平家物語』】へいけものがたり

鎌倉時代前半に成立した軍記物語。平家の興隆と滅亡を、仏教的な無常観を底流に置きながら記した書物。著者については、天台座主慈円（てんだいざすじえん）の周辺の人物が執筆したとの説などが注目されているが、確定的な説はない。『保元物語（ほうげんものがたり）』、『平治物語（へいじものがたり）』、『承久記（じょうきゅうき）』とともに、「四部合戦状（しぶがっせんじょう）」とも称される。これらの書物は、一定の事実を示す史料や当事者の証言なども参照しながら執筆されたと考えられている。したがって、記述の中の事実を記す部分と物語的な創作の部分との区別は、それぞれについて吟味する必要がある。

【『義経記』】ぎけいき

室町時代に成立した軍記物語。『平家物語』とは対照的に、義経の出生と奥州下り、また源平合戦後の没落の過程を中心に描く。当時すでに成立していた義経伝説や、作者の創作が多分に織り込まれている。これ以後の謡曲（ようきょく）や浄瑠璃（じょうるり）における義経関係作品にも、大きな影響を与えた。

【源義平】みなもとのよしひら

1141 - 1160。源氏の棟梁である源義朝（みなもとのよしとも）の長男。長男であったが母の出自から弟の頼朝（よりとも）が嫡男として扱われていたとされる。父と同様に少年期に関東へ下向し、久寿2（1155）年には父と対立していた叔父の源義賢（みなもとのよしかた）を武蔵国大蔵館（むさしのくにおおぐらのたち＝現在の埼玉県比企郡嵐山町）に攻めて討ち取った。平治の乱で父義朝とともに戦ったが敗れ、京都周辺に潜伏中に捕らえられて処刑された。

用語解説

【源義朝】みなもとのよしとも

1123 1160。源氏の棟梁（とうりょう）である源為義（みなもとのためよし）の嫡男。少年期に関東へ下向し、相模国（さがみのくに＝現在の神奈川県）を拠点として南関東を中心に勢力を広げた。保元元（1156）年に発生した保元の乱では父や多くの弟たちと別れて後白河天皇（ごしらかわてんのう）の方に付いて勝利する。ついで平治元（1159）年の平治の乱で、藤原信頼（ふじわらののぶより）と組んで政権奪取を狙った。しかし、平清盛（たいらのきよもり）らの軍勢に敗れ、東国方面へ脱出したが、尾張国（おわりのくに＝現在の愛知県西部）で殺害された。

【平清盛】たいらのきよもり

1118 1181。伊勢平氏の棟梁である平忠盛（たいらのただもり）の嫡男として生まれる。実は白河法皇（しらかわほうおう）の落胤（らくいん）という説も有力。保元の乱（1156年）、平治の乱（1159年）でいずれも勝利した側につき、その後の中央政界で大きな力をふるうようになる。仁安2（1167）年に太政大臣（だじょうだいじん）となるが、3ヶ月で辞任し、長男の重盛（しげもり）を後継者とする。翌年に病のために出家し、その後は福原（ふくはら＝現在の神戸市兵庫区）の別荘に居住して日宋貿易を進めるとともに、必要に応じて上京しては時の政局を左右し続けた。治承3（1179）年、後白河法皇（ごしらかわほうおう）を幽閉して朝廷の実権を握り、翌年には遷都を目指して福原へ安徳天皇（あんとくてんのう）を移す。しかし、全国で反平氏の挙兵が続く中、天皇を京都へ戻し、治承5（1181）年閏2月に没した。

【『平治物語』】へいじものがたり

鎌倉時代前半に成立した軍記物語。平治元（1159）年に発生した平治の乱の経緯を記す。作者については、都の貴族層の中で考えられているが確定的な説はない。『保元物語（ほうげんものがたり）』、『平家物語（へいけものがたり）』、『承久記（じょうきゅうき）』とともに、「四部合戦状（しぶがっせんじょう）」とも称される。

【尊良親王】たかよししんのう

? 1337。後醍醐天皇の第一皇子。元弘元（1331）年に父天皇が鎌倉幕府打倒の兵を挙げると、それにしたがって笠置山に立てこもり、ついで楠木正成の河内の居城へ移った。しかし、10月に捕らえられて土佐国幡多（とさのくにはた＝現在の高知県中村市付近）へ流罪（るざい）となった。

建武の新政が始まると帰京したが、建武3（1336）年に反旗を翻した足利尊氏（あしかがたかうじ）が京都を攻め落とすと、弟の皇太子恒良親王（つねよししんのう）、新田義貞（にったよしさだ）とともに越前国（えちぜんのかみ＝現在の福井県東部）に下り、金ヶ崎城（かねがさきじょう＝現在の福井県敦賀市）に入った。しかし、翌年3月、足利方の攻撃によって金ヶ崎城は落城、両親王も自害した。

なお、名前の読みについては、「たかなが」とも読まれてきている。この点については、本用語解説の「大塔宮 護良親王（おおうのみやもりよししんのう）」の項目を参照されたい。

用語解説

【菅原道真】すがわらのみちざね

845 - 903。幼少より学問に優れたとされ、文章博士（もんじょうはかせ、大学寮の教官）や讃岐守（さぬきのかみ）などを歴任する。政治の刷新を進めた宇多（うだ）天皇（のちに譲位して上皇）の信任が厚く、右大臣（うだ いじん）にまで昇進した。しかし、学者出身の右大臣は異例であり、従来からの権勢を保持しようとする藤原氏をはじめ、他の貴族たちの反感を買い、謀反の疑いをかけられて、延喜元（901）年に大宰権帥（だざいのごんのそち）に左遷され、大宰府で没した。

【高野山金剛峰寺】こうやさんこんごうぶじ

和歌山県高野町（わかやまけんこうやちょう）にある高野山真言宗（しんごんしゅう）の総本山。京都の東寺（とうじ）とともに、弘法大師空海（こうぼうだいしゅうかい）が活動拠点にした寺院として真言密教（しんごん みっきょう）の聖地とされる。

弘仁2（816）年、空海は真言密教の道場として、高野山の地を朝廷から与えられ、伽藍（がらん）を建立した。紀行文「鳥」で述べた、高野明神と丹生都比売明神から寺地を譲られたとの伝説は、平安中期に成立したと見られる『金剛峰寺修行縁起（こんごうぶじしゅぎょうえんぎ）』から見られるものである。

【安国寺】あんこくじ

南北朝時代、足利尊氏（あしかがたかうじ）・直義（ただよし）兄弟が、帰依していた臨済宗（りんざいしゅう）僧の夢窓疎石（むそうそせき）の勧めにより、全国の国ごとに建立した寺院。また、それぞれの安国寺ごとに塔も建立され、「利生塔（りしょうとう）」と呼ばれた。国ごとに国分寺を建立した聖武天皇の事跡に倣い、後醍醐天皇以下の南北朝の戦乱で死没した人々の慰霊のために建立された。新たに建立されたものもあるが、既存の寺院を改修してこれに充てたものもある。

参考書籍

伝説の参考書籍

書籍名	刊行年	著者名	発行者
義経記(日本古典文学大系37)	1977	校注:岡見正雄	岩波書店
兵庫の伝説	1980	編著:兵庫県小学校国語教育連盟	日本標準
兵庫の伝説 2	1986	編集:有井基、絵:のざきジョー	神文書院

歴史・文化の参考書籍

書籍名	刊行年	著者名	発行者
摂陽群談(大日本地誌大系38)	1971	編纂:岡田溪志、編集校訂:葦田伊人	雄山閣
播州名所巡覧図絵	1974	著者:秦石田、校訂:井口洋	柳原書店
西撰大観 下	1911 (1965復刻)	編纂:仲彦三郎	明輝社(復刻:内外書房)
川辺郡誌	(1973復刻)	編纂:川辺郡誌編纂会	(復刻:中央印刷)
郷土の民話 神戸編	1973	編集:"郷土の民話"神戸地区編集委員会	兵庫県学校厚生会
日本の伝説 43 兵庫の伝説	1980	宮崎修二郎、足立巻一	角川書店
兵庫の伝説 1	1981	編集:有井基、絵:のざきジョー	神文書院
平家物語の思想	1989	渡辺貞磨	法蔵館
平治物語(新日本古典文学大系43『保元物語 平治物語 承久記』)	1992	校注:日下力	岩波書店
平家物語 下(新日本古典文学大系45)	1993	校注:梶原正昭、山下宏明	岩波書店
神戸の伝説	1998	田辺真人	神戸新聞総合出版センター
『平家物語』の構造と構想の課題(収録:軍記文学研究叢書7『平家物語 批評と文化史』)	1998	生形貴重	汲古書院

所在地リスト



一の谷	神戸市須磨区一ノ谷町ほか
布引の滝	神戸市中央区葺合町
大物浦	尼崎市大物町

ひょうご歴史ステーション「ひょうご伝説紀行」は、兵庫県立歴史博物館により管理・運営しております。サイトで使用するテキスト・画像などのコンテンツ全般の著作権は当館に帰属し、無断での複写・転用・転載などを禁止いたします。

ひょうご伝説紀行 妖怪・自然の世界
<http://www.hyogo-c.ed.jp/~rekihaku-bo/historystation/legend3/>

編集発行 兵庫県立歴史博物館
 〒670-0012 兵庫県姫路市本町6-8 079-288-9011

第1刷 2009年4月1日

ひょうご伝説紀行
妖怪と自然の世界

多可のあまんじゃく
夜明けに逃げ出すあわてもの

篠ヶ峰の鬼
のんきな鬼のお手伝い

伝説

多可のあまんじゃく
夜明けに逃げ出すあわてもの
篠ヶ峰の鬼
のんきな鬼のお手伝い

紀行

山に棲む鬼
・『播磨国風土記』の巨人伝説
・笠形山を登る
・多可町を訪ねる
・天の邪鬼とダイダラボッチ
・篠ヶ峰の鬼

関連情報

用語解説
参考書籍
所在地リスト

伝説

多可のあまんじゃく 夜明けに逃げ出すあわてもの

神崎郡市川町（かんざきぐんいちかわちょう）の東、多可郡多可町（たかぐんたかちょう）との境に、笠形山（かさがたやま）というきれいな姿をした山があります。むかしむかし、この山には「あまんじゃく」という名前の、ものすごい力持ちで、体の大きないたずらものが住んでいました。

あまんじゃくは、一度でいいから山の主になってみたいと思って、山の神様に力くらべをしようと持ちかけました。あわてものあまんじゃくは、山の神様がまだ返事をしないうちにひとり決めしてしまって、「わしは一晩のうちに多可郡の妙見山（みょうけんさん）まで石の橋をかけてやるんじゃ。」と言って、さっそく作りはじめました。

あまんじゃくは大急ぎで近所の山からたくさんの石を集めました。しかし、橋の脚（あし）にしようと大きな石の柱を立てたところで、「コッケコッコウー！」と一番鶏（いちばんどり）の聲がしてしまいました。お日さまの苦手なあまんじゃくは、そのまま大あわてで逃げ出しました。

このときあまんじゃくが立てたという石の柱が、いまでも笠形山の山頂近くに残っています。また、このあたりには石の板がたくさんころがっていますが、これもあまんじゃくが橋の板にするために集めたものだと言われています。

このあまんじゃく、多可郡では、ずっと南の明石（あかし）の方からやってきたと伝えられています。明石からずっときゅうくつそうに身をかがめてきたあまんじゃくは、多可郡までやってくると背をのぼして楽々と歩けるようになりました。そこで思わず、「ここは高いなあ。」と言ったので、この土地を「多可郡」と呼ぶようになったと言われています。

またある時、いつものいたずら心をおこしたあまんじゃくは、笠形山の岩を縄（なわ）で引きずりおろして運びはじめました。多可町の北の方から加美区（かみく）、八千代区（やちよく）を通過して、中区靴屋（なかくこうじや）まできたところで夜が明けてしまったので、そのまま逃げ帰ったと言われています。

さらにある時は、多可の谷の奥から全部の田にお供えを配って歩き、中区曾我井（なかくそがい）まできたところで夜が明けてしまったので、またもや逃げ帰ったとされています。おっちょこちょいで、どこかにくめない、そんなあまんじゃくのお話です。

（『郷土の民話』中播編、東播編をもとに作成）

伝説

篠ヶ峰の鬼 のんきな鬼のお手伝い

丹波市（たんばし）と多可郡多可町（たかぐんたかちょう）との境にそびえる篠ヶ峰（ささがみね）。この山には古くから鬼が住みついていた。ある日、このあたりを大きな嵐（あらし）が吹きすさびました。

やがて嵐が収まり、鬼がふと山の下を見ると、山すその牧山（まきやま）の里で人々があわただしく動き回っています。

「おやおや、滝つぼから水があふれて、里は水びたしじゃ。何とかしてやらにゃあいかんのう。」

鬼は川の水がどんどん落ちていく滝つぼに口をあて、「ぶうーっ。」と息を吹きこみました。すると不思議、滝つぼからあふれかえていた水は、見る見るうちに地下へ吸いこまれていきました。

これで牧山の里は水難から救われたのですが、地下にもぐった水は行き場を失い、東の船城（ふなき）の里へふき出してしまいました。船城の里は一面の水びたし、沼になってしまったのですが、のんきな鬼はそれを知りません。

「あー、いいことをした。人助けは気持ちがいいなあ。」

山の上へ帰った鬼は、ニコニコと牧山の里の人たちの楽しそうな姿をながめているのでした。

ところが、うまくいかないものです。こんどは日照りがやってきました。鬼が滝の水を地下に吹きこんでしまい、流れてくる川の水が少なくなっていたので、牧山の里では田畠へ回す水が足りなくなっていました。人々は急いで地面を掘り返して水がわいてくるところを探しています。

「しまった、しまった。わしの失敗じゃ。すぐに何とかしないと。」

またまた里へ降り立った鬼は、指で地面を一かき二かき。たくさんの井戸を作って、水が少なくても育つ栗（くり）や桑（くわ）をいっぱい植えていきました。

「こりゃ楽しい。どんどん増やしてやろう。」

つぎつぎと植わっていくようすに気分をよくした鬼は、牧山の里だけではなく、東の小川（おがわ）の里や久下（くげ）の里まで栗や桑を植えてまわりました。

伝説

篠ヶ峰の鬼 のんきな鬼のお手伝い

「あー、いい気持ちじゃわい。」

山の上へ帰った鬼は、満足げに下界をながめていました。ところがちょっと東の空へ遊びに行ってみると、船城の里が水びたしになっているのが見えます。人々は山から木を切り出して沼にしずめ、それを足場にしながら泥まみれで深田の稲（いね）を育てています。

「うーん、大変そうだなあ。よし、こっちも手伝ってやろう。」

鬼は植えたばかりの牧山の里の粟を間引いて、船城の里の沼に放りこみました。じつは張りきりすぎてすこしばかり粟を植えすぎていたのです。ちょうど良く間引かれた牧山の粟は大きな実をみのらせるようになり、船城の里の沼は浅くなって、豊かな水田が開かれていきました。

「さあ、もうこのくらいでいいだろう。」

鬼は天から与えられた二千年の命がつきようとしているのを知っていました。とうとうおむかえが来た日、鬼は名残りおしそうに牧山の里を見わたしながら、白い雲をちぎって里に投げ落としました。雲はふっくらとした蚕（かいこ）になって、きれいなまゆを作りました。里の人たちは、鬼が植えてくれた桑の葉をたっぴりと与え、たくさんの蚕を育てました。

「ついでに、こっちにも何かあげておかないと。」

鬼はへそをちぎって船城の里に投げ落としました。大きな鬼のへそは、田んぼの水の中に入るとくるくる回って、大きなタニシになりました。

こうして牧山の里は粟と蚕、船城の里はタニシの名産地となり、人々は豊かに暮らせるようになったのです。

（『郷土の民話』丹有編、『兵庫の伝説』第一集をもとに作成）

紀行

山に棲む鬼

『播磨国風土記』の巨人伝説

播磨の北部、多可郡多可町（たかぐんたかちょう）は四方を山に囲まれている。そうした山国に伝わった伝説が「天の邪鬼（あまのじゃく）」伝説である。多可では、「あまんじゃく」、あるいは「あまんじゃこ」と呼んでいるこの妖怪、役に立つのかどうかもわからないことをいろいろとしようとして、結局しくじってばかりという、かなりおちょこちょいな話が伝わっている。

ただし、この話の中にはかなり古い要素も含まれている。8世紀初めにできた『播磨国風土記（はりまのくにふどき）』では、多可郡の地名伝説としてつぎのような記述が見られる。



多可町加美区の山並み

むかし、巨人がいて、常に背をかがめて歩いていた。南の海から北の海へ、東から西へと巡り歩いているうちに、多可郡にたどりついた。巨人は「ほかのところは低いので、ずっと背をかがめていなければならなかった。でも、ここは高いので背が伸ばせる。ああ、高いなあ」と言った。それで、この地域を多可郡と言うのである。巨人の歩いた足跡は、たくさん沼になっている。

このサイトで紹介した伝説の冒頭部分は、この『風土記』の伝説とよく似ている。播磨の場合、『風土記』や中世の歴史書である『峰相記（みねあいき）』が残っているため、伝説の古いかたちがわかる場合が少なくない。この伝説も、古代に源をもち、時代を超えて語りつがれてきた話であることがわかる事例である。ただし、今日伝わっている伝説では、主人公が巨人からあまんじゃくに代わっていることに注意しておきたい。

ところで、『風土記』の巨人伝説は、全国的に見られる「ダイダラボッチ」という巨人伝説に相当する。巨人の足跡が沼や池になったという話は全国的に数多い。こうしたダイダラボッチの伝説で最もスケールが雄大なのは、滋賀県で伝えられていた琵琶湖と富士山の話であろうか。富士山はダイダラボッチが近江国（おうみのくに＝現在の滋賀県）の土を掘って運んでこしらえた山であり、琵琶湖はその掘られた跡である、という話である。多可郡の伝説も、こうしたダイダラボッチ型の伝説が『風土記』段階の古い形であって、それが後に「天の邪鬼」伝説と結びついたことで今日の姿になっていったのであろう。

こうしたダイダラボッチ型の巨人伝説は、一般的に山への信仰と深い関係があるとされている。多可の場合も、『風土記』の巨人が「ここは高い」と言ったのは、“山が高い”ということであろう。この巨人自体が、山を擬人化したものであるとの理解も示されている。そこまで言い切れるかどうかはともかくとしても、この地域の人々が持っていた、周囲の山への信仰が、この伝説を生み出す背景にあったことは確かだろう。

笠形山を登る

神崎郡市川町（かんざきぐんいちかわちょう）・神河町（かみかわちょう）・多可郡多可町の境界に位置する笠形山（かさがたやま）は、別名播磨富士と呼ばれ、笠の形にも見えるきれいな三角形の山頂部は、市川の中流域や多可郡の平野部など、かなり遠くからもその姿を望むことができる。「笠形山」という名前は、京都の愛宕山（あたごやま）からも笠のような山頂が遠望できたところから付けられたという。

山の中腹には笠形神社、麓の登山道入り口近くには笠形寺がある。明治の神仏分離以前には、笠形寺と笠形神社は一体で、現在山の中腹にある神社の境内がお寺の境内でもあった。笠形山のあまんじゃく伝説は、こうした信仰の場となっていた山を舞台とする話である。



笠形山遠望（右奥の最も高い山、姫路市船津町から）



笠形山（市川町上牛尾から）



笠形寺



笠形神社



笠形神社拝殿
（神仏分離以前は笠形寺本堂）

笠形山のあまんじゃくは、多可の谷を挟んで反対側にある妙見山（みょうけんさん）に石の橋を架けようとして失敗した。笠形山には、そのときにあまんじゃくが建てた橋の脚とされる石柱がある。石柱を目指して山を登ってみる。麓の笠形神社大鳥居から歩くこと約1時間40分、途中笠形寺、笠形神社境内を経由する登山道で山頂にたどりついた。



笠形山山頂



笠形山山頂から多可の谷を望む
（右奥の大きな山が妙見山）



あまんじゃくの石柱



あまんじゃくの石柱と
妙見山(中央奥の山)

あまんじゃくの石柱は、そこから多可町八千代区(やちよく)へと降りていく登山道を下ること、およそ200mの地点に立っていた。切り立った岩盤の先に一人ぼつねんと立つこの岩、高さはおおよそ7mとされる。岩の根もととは風化によってえぐりとられていて、いつ倒れてもおかしくない感じもする。自然の力でこうした岩ができたことは確かに不思議だ。背後の岩盤の上からのながめは絶景で、視界の先に妙見山も収めることができた。この石柱については、「あまんじゃくの挽石(ひきいし)」と呼ぶともされているが、参考資料によって呼び方にばらつきがあるので、ここでは単に「石柱」としておく。

また、石柱と山頂との中間地点で少し脇道に入ると、「天狗岩(てんぐいわ)」と呼ばれている岩盤帯がある。地学的に言うと、溶結凝灰岩(ようけつぎょうかいがん)の特徴である板状節理(ばんじょうせつり)が発達した岩盤で、周辺には板状にはがれた石片が多数ころがっている。これを伝説では、あまんじゃくが橋の板にしようとした石であるとしている。こうした石は、一般的には「鉄平石(てっぺいせき)」と呼ばれている。



天狗岩



鉄平石



鉄平石

多可町を訪ねる



多可町中区 妙見山

つづいて多可町を訪れた。あまんじゃくは、谷の北端の加美区(かみく)から順に田んぼにお供えを配って歩き、西脇市(にしわきし)との境界にあたる中区曾我井(なかそがい)まできたところで夜が明けたため逃げ帰ったとされる。地図で見ると、多可町加美区、中区のほとんどがこの伝説の対象となっていることになる。この伝説は、山から降りてくると考えられていた「田の神」と、あまんじゃくと結びついた印象を受ける。



多可町中区からみた笠形山
(中央奥の最も高い山)

あまんじゃくが橋を架けようとした妙見山は、多可町中区の最高峰で、中区の盆地に立つとほとんどの地点から北正面にそびえる山容を拝むことができる。また、笠形山も、中区の南部では、その山頂部を遠望することができる。多可のあまんじゃく伝説は、こうした地域のシンボルともいえる山々が舞台となっている。やはり、多可のあまんじゃく伝説の背景には、人々の山に対する信仰があると考えてよいだろう。



多可町加美区鳥羽
青玉神社



多可町中区曾我井

また、今回このサイトでは載せなかったが、多可にはほかにもあまんじゃくに関する伝説がある。多可町中区の奥中（おくなか）には、中町中学校の北にある岡山（おかやま）と、南隣の茂利（しげり）にある太子山（たいしやま）とを、あまんじゃくが天秤棒のような石でかついで運んでいこうとして、石が折れてしまって失敗したとの伝説もある。そのときに折れた石棒とされる「あまんじゃくの長石（ながいし）」が、現在奥中公民館前に残されている。



あまんじゃくの長石



岡山



太子山
(茂利では丸山とも呼ぶ)



太子山(手前)と岡山(奥)

この長石は、もともとは少し東側にあたる国道427号線の、奥中交差点近くの用水路の中に埋まっていたが、交差点拡幅工事のために掘り出されて現在地に運ばれたものという。もともとこの石があった地点には、現在はあまんじゃくを描いたイラスト看板が建てられていて、長石も将来的にはこの地点に戻す計画だという。



国道427号線奥中交差点
付近の看板

このほか、あまんじゃくはかんしゃく持ちで、気に入らないことがあると多可の谷に火の雨を降らせたという話もある。そんなとき人々が逃げ込んだのが、中区田野口の妙見山麓にある横穴群であるという。この横穴群とは、古墳時代後期に多く造られた、群集墳（ぐんしゅうふん）と呼ばれる小さな古墳の集まりを指している。現在、田野口の隣、東山地区内にある群集墳が写真のように整備されている。これらは6世紀末～7世紀にかけて造られていったもので、それぞれの古墳ごとに、棺を入れる石室が横向きに口を開けている。



東山古墳群



東山一号墳の石室

この話のあまんじゃくは少々怖い。明らかに人間に害を及ぼしている。この話は、大正12（1923）年に刊行された『多可郡誌』に載せられている。

天の邪鬼とダイダラボッチ

さて、多可のあまんじゃくから離れて、一般的な「天の邪鬼」の伝説としては、瓜子姫（うりこひめ）の昔話がよく知られている。瓜から生まれた瓜子姫に天の邪鬼が近寄り、いたずらをしたり食い殺してしまったりするが、最後は正体がばれて殺される、などとする筋が一般的で、兵庫県域でも香美町（かみちょう）などで見られる。瓜子姫の昔話に出てくる天の邪鬼は、どちらかという体が小さいイメージがある。しかし、多可の伝説はこれとは異なり、巨人のイメージである。

多可のあまんじゃくは、やはり瓜子姫の昔話ではなく、ダイダラボッチ伝説と縁が深い。たとえば、遠く離れたところへ山を運ぶ、といった話は、ダイダラボッチなどの巨人を主人公とする話として、全国的に確認できる。

先に述べた富士山と琵琶湖の話もその一つだが、多可に近いところで見れば、隣の丹波国氷上郡（たんばのくにひかみぐん＝現在の丹波市）では、鬼が山を運んだという伝説がある。ある時大きな鬼が、現在の丹波市役所の裏にある甲賀山（こうがやま）と、その南にある犬岡山（いぬおかやま）とを、大きな棒でかついで運んでいた。しかし、現在の丹波市成松（なりまつ）あたりまで来たところ、泥田が多く歩きにくくて疲れてしまったため、そのまま山を置いて帰ったという。多可の岡山と太子山の話とそっくりである。氷上では、いつの間にか話の主役が巨人から鬼に入れかわったようだ。



甲賀山

伝説の世界では、このように主役が入れかわっていくことがよく見られる。そうした点を念頭に置くと興味深いのが、新潟県や鳥取県に伝わる神の橋架け伝説である。新潟県の話は、むかし、「羅石明神」という神が、越後国（えちごのくに＝現在の新潟県）から佐渡島（さどがしま＝現在の新潟県佐渡市）へ橋を架けようとしたところ、天の邪鬼が鶏の鳴きまねをしたために、神が逃げ帰り、橋はできなかった、との話である。鳥取県の話も、橋を架けようとした場所が越後国と佐渡島から、因幡国（いなばのくに＝現在の鳥取県東部）から隠岐国（おきのくに＝現在の島根県隠岐諸島）へと変わり、神の名前が「御熊の神」に変わっているものの、あとは同様の筋のものである。



犬岡山

こうした橋架け伝説は、笠形山から妙見山に橋を架けようとしたという、あまんじゃく伝説とよく似ている。笠形山の橋架け伝説も、もともところとした神の橋架け伝説が、いつしか邪魔者役だったあまんじゃくを主人公とする話に変わっていったものなのではないか。くりかえし述べているように、多可のあまんじゃく伝説には、『風土記』の巨人伝説を含めて、全体的に山への信仰との深い関係がうかがえる。この地域には、古い段階では、山の神に関するさまざまな伝説があり、それが歴史の中で変化を遂げて、現在のあまんじゃく伝説になっていったのではないかと考えられるのである。

篠ヶ峰の鬼

もうひとつ、伝説「篠ヶ峰の鬼 のんきな鬼のお手伝い」では、多可のあまんじゃくとよく似たキャラクターの鬼を紹介した。この鬼もおちょこちょいであるところはよく似ているが、最後には人々のためになることをして天に去っていく。鬼というよりは神に近い性格が感じられる。

話の内容は、牧山（まきやま）の里（丹波市山南町小畑付近）を流れる牧山川の水量が少ないことや、船城（ふなき）の里（丹波市春日町西部）にかつては湿田（しつでん＝水はけの悪い田）が多かったこと、牧山周辺がかつては養蚕（ようさん）や栗の名産地であったことなど、地域の特徴を鬼の行いによって説明しようとするものである。



鬼（『北斎漫画』）



牧山川



牧山神社



船城の里
（丹波市春日町野山付近）

鬼は、古くからしばしば説話に登場するが、たとえば平安時代など古い段階の鬼は人を捕って食うきわめて恐ろしい存在であった。この伝説のように神に近く、しかも人間的なひょうきんさを兼ねそなえた性格の鬼は、かなり新しい時代に作られた印象を受ける。丹波市は多可町の東隣にあたるので、篠ヶ峰の鬼にも多可のあまんじゃくの性格が影響しているのかもしれない。

舞台となる篠ヶ峰は、播磨の多可郡と丹波の氷上郡の境界にそびえる山で、氷上郡内では最高峰である。この話を伝えていた牧山の里は篠ヶ峰南麓にあり、この鬼伝説とは別に弘法大師（こうぼうだいし）に関する伝説が二つ伝えられている。

一つは、篠ヶ峰山頂付近の岩が牛になって夜な夜な田畑を荒らし回って困っていたところ、弘法大師が法力（ほうりき）でこれを封じ込めたというものである。もう一つは、弘法大師が村にやってきて1杯の水を求めたところ、村人が水をあげなかったために、それから牧山川の水量が少なくなったという伝説である。後者は、篠ヶ峰の鬼の話と共通し、地域の自然を説明する伝説となっている。

この篠ヶ峰も古来神仏のいる山であった。西麓に位置する多可町加美区丹治（たんじ）には、古く篠ヶ峰に丹治大明神が鎮座していたという伝説がある。しかし、あるとき大明神は北麓の丹波市氷上町三原（ひかみちょうみはら）へ飛んでいってしまい、西麓の丹治へは大明神とともにまつられていた文殊菩薩（もんじゅぼさつ）がやってきたという。篠ヶ峰山上に鎮座していたという丹治大明神と文殊菩薩とは、伝説上の高僧である法道仙人（ほうどうせんじん）が開いた寺院を指しているという。

また、大明神が飛んでいったとされる三原の内尾神社（うちおじんじゃ）にも、やはり祭神は丹治の大登ヶ峰（おおのぼりがみね）から移ってきたという伝説が残されている。この鬼には、篠ヶ峰を拠点に活動していた修験者（しゅげんじゃ）の姿が投影されるとも考えられている。篠ヶ峰の鬼の伝説も、多可のあまんじゃくと同様に、こうした山に対する信仰を背景としているようだ。



内尾神社



篠ヶ峰
（多可町加美区丹治より）

用語解説

【『播磨国風土記』】はりまのくにふどき

律令国家（りつりょうこっか）の命令によって編纂された古代播磨の地理書。霊亀元（715）年前後に編纂されたものと見られている。現存するものは、三条西家（さんじょうにしけ）に所蔵されていた古写本で、巻首の赤石（明石＝あかし）郡の全部、賀古（加古＝かこ）郡冒頭の一部と、巻末の赤穂郡（あこうぐん）の全部の記載が欠落している。活字化されたものは、日本古典文学大系新装版『風土記』（秋本吉郎校注、岩波書店、1993年）のほか、全文を読み下した、東洋文庫145『風土記』（吉野裕訳、平凡社、1969年）などがある。

【『峰相記』】みねあいき

峰相山鶏足寺（みねあいさんけいそくじ＝現在の姫路市石倉の峰相山山頂付近にあった寺）の僧侶が著した中世播磨の宗教・地理・歴史を記した書物。原本は本文冒頭の記述から貞和4（1348）年ごろに成立したと考えられる。現存する最善本は揖保郡太子町（いぼぐんたいしちょう）の斑鳩寺（いかるがでら）に伝わる写本で、奥書から永正8（1511）年2月7日に書写山別院（しよしゃざんべついん）の定願寺（じょうがんじ）で写されたものであることがわかる。活字化されたものは、『兵庫県史』史料編中世4（兵庫県史編集専門委員会、1989年）や、全文口語訳をした、西川卓男『口語訳『峰相記』 中世の播磨を読む』（播磨学研究所、2002年）などがある。

【溶結凝灰岩】ようけつぎょうかいがん

火山の噴火による噴出物が、地上に堆積したときに、自らが持つ熱と重さによって溶けて圧縮されることによつてできる岩石。

【板状節理】ばんじょうせつり

岩石の中の割れ目が平行に発達し、割れた岩塊が板状に見えるもの。ここで出てくる溶結凝灰岩（ようけつぎょうかいがん）のような火成岩の場合、マグマが冷える時に形成されると考えられている。

【群集墳】ぐんしゅうふん

5世紀後半以降に造られるようになった、小規模な古墳が密集したもの。円墳や方墳によって構成されるものが多く、7世紀ごろまで造られ続けた。こうした古墳群の発生の背景としては、限られた首長のみから、その一族の人々を含めるようになるなど、古墳を造営できる人々の範囲が広がったためと見られている。

【弘法大師空海】こうぼうだいしこうかい

774 - 835。日本に真言密教（しんごんみつきょう）をもたらした平安時代初めの僧侶。同じ時期に天台宗をもたらした伝教大師最澄（でんぎょうだいしさいちょう）とならんで、この時期の日本仏教を代表する人物。延暦23（804）年遣唐使留学僧として入唐。長安（ちょうあん）青龍寺の恵果（えか、「けいか」とも言う）に真言密教を学ぶ。大同元（806）年帰国。弘仁7（816）年朝廷より高野山に金剛峰寺（こんごうぶじ）を開くことを許される。弘仁14（823）年朝廷より東寺（とうじ）を与えられ、真言密教の道場とした。承和2（835）年死去。延喜21（921）年、朝廷から弘法大師の諡号（しごう、死後の贈り名）が与えられた。

用語解説

【法道仙人】ほうどうせんにな

奈良時代に活躍したとされる伝説上の宗教者。インドの生まれとされ、主に播磨から丹波南部、但馬南部、摂津西部にかけて法道が開いたとの伝承を持つ寺院が多数存在する。

その伝承の中心は加西市の一乗寺（いちじょうじ）にあったと見られる。あるとき布施（ふせ）を乞うために、法道が瀬戸内海を行く船に鉢を飛ばしたところ、船頭が積荷は官庫に納めるためのものなので与えられないと断ったところ、船の米俵が次々とひとりでに一乗寺を目指して飛んで行ってしまった。船頭が許しを請うと、法道は俵を飛ばして船に返したが、1俵だけ途中で落ちてしまった。そこで、この俵が落ちたところを米墮（よねだ = 現在の加古川市米田町）と呼ぶようになった、という伝説がよく知られている。

こうした伝説には、長谷寺（はせでら）の徳道（とくどう）や、信貴山縁起絵巻（しぎさんえんぎえまき）に登場する命蓮（みょうれん）などの説話の影響が考えられている。法道伝説は、こうした中央で成立した説話を参考に作り出され、地域限定的に広まったものと見られているのである。こうした法道伝説とよく似た、地域に特徴的な宗教者伝説としては、備前（びぜん = 現在の岡山県東部）を中心に広がる報恩大師（ほうおんだいし）伝説などがある。

参考書籍

伝説の参考書籍

書籍名	刊行年	著者名	発行者
日本伝説 播磨の巻	1918 (1978復刻)	編著: 藤沢衛彦	日本伝説叢書刊行会
兵庫の民話(日本の民話 25)	1960	編集: 宮崎修二郎、徳山静子	未来社
郷土の民話 丹有編	1972	編集: "郷土の民話"丹有地区編集委員会	兵庫県学校厚生会
郷土の民話 東播編	1972	編集: "郷土の民話"東播地区編集委員会	兵庫県学校厚生会
郷土の民話 中播編	1973	編集: "郷土の民話"中播地区編集委員会	兵庫県学校厚生会
兵庫の伝説	1980	編著: 兵庫県小学校国語教育連盟	日本標準
兵庫の伝説 1	1981	編集: 有井基、絵: のざきジョー	神文書院

参考書籍

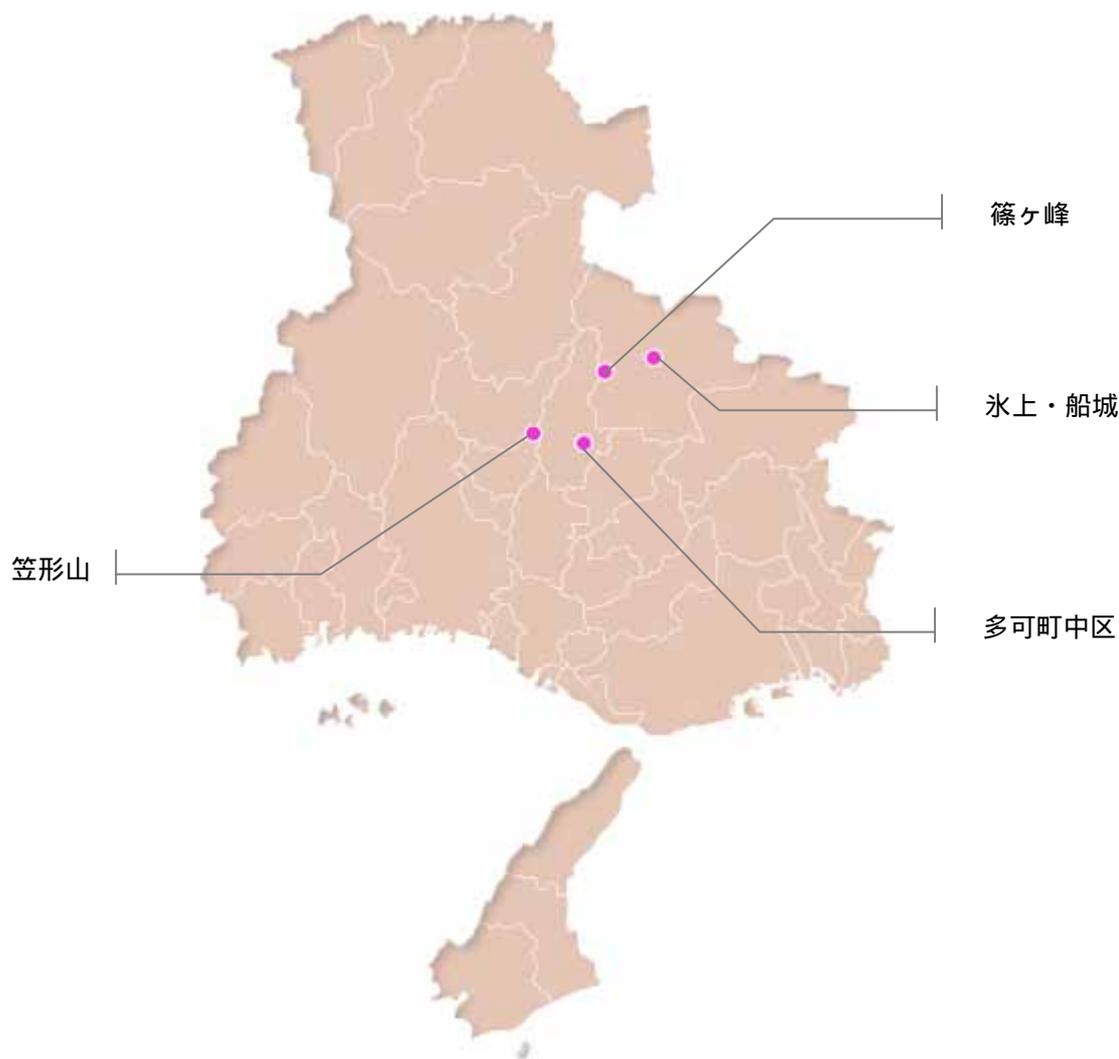
歴史・文化の参考書籍

書籍名	刊行年	著者名	発行者
播磨国風土記(収録:日本古典文学大系新装版『風土記』)	1993	校注:秋本吉郎	岩波書店
播磨鑑	1958	著者:平野庸修、校訂:播磨史籍刊行会	播磨史籍刊行会
日本伝説集	1913 (1973復刊)	高木敏雄	郷土研究社(復刊:宝文館出版)
多可郡誌	1923 (1985復刻)	編纂:兵庫県多可郡教育会	兵庫県多可郡教育会(復刻:臨川書店)
丹波氷上郡誌 上	1927 (1985復刻)	編纂:丹波史談会	臨川書店(復刻)
丹波氷上郡誌 下	1927 (1985復刻)	編纂:丹波史談会	臨川書店(復刻)
郷土誌	1931 (謄写版)	編集:和田尋常高等小学校	兵庫県氷上郡和田村和田尋常高等小学校
神崎郡誌	1942 (1976復刻)	編集:兵庫県神崎郡教育会	兵庫県神崎郡教育会(復刻:神崎郡誌刊行会)
丹波志 氷上郡之部	1955	編集:氷上文化協会	氷上文化協会
伝説の兵庫県	1961 (2000再刊)	西谷勝也	神戸新聞総合出版センター(再刊)
一つ目小僧その他(収録:『定本柳田國男集』5)	1962	柳田國男	筑摩書房
桃太郎の誕生(収録:『定本柳田國男集』8)	1962	柳田國男	筑摩書房
日本物語通観 16 兵庫	1978	責任編集:稲田浩二、小沢俊夫	同朋舎
日本の伝説 43 兵庫の伝説	1980	宮崎修二郎、足立巻一	角川書店
日本伝説大系 3 南奥羽・越後編	1982	編集:野村純一	みずうみ書房
かんざき夜話 史話と民話	1987	編集:神崎町文化協会郷土史研究部会	神崎町文化協会
日本伝説大系 8 北近畿編	1988	編集:福田晃	みずうみ書房
兵庫丹波の山 上	1991	慶佐次盛一	ナカニシヤ出版
播磨 山の地名を歩く	2001	編集:播磨地名研究会	ひめしん文化会、神戸新聞総合出版センター
中町文化財報告30 中町の遺跡 2	2004	編集:中町教育委員会	兵庫県多可郡中町教育委員会
丹波(篠山市・丹波市)のむかしばなし 5	2005	編集:「丹波(篠山市・丹波市)のむかしばなし」編集委員会	(財)丹波の森協会

その他の参考資料

書籍名	刊行年	著者名	発行者
播磨富士を楽しもう 県立自然公園 笠形山(観光パンフレット)	不詳	編集:市川町観光協会	市川町観光協会

所在地リスト



氷上・船城	丹波市氷上町成松、丹波市春日町野山
多可町中区	多可町中区
篠ヶ峰	丹波市山南町、丹波市氷上町、多可町加美区
笠形山	市川町上牛尾

ひょうご歴史ステーション「ひょうご伝説紀行」は、兵庫県立歴史博物館により管理・運営しております。サイトで使用するテキスト・画像などのコンテンツ全般の著作権は当館に帰属し、無断での複写・転用・転載などを禁止いたします。

ひょうご伝説紀行 妖怪・自然の世界
<http://www.hyogo-c.ed.jp/~rekihaku-bo/historystation/legend3/>

編集発行 兵庫県立歴史博物館
〒670-0012 兵庫県姫路市本町6-8 079-288-9011

第1刷 2009年4月1日

ひょうご伝説紀行
妖怪と自然の世界

おさかべ姫

姫路城 天守閣の主



伝説

おさかべ姫
姫路城 天守閣の主

紀行

姫山の地主神
・天守閣の主
・姫山の地主神
・刑部神と富姫神
・『播磨国風土記』の姫山伝説

関連情報

用語解説
参考書籍
所在地リスト

伝説

おさかべ姫 姫路城 天守閣の主

江戸時代の姫路城。今夜も殿様（とのさま）のおそばに仕える若い小姓（こしょう）たちが、交代で寝ずの番の仕事についていました。秋の夜長、ひとしきりうわさ話に花を咲かせた後、いつものように話題は天守閣（てんしゅかく）に住むという主（ぬし）の話になっていきました。

五層七階建ての天守閣、その最上階に、おさかべ姫という主がいて、年に一度だけ殿様が一人きりで対面するのだ、と子供のころからみな聞かされていたのです。

「いつも同じ話ばかりしていてもつまらんな。どれ、どんなやつなのか、おれが見てきてやろうじゃないか。」

まだ十七、八歳で生意気盛りの小姓たち。その中でもひととき元気のよい森田図書（もりたずしょ）は立ち上がると、ちょうちんを手に持ってなんでもないようにスタスタと天守閣へと向かっていきました。

夜の天守閣、真っ暗やみの中、小さなちょうちんの明かりだけを頼りに、急な階段をそろそろと一階、また一階と登っていきます。気の強い図書ですがやはり人の子、心の中ではいろいろな想像がぐるぐるとうずを巻いていました。

「主というからには、老婆（ろうば）の姿をしているのだろうか。あるいは、狐（きつね）の化身（けしん）という話も聞いたことがある。」

「会ったらどうなるのだろう。やはりとり殺そうとおそいかかってくるだろう。」

「やはり引き返そうか。いや、いまさらそんなことはできない。」

ついに最上階にたどりつきました。

「やはり、いる。」

だれもないはずの最上階、でも、戸のすき間からぼんやりと明かりがもれていました。図書は一息深呼吸をしてから、静かにその戸を開けました。

「だれじゃ。」

一言、きびしい声がひびきわたりました。図書は思わず、「ははーっ。」と平伏（へいふく）しました。声の主が図書の方を振りかえる気配がしました。やがて図書の方へ向き直る着物の音がします。はりつめていた空気が少しやわらいだような気がしました。

伝説

おさかべ姫 姫路城 天守閣の主

「そこにいるのは何者か。」

今度はやわらかい声でした。まだあどけなさの残る顔立ちで、刀もさしていない図書を見て、安心したような声です。図書も少しほっとして、

「お城の小姓、森田図書と申します。」

と、ここまで登ってきたわけを正直に話しました。平伏（へいふく）しながらそっと相手の姿を見ると、年のころは三十代半ばか、色白で高い鼻筋の美しい女性が十二単（じゅうにひとえ）を着て座っていました。

「そうか。それは勇気のあることじゃ。ならばここまで来た証拠に、これを持ち帰るがよい。」

図書の前に兜（かぶと）のシコロ（首まわりの部分）が置かれていました。図書はシコロをありがたくいただき、一礼して部屋を出ていきました。

翌日、殿様のもとへもこの話が伝わり、図書は、持ち帰った兜のシコロを差し出しました。それを見た殿様の顔が青ざめました。

「すぐに家宝の兜を調べよ。」

城主の命で、蔵の中の兜を取り出してみると、シコロが引きちぎられていました。図書が持っていたものと合わせるとぴったりとはまります。城主が会うときはいつも、天守閣の主は老婆の姿なので、図書の話を少しうたがっていた城主も、これを見て納得した、ということです。

（『兵庫の伝説』第二集をもとに作成）

紀行 姫山の地主神

天守閣の主

姫路城天守閣には主がいるという。その名は「おさかべ姫」。あるいは単に「オサカベ」とも呼ぶ。このサイトで紹介している『播州皿屋敷』でも、姫路城を手に入れた青山鉄山（あおやまてつざん）を悩ます怪異として登場する。



おさかべ姫と宮本武蔵
(錦絵 東錦昼夜競、個人蔵)



姫路城



姫路城

この話は、延宝5（1677）年に出版された『諸国百物語（しょこくひやくものがたり）』や、安永8（1779）年の鳥山石燕（とりやませきえん）『今昔画図続百鬼（こんじゃくがずぞくひゃっき）』などにも載せられ、江戸時代の前半からすでに全国区の伝説だった。

現在、年間100万人近くの人々が訪れる姫路城。昼間は人がとぎれることは少ない。しかし、そうした現代でも、天守閣の中に入ると、窓から差し込む日の光だけが頼りの薄暗いところも多い。電灯のない江戸時代の夜中のことを想像すれば、その暗闇の深さははかりしれない。

天守閣で小姓が「おさかべ姫」に会った、という伝説からは、やがて宮本武蔵が天守閣の妖怪退治に向いておさかべ姫と対面したとする講談なども登場した。近代の文学作品としても、天守閣の主である富姫（とみひめ）と、若い鷹匠（たかしょう）である姫川図書之助（ひめかわずしよのすけ）との恋を描いた、泉鏡花（いずみきょうか）の『天守物語』などがある。

さて、延宝5（1677）年出版の『諸国百物語』では、「秀勝（ひでかつ）」という城主が若侍に命じておさかべ姫に会いに行かせた、という話になっている。しかし、同書を引用したと明記している別の書物、たとえば宝暦3（1753）年の『播陽因果物語（ばんよういんがものがたり）』などでは、城主の名は現在の姫路城を建設した池田輝政（いけだてるまさ）になっている。ここから、『諸国百物語』の版によっては、城主は輝政と記されていたものもあったと考えられている。

また、『諸国百物語』にはこれとは別に、輝政が病に倒れたとき、城内で高僧が祈祷（きとう）をしていると、30歳ほどの女性が薄化粧をして現れ、祈祷をやめると声をかけた、という話も載せられている。

輝政の病をめぐる怪異に関しては他にも史料がある。小野市歓喜院（おのしかんぎいん）と多可町円満寺（たかちょうえんまんじ）には、「播磨のあるじ」を名乗る天狗が輝政にあてた書状と言われるものや、それにまつわる記録類が残されているのである。この書状は城内に寺院を建てよと輝政に要請するもので、慶長14（1609）年12月と、現在の天守閣が完成したばかりのころの年代がついている。この書状は、いったん城内で発見され、直ちに輝政にも見せられたが、その時は黙殺された、という。

しかし、その2年後、輝政が病に倒れた。池田家では、円満寺の明覚（みょうかく）を招いて祈祷を行わせたが、その最中に、先の天狗の書状があらためて藩士から提出された。明覚は、この書状が要求するとおりに寺院を建立することを勧めたので、池田家では、鬼門（きもん）にあたる城内北東部に、「八天堂（はってんどう）」という仏堂を建てた、とされている。

さらにこのころ、輝政の病は、城が建っている姫山（ひめやま）の地主神（じぬしがみ）である長壁神（おさかべがみ）のたたきだ、との噂も流れていたという。長壁神は、もともとは姫山の上まつられていたが、羽柴秀吉（はしばひでよし）の姫路築城にともなって、城下の播磨総社（そうしゃ）に移されていた。そこで池田家では、長壁神社をも城内にまつり直した、とされている。

ここで述べた事件の経緯は、どこまでが事実で、どこからが虚構なのか、ややはっきりしない。この経緯には、明覚の功績を強調するための脚色が含まれている可能性が多分にある。

ただ、輝政の病を契機に、八天堂が建立され、長壁神社が再び姫山にまつられるようになったことは確かなようだ。また、こうした話が生み出され、語られ続けてきた背景には、新しく領主となった池田家に対する、当時の播磨の人々の違和感があったことも指摘されている。円満寺の明覚は、こうした地域の「世論」とでもいうべきものを読みとっていたのではないだろうか。彼が八天堂の建立を勧めたのは、池田家に寺院の建立をさせ、地域の宗教勢力への配慮を示させることで、地域の「世論」との融和をはからせようとの意図があったと考えられるのである。

姫路城天守閣に「おさかべ姫」という妖怪が棲んでいる、との伝説の源流は、この事件にあると指摘されている。先にみた『諸国百物語』の輝政の病の話も、この事件をもとに創作されたものと考えてよいだろう。そして、この事件を契機に再び姫山にまつられるようになった長壁神が、「おさかべ姫」の正体の一つである。



大天守閣東大柱



大天守の暗闇

姫山の地主神



大天守最上層の
長壁神社



城内の長壁神社跡
(とノ二門外)

この長壁神社は、現在姫路市内に3ヶ所ある。大天守最上層、播磨総社境内、旧城下町の立町の3つである。それぞれについて由来を説明してみよう。長壁神は、もともとは刑部（おさかべ）神と表記され、姫路城が建てられる前から姫山にまつられていた。しかし、先に触れたように、天正8～9（1580～81）年の羽柴秀吉による姫路城築城の際に、いったん城下の町はずれに移された後、播磨総社の境内に摂社（せっしゃ）としてまつられるようになっていた。

そして、輝政の病が契機となって、再び姫山の上にまつりなおされることになった。その場所は、城内北東部（城門の名前で言うと、とノ二の門外）であったと見られる。しかしその後、松平氏が姫路藩主となった寛永16（1639）年に再び総社へ戻り、慶安2（1649）年に藩主榊原氏があらためて城内の社殿を再興したとされている。また、この後も総社境内にも長壁神は残り続け、城内と総社境内の2ヶ所の長壁神社が併存していた。

明治になると、城内を陸軍が使用するようになったため、城内の長壁神社は、1879（明治12）年に元塩町（もとしおまち）の総社境内地に移転した。1913（大正2）年には、江戸時代を通して総社境内に残り続けていた長壁神社も、この城内からやってきた長壁神社に合祀（ごうし）され、さらに1927（昭和2）年の国道拡幅にともなって現在の位置に移転したのが、総社境内の長壁神社である。

一方、現在の大天守最上層の社殿は、1879年に城内長壁神社が総社境内地に移転した後に、あらためてまつられるようになったものとされている。



播磨総社



総社内の長壁神社



立町 長壁神社

また、姫路藩主が榊原氏に交代した宝永元（1704）年には、城下町の豎町（たてまち）にあった長源寺（ちょうげんじ）が、城内長壁神社の世話役寺院に指定された。この時から長壁神は長源寺境内にもまつられるようになった。それが現在立町にある長壁神社のはじまりである。

これら3ヶ所の長壁神社にはいずれも、刑部神とともに、富姫（とみひめ）神という女神がまつられている。『播陽万宝知恵袋（ばんようばんぼうちえぶくろ）』に収録された中世末～近世の書物には、姫山という名前の由来として、富姫の館があったとする説明を載せるものが多い。たとえば輝政による姫路城築城以前の天正4（1576）年の奥書のついた『播磨府中めぐり』では、姫山は富姫の館があったためについた名であり、刑部社、角ノ社（すみのやしろ）、富姫ノ社（とみひめのやしろ）、角岳国主（すみだけくにぬし）の社などが、当時の姫山の鎮守である、と書かれている。

刑部姫と富姫神

刑部神と富姫神の由来については、近世の段階ですでに諸説あったが、刑部神は、奈良時代末期の光仁天皇（こうにんてんのう）と皇后井上内親王（いのうえないしんのう）との間に生まれた他戸親王（おさべしんのう）である、とする説が主流であった。そして、富姫についても、この井上内親王と他戸親王との母子の間に生まれた不義の子供が富姫で、都から播磨にさまよい下って姫山に館を構えた。この富姫をまつるのが富姫神である、とする説が多い。

こうした諸説はあくまでも近世の理解であって、歴史的な事実とは考えにくい。ただし、井上内親王と他戸親王とは実在の人物である。この二人は、宝亀3（772）年に光仁天皇を呪詛（じゅそ）したとして皇后・皇太子の位を追われ、のちに幽閉先の大和国で殺害された母子であった。紀行文「戦争と怨霊」でも紹介しているように、古代から中世にかけては、こうした政争や戦乱に敗れた人は怨霊となつてたたと観念されることが多かった。井上・他戸の母子も、後にたたりがあつたとして、神としてまつられることとなつた。こうした神への信仰を「御霊信仰（ごりょうしんこう）」と呼ぶ。姫山の刑部神と他戸親王の結びつきも、こうした御霊信仰が伝わつた結果と考えられる。

一方、刑部神の本来の由来は、古墳時代～飛鳥時代にかけての中央豪族の私有民である部民（べみん）の一つ、刑部（おさかべ）にあると考えられる。刑部は全国的に広く分布し、播磨にも存在したようだ。こうした刑部の人々がまつる氏神が、本来の刑部神だつたと考えられる。そして、他戸親王との名称の類似から、いつしか姫山の刑部神と他戸親王の御霊信仰が結びつくことになつたのであろう。

『播磨国風土記』の姫山伝説

さて、姫山の由来については、より古い別の伝説がある。奈良時代初めの『播磨国風土記（はりまのくにふどき）』では、姫山の由来を次のように説明している。

むかし、国造りをした大汝遅命（おおなむちのみこと）が、できの悪い息子を島に置き去りにして船を出してしまった。ところが怒りくるた息子が逆襲し、父親の乗る船をひっくり返してしまった。そのときひっくり返つた船や、こぼれ落ちたいろいろな道具がそれぞれ丘になつた。（現在の姫路市街地の中にある）十四の小丘はこうしてできたもので、そのうち蚕子（ひめこ＝「かいこ」のこと）が落ちたところが、日女道丘（ひめじおか）、すなわち現在の姫山である。

このサイトのほかの紀行文でも紹介しているように、伝説は時代によってその内容を変えていくものが多い。姫山の由来についても、いつしか上に記した『風土記』の説明から、他戸親王と富姫の説明などに変わっていったのであろう。ただし、いずれにしても、中世のころから刑部神と富姫神がセットで、姫山の神としてまつられていたことは確かである。



姫山の上に建つ姫路城

時代が変われば、そこに住む人も治める人も代わっていく。しかし、いつの世も新しく入ってきた者は、古くからいる人々を尊重しなくてはうまく暮らせない。そのような思いは歴史の中で、地域の古くからの神々を尊重する意識を生み出していった。ここまで説明してきたように、刑部神と富姫神とは、本来は別の神であった。両者を融合させた「おさかべ姫」伝説は、こうした地主神への畏れをも背景として生み出されたものなのだろう。



姫山の上に建つ姫路城

なお、「おさかべ姫」の話の中には、正体はきつねだったとするものもある。これはこのサイトでも別に紹介している「およし狐」の話と「おさかべ姫」が結びついたものであるが、この話については紀行文「狸と狐」であらためて紹介したい。

用語解説

【『諸国百物語』】しょこくひやくものがたり

延宝5（1677）年刊。100話の怪奇物語を収める怪談集。幽霊などの妖怪変化を扱った民話的な怪奇物語が大半を占め、先行する『曽呂利物語（そりりものがたり）』との類似関係が目立つことが指摘されている。本書以後、18世紀中ごろまで、『御伽百物語（おとぎひやくものがたり）』、『太平百物語』、『古今百物語評判』など、「百物語」を題名の中に持つ怪談集が続々と刊行されるようになった。

【『今昔画図続百鬼』】こんじゃくがずぞくひゃっき

安永8（1779）年刊。鳥山石燕（とりやませきえん）画。安永5（1776）年に刊行された『画図百鬼夜行（がずひゃっきやぎょう）』の続編で、「妖怪図鑑」としての性格を持つ。石燕はこれ以後も、『今昔百鬼拾遺』、『百鬼徒然袋（ひゃっきつれづれぶくろ）』を著した。この4つの画集で、200種以上の妖怪が描かれている。石燕は狩野派の絵師で、隠居仕事に画業を行ったと言われ、『画図百鬼夜行』以下4つの妖怪画集は、60代になってからの仕事であった。

【宮本武蔵】みやもとむさし

1584？ 1645。江戸時代初めの武芸者。自らの著書『五輪書（ごりんしょ）』によれば、13歳から29歳までの間に60回余りの勝負をし、すべて勝利したという。大坂の陣（1614 1615）では徳川方として参陣したと考えられ、その後、姫路藩主本多忠刻（ほんだただとき）、明石藩主小笠原忠真（おがさわらただかね）の客分となって、姫路や明石の城下町・寺院建設、作庭などに関与したとされる。

寛永15（1638）年の島原の乱では小笠原氏に従って参陣、その後寛永17（1640）年に熊本藩主細川忠利（ほそかわただとし）に招かれて客分となる。寛永20（1643）年から『五輪書』の執筆を進め、正保2（1645）年熊本で没した。武芸をめぐる数々の伝説のほか、水墨画などの書画作品も残されている。

【『播陽因果物語』】ばんよういんがものがたり

『播陽万宝智恵袋（ばんようばんぼうちえぶくろ）』巻38収録。松原集山（まつばらしゅうざん）著。『枕草子（まくらのそうし）』、『平家物語』、『太平百物語（たいへいひやくものがたり）』、『因果物語（いんがものがたり）』など、先行するさまざまな書物から、播磨に関係のある話を集めたもの。序には宝暦7（1757）年とあり、このころ成立したと見られる。

【池田輝政】いけだてるまさ

1565 1613。織田信長（おだのぶなが）の家臣である池田恒興（いけだつねおき）の次男。父と兄の元助（もとすけ）が小牧・長久手（こまき・ながくて）の戦い（1584年）で戦死したために家督を継ぐ。関ヶ原の戦い（1600年）の後、三河吉田（みかわよしだ = 現在の愛知県豊橋市）15万石から加増されて、播磨姫路（はりまひめじ）52万石の領主となる。慶長6（1601） 14（1609）年にかけて、羽柴秀吉（はしばひでよし）が築いていた姫路城を大改修し、現在見られる城郭と城下町を建設した。

徳川家康の娘である督姫（とくひめ）を妻としたために江戸幕府から重用され、長男の利隆（としか）のほか、督姫が生んだ子供たちなども順次それぞれに所領を得て、一時は一族で播磨、備前（びぜん = 現在の岡山県南東部）、淡路（あわじ）、因幡（いなば = 現在の鳥取県東部）に合計100万石近くを領有した。慶長18（1613）年死去。

用語解説

【羽柴秀吉】はしばひでよし

1537 - 1598。織田信長に仕えて頭角を現し、天正5（1577）年に信長の命を受けて播磨に進出する。この時点ですでに播磨の多くの勢力は信長に服属していたが、小寺孝高（こでらよしたか、後の黒田如水）の協力などによってあらためて平定を進めた。しかし、天正6（1578）年に三木の別所（べっしょ）氏、摂津有岡城（ありおかじょう=現在の伊丹市）の荒木村重（あらかむらしげ）が相次いで離反したため、三木城などをめぐって戦った。天正8（1580）年に、別所氏のほか、英賀（あが=現在の姫路市飾磨区英賀宮町付近）の一向一揆勢力、宍粟郡（しろうぐん）の宇野（うの）氏などを攻略して播磨を平定した。また同時期に但馬へも兵を進めていて、最終的には播磨と同じ天正8年に、守護家山名氏を降伏させて平定した。天正9（1581）年には因幡国鳥取城や淡路国を攻略するとともに、居城としていた姫路城を改築している。

天正10（1582）年の本能寺の変の後、明智光秀（あけちみつひで）、柴田勝家（しばたかついえ）らを相次いで滅ぼし、小牧・長久手の戦い（1584年）の2年後に徳川家康（とくがわいえやす）を臣従させ、天正13（1585）年に四国を平定する。翌14年には豊臣姓を名乗り関白となり、15年に九州を平定、天正18（1590）年に関東、東北を平定し全国を統一した。文禄元（1592）年からは2度にわたる朝鮮半島への侵略戦争を進めたが、慶長3（1598）年に没した。

【播磨総社】はりまそうしゃ

姫路城の南東にある神社。祭神は射楯大神（いたておおかみ）と兵主大神（ひょうずおおかみ）。10世紀の『延喜式（えんぎしき）』にも見える。社伝によれば、養和元（1181）年に播磨国内の神々174座を境内に合祀し、播磨国惣社（現在では「総社」と表記する）と称されたという。「惣社」とは、一般的には平安時代後期以降に見られるようになる、国府の近くに国内の神々を合祀した神社を指す。この社伝も、具体的年代についてはなお検討が必要であろうが、こうした全国的な流れの中で播磨の総社も成立したことを示すと見てよい。なお、「総社」は、一般的には「そうじゃ」と読む場合が多いが、播磨では「そうしゃ」と濁らずに読む。

【『播陽万宝知恵袋』】ばんようばんぼうちえぶくろ

天川友親（あまかわともちか）が編纂した、播磨国の歴史・地理に関する書籍を集成した書物。宝暦10（1760）年に一旦完成したが、その後も若干の収録書籍の追加が行われている。天川友親は現在の姫路市御国野町御着（ひめじしみくにのちょうごちゃく）の商家に生まれた。収録された書物は、戦国末・安土桃山時代から、友親の同時代にまでわたる125件に及ぶ。これらのほとんどは、現在原本が失われてしまっており、本書の価値は高い。活字化されたものは、八木哲浩校訂『播陽万宝知恵袋』上・下（臨川書店、1988年）がある。

【『播磨府中めぐり』】はりまふちゅうめぐり

『播陽万宝智恵袋（ばんようばんぼうちえぶくろ）』巻18収録。芦屋道海（あしやどうかい）著。末尾に天正4（1576）年4月7日とあり、このころの成立と見られる。播磨府中（姫路）周辺の城跡、社寺、名所などを詳細に記し、池田輝政（いけだてるまさ）による現姫路城築城以前の姫路を知るうえで重要な史料である。ただし、後世の補筆も多く見られる。著者の芦屋道海は、英賀（あが=現在の姫路市飾磨区英賀宮町付近）の住人で、平安時代の陰陽師芦屋道満の子孫を称したという。『播陽万宝智恵袋』には、この他に、『近村めぐり一歩記』、『播州巡行（考）聞書』も道海の著書として収録されている。また、『播磨鑑（はりまかがみ）』にも道海の和歌が見える。

用語解説

【光仁天皇】こうにんてんのう

709 - 81。天智天皇（てんじてんのう）の皇子志貴皇子（しきのみこ）の子。神護景雲4（770）年、称徳天皇（しょうとくてんのう）の死去にあたって藤原氏ら群臣に推されて皇太子となり、ついで即位。奈良時代を通して天武天皇（てんむてんのう）の子孫が天皇となっていたが、光仁の即位によって天智系統に代わることとなった。天応元（781）年、病を得て皇太子山部親王（桓武天皇、かんむてんのう）に譲位し、同年没した。

【井上内親王】いのうえないしんのう

717 - 75。光仁天皇の皇后。聖武天皇（しょうむてんのう）の皇女。宝亀3（772）年、天皇を呪詛（じゅそ）したとして皇后を廃され、ついで息子の他戸親王（おさべしんのう）も母の罪を受けて皇太子を廃された。翌年、他戸親王とともに大和国宇智郡（やまとのくにうちぐん = 現在の奈良県五條市）に幽閉され、同6年4月、母子同日に没した。政府関係者による毒殺と考えられている。

【大汝遅命】おおなむちのみこと

『播磨国風土記（はりまのくにふどき）』では、播磨の国づくりを進めた伊和大神（いわおおかみ）の別名として登場するが、一般的には、出雲神話（いずもしんわ、出雲は現在の島根県東部）に登場する大国主（おおくにぬし）の別名である。このことは、播磨土着の神である伊和大神が、記紀神話（『古事記』、『日本書紀』の神話）の影響を受けて、大国主と同一化されたことを示すとも考えられている。

なお、大国主は、記紀神話ではスサノオの息子、もしくは子孫とされ、少彦名神（すくなひこなのかみ）と協力して国づくりを進め、やがて天から降ってきた天照大神（あまてらすおおみかみ、「てんしょうだいじん」とも読む）の子孫に国土を譲り、出雲に祀られるようになったとされている。

参考書籍

伝説の参考書籍

書籍名	刊行年	著者名	発行者
日本伝説 播磨の巻	1918(1978復刻)	編著:藤沢衛彦	日本伝説叢書刊行会
兵庫の伝説	1980	編著:兵庫県小学校国語教育連盟	日本標準
兵庫の伝説 2	1986	編集:有井基、絵:のざきジョー	神文書院

歴史・文化の参考書籍

書籍名	刊行年	著者名	発行者
播磨国風土記(収録:日本古典文学大系新装版『風土記』)	1993	校注:秋本吉郎	岩波書店
諸国百物語(収録:叢書江戸文庫2『百物語怪談集成』)	1987	校訂:太刀川清	国書刊行会
播州小刑部社記(収録:『播陽万宝知恵袋』上)	1988	編纂:天川友親、校訂:八木哲浩	臨川書店
姫辺古記(収録:『播陽万宝知恵袋』上)	1988	編纂:天川友親、校訂:八木哲浩	臨川書店
国衙巡行考証(収録:『播陽万宝知恵袋』上)	1988	編纂:天川友親、校訂:八木哲浩	臨川書店
播磨府中めぐり(収録:『播陽万宝知恵袋』上)	1988	編纂:天川友親、校訂:八木哲浩	臨川書店
播陽府辺廿四社巡拝名略記(収録:『播陽万宝知恵袋』上)	1988	編纂:天川友親、校訂:八木哲浩	臨川書店
播州古処拾考(収録:『播陽万宝知恵袋』上)	1988	編纂:天川友親、校訂:八木哲浩	臨川書店
播陽因果物語(収録:『播陽万宝知恵袋』下)	1988	編纂:天川友親、校訂:八木哲浩	臨川書店
播州諸所古今物語(収録:『播陽万宝知恵袋』下)	1988	編纂:天川友親、校訂:八木哲浩	臨川書店
播磨鑑	1958	著者:平野庸修、校訂:播磨史籍刊行会	播磨史籍刊行会
播州名所巡覧図絵	1974	著者:秦石田、校訂:井口洋	柳原書店
『鳥山石燕 画図百鬼夜行全画集』(角川文庫ソフィア)	2005	鳥山石燕	角川書店
池田輝政夫妻への警告と噂(収録:兵庫県史編集専門委員会編『兵庫県の歴史』3号)	1975	高尾一彦	兵庫県
播磨伝説風土記	1976	編集:読売新聞社姫路支局	姫路駟路の会
姫路市史 14 別編姫路城	1988	姫路市史編集専門委員会	姫路市
播磨国総社 射楯兵主神社史	1996	編集:射楯兵主神社史編纂委員会	射楯兵主神社
播磨 山の地名を歩く	2001	編集:播磨地名研究会	ひめしん文化会、神戸新聞総合出版センター
狐の日本史 古代・中世編	2001	中村禎里	日本エディタースクール出版部
地母神の記憶を受け継ぐ 姫路城天守閣に棲む妖怪、おさかべ姫 (収録:橘川真一編著『はりま伝説散歩』)	2002	埴岡真弓	神戸新聞総合出版センター
狐の日本史 近世・近代編	2003	中村禎里	日本エディタースクール出版部
恋するオサカベ(収録:ナイトメア叢書3『妖怪は繁殖する』)	2006	横山泰子	青弓社

所在地リスト



立町長壁神社	姫路市立町33
姫路城	姫路市本町
総社 (射楯兵主神社)	姫路市総社本町190

ひょうご歴史ステーション「ひょうご伝説紀行」は、兵庫県立歴史博物館により管理・運営しております。サイトで使用するテキスト・画像などのコンテンツ全般の著作権は当館に帰属し、無断での複写・転用・転載などを禁止いたします。

ひょうご伝説紀行 妖怪・自然の世界
<http://www.hyogo-c.ed.jp/~rekihaku-bo/historystation/legend3/>

編集発行 兵庫県立歴史博物館
 〒670-0012 兵庫県姫路市本町6-8 079-288-9011

第1刷 2009年4月1日

ひょうご伝説紀行
妖怪と自然の世界

千草の老人
長生きな大男の伝説

伝説

千草の老人
長生きな大男の伝説

紀行

長寿伝説
・宍粟千種
・『峰相記』
・八百比丘尼伝説

関連情報

用語解説
参考書籍
所在地リスト

伝説

千草の老人 長生きな大男の伝説

奈良時代が終わろうとしていた延暦（えんりゃく）2（783）年。今の宍粟市千種町（しそうしちくさちょう）のあたりが、宍粟郡千草村（しそうぐんちくさむら）と呼ばれていたころのことです。

千草の大山（おおやま）という人里はなれた山の中に、そまつな小屋をかけて、体のとても大きな老人が住んでいました。その老人がいつからそこに住んでいるのか、千草の人々の中にも知るものはだれもいません。ただ、この老人は大変な長生きであるといううわさばかりが流れていました。

この年三月、そのうわさを聞いた宍粟郡の長官である春日部羽振（かすかべのはぶり）が、この老人を役所へ呼び出しました。

「おまえは、なぜあのような山奥に一人で住んでいるのだ。」

長官は問いました。そのころはふつうの人であれば、郡の長官に呼び出されれば庭に平伏（へいふく）してふるえながら答えるものでしたが、老人はどっかりとこしをおろし、大きな背中をピンとのばして、役所の外まで聞こえるような大きな声で答えました。

「わしは十三歳の時に天狗（てんぐ）にさらわれ、そのあと今住んでいる山に捨てられたのじゃ。わしを捨てるとき、天狗は自分に仕えてくれた礼だと言って、ひとつの団扇（うちわ）をくれた。この団扇を持っていれば、長生きができるというのじゃよ。」

「ではおまえはその団扇を持っているから長生きなのじゃな。」

長官がそう問いかけると、老人は天を見上げて大笑いをしながら答えました。

「いやいや、それがのう、そのあとしばらくしてから、天狗はまた団扇を持って帰ってしまったのじゃよ。惜しくなったのかのう。じゃが、わしはこうして長生きをしておる。不思議なものじゃわい。ハッハッハッ。」

老人は楽しそうに笑いました。長官をはじめ、その場にいるものたちはさっぱりわけがわかりませんでした。

伝説

千草の老人 長生きな大男の伝説

老人は、千草に住んでいた山伏（やまぶし）の次男で、さらわれたときの名前を小春（こはる）といったと伝えられています。

老人は、三百八十歳のとき、ついにそれまで住んでいた大山を降り、同じ千草の千町ヶ原（せんちょうがはら）に出て、毎日いろいろなお経を読んで暮らしました。老人は日ごろ食べるものは松の葉ばかりでしたが、水は毎日三十六リットルも飲んでいたと言います。そして大変な大男で、背丈は二メートル二十センチメートル以上、片手には三メートル六十センチメートルもある長い鉄の棒を持ち、背中には柄（え）の長さが二メートル七十センチメートルもある大きなまさかりを背負って歩いていたそうです。

それから二百年以上がたった正暦（しょうりゃく）3（992）年、今の佐用町（さようちょう）にあった宇野山（うのやま）というところに、鬼神（きじん）があらわれて暴れまわっているとの知らせが届きました。国中の神々に対して、鬼神が退散（たいさん）するように祈りがささげられ、姫路（ひめじ）や龍野（たつの）あたりに領地を持っていた播磨国（はりまのくに）の役人たちが、軍勢をひきいて討伐（とうばつ）に向かいました。

やがて、暴れまわっていたものたちは無事に退治されましたが、その正体は鬼神ではなく、鬼の面をつけたならずものの一味でした。その首領の不動麻呂（ふどうまる）という人物は、この千草の老人の子孫だったと伝えられています。不動麻呂一味を退治した国の役人たちは、主だった五人の首を取り、二度とこういうものたちがあらわれないようにと、かつて老人が住んでいた宍粟の千草ヶ原の林の中にさらしたということです。

（『播州府中記』、『播州巡行聞書』をもとに作成）

紀行 長寿伝説

宍粟千種

老人が住んでいたという播磨（はりま）の西北端、宍粟市千種町（しろうしちくさちょう）を訪ねてみた。現在は「千種」と表記するが、江戸時代までは「千草」と書かれることが普通であった。「千草」の名称は、すでに奈良時代初めに書かれた『播磨国風土記（はりまのくにふどき）』に「千草村」として登場する。明治初めまでは、山の土を水路に流して取る砂鉄を原料とし、周辺の豊富な森林資源を燃料とする「たたら製鉄」が盛んだった地域でもある。

伝説では、老人は「大山」に住んでいたとされ、その後に「千町ヶ原」に出たとされている。残念ながら「大山」も「千町ヶ原」も、現在のどこにあたるのかははっきりしない。宍粟市一宮町（しろうしいちのみやちょう）にも千町というところがあるが、一宮町と千種町とはかなり離れていてじっくりこない。『播州巡行（考）聞書（ばんしゅうじゅんこうききがき）』という江戸時代の書物には「千草の千町原」で猿に化かされたという話がある。やはり「千町原」は、現在の千種町にあったと考えた方がよさそうだ。千種町岩野辺（いわのべ）には千草仙人の墓とされる石塔があるという。

千種の山は深い。北側の鳥取県境には三室高原（みむろこうげん）、西側の岡山県境にはちくさ高原が広がる。いずれもゆるやかな斜面に広大な森林がひろがっている。山岳修験の霊場ともなっていた岡山県境の後山（うしろやま）、鳥取県境の三室山、宍粟市波賀町（しろうしはがちょう）との境界付近の植松山（うえまつやま）など、標高1000mを超える山並みが東北西の三方を取り囲んでいる。どれも奥深く、「大山」や「千町ヶ原」と呼ばれてもおかしくない高山や高原である。こうした深い山の世界への畏れが、この老人伝説を生み出したのである。



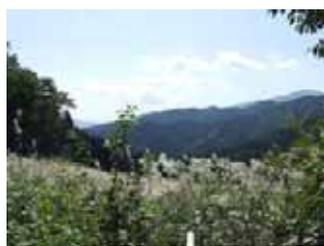
千種の山
(岩野辺より笛石山方面を望む)



岩野辺二宮神社



後山(岡山県美作市側から)



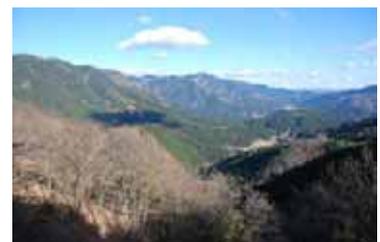
三室高原



ちくさ高原
(天兒屋川源流付近)



植松山



志引峠から見た千種の谷

『峰相記』

このサイトで紹介した伝説の前半は、江戸時代中ごろに編纂された『播陽万宝知恵袋（ばんようばんぼうちえぶくろ）』に収録されている『播州府中記（ばんしゅうふちゅうき）』の記述をもとに、多少想像をふくらませて構成したものである。ただし残念ながら、単に長生きで背の高い老人がいたという程度の話で終わってしまっており、すでに話そのものの詳細が失われかけているように見える。

また、後半の宇野山の山賊の話は、同じく『播陽万宝知恵袋』に収録された『播州巡行聞書』から採録している。『播州府中記』の話は老人が主役となっているが、『播州巡行聞書』の方は山賊伝説を主題とするものである。こうした別の主題の話の中に、千草の老人の名前が登場するということから見て、やはり江戸時代以前の古い段階においては、千草の老人の伝説は相当有名であったと考えられる。

実際、この伝説は中世から語られていたようだ。現在、太子町（たいしちょう）の斑鳩寺（いかるがでら）に写本が伝わる『峰相記（みねあいき）』。これは、南北朝時代に執筆された、播磨の宗教・歴史・地理を伝える書物であるが、千草の老人の伝説も「千町原ノ老翁（ろうおう）」という題名だけが記述の中にあげられている。残念ながら話の内容はわからないが、この伝説は、少なくとも南北朝時代から語りつがれていたことがわかるのである。

ただし、この話は『峰相記』の筆者によって、「証拠モ時代モナク、大様（おおよう）ナル伝説共ニテ」とされている。すでに中世の知識人にとっても、信じるに足りない話とされていたようだ。

『峰相記』が生み出された姫路市石倉（いしくら）の鶏足寺（けいそくじ）跡を訪ねてみた。峰相山（みねあいさん）と呼ばれる山の山頂近くに伽藍（がらん）があった山岳寺院で、戦国時代の終わり、羽柴秀吉（はしばひでよし）の焼き討ちにあって滅亡したとされている。

寺跡へは、南麓の石倉地区から尾根筋をたどって、途中亀岩（かめいわ）や大黒岩（だいこくいわ）といった巨岩を通過しながら、山頂へ向かうコースがある。山頂付近には、下から見上げているだけでは想像がつかないほど、かなり広い平坦地がひろがっていて、いくつもの人工的に削平された平坦面が段状に積み重なっている。そのうち最も高い一帯にある平坦面には、二つの祠（ほこら）と、いくつかの寄せ集められた五輪塔（ごりんとう）がまつられている。いまは訪れる人もまれな山中だが、かつては、多数の堂舎や僧房が立ち並んでいたようだ。こうした山上の寺院で、『峰相記』は執筆された。



卯の山峠
(宇野山峠、佐用町末広)



峰相山鶏足寺跡



峰相山遠景
(大黒岩手前より)



亀岩遠景



大黒岩



五輪塔群



石段跡？

八百比丘尼伝説

『峰相記』には、このほかにも今日では消滅しかかっている伝説がいくつも記載されている。そうした話としても一つだけ、明石の人魚の話にふれておきたい。これも『峰相記』では「明石浦二人魚ヲツリタル事」と話の名前があげられるだけのものである。また、『播陽万宝知恵袋』に収録されている『播州古所伝聞志（ばんしゅうこしょでんぶんし）』では、「明石の浦で人魚を釣ったのは、神護景雲元（767）年7月10日のことで、小枝の連という人が釣った」と記されている。これも断片的な記述と言わざるを得ない。しかし、この話については、全国的に流布している八百比丘尼（はっぴやくびくに）伝説との関連が指摘されている。



人魚(錦絵 観音靈験記
三十二番 近江国観音寺)



人魚(『北斎漫画』)

八百比丘尼伝説とは、人魚の肉を食べた女性が不老長寿の効果を得るという話で、多くの場合、いつまで経っても顔かたちも若いまままで、人並みはずれた長寿のために周囲から畏れられ、自ら若狭（わかさ＝現在の福井県西部）の寺へ行って尼僧として余生を送るという筋書きになっている。県域でも神河町比延（かみかわちょうひえ）で伝えられていたことが知られている。『峰相記』の断片的な記述から、こうした伝説が中世から語られていた可能性が考えられるのである。

不老長寿は、古くから多くの人々の願いであったはずである。しかし、千草の老人にせよ、八百比丘尼にせよ、現在残されている伝説や史料ではむしろそれを不気味なものとしてとらえている印象を受ける。猫や猿といった動物も、年をとりすぎると化け猫やヒビといった妖怪に変化していくと考えられていたが、これと同じように思われたのだろうか。あるいは、誰もが欲しいものを手に入れた者へのねたみや、普通ではない者、日常性、常識からはずれた者への、恐れや排除の感情などをうかがうこともできよう。

しかし、そうしたマイナスイメージだけがこうした伝説の本来の主旨だったのだろうか。ここで紹介した2つの話は、遅くとも中世から語られている伝説であった。時代の変化にともなって伝説が変わっていく中で、何か大事な要素が語られなくなってしまったのかもしれない。



明石の海



明石港

用語解説

【『播磨国風土記』】はりまのくにふどき

律令国家（りつりょうこっか）の命令によって編纂された古代播磨の地理書。霊亀元（715）年前後に編纂されたものと見られている。現存するものは、三条西家（さんじょうにしけ）に所蔵されていた古写本で、巻首の赤石（明石＝あかし）郡の全部、賀古（加古＝かこ）郡冒頭の一部と、巻末の赤穂郡（あこうぐん）の全部の記載が欠落している。活字化されたものは、日本古典文学大系新装版『風土記』（秋本吉郎校注、岩波書店、1993年）のほか、全文を読み下した、東洋文庫145『風土記』（吉野裕訳、平凡社、1969年）などがある。

【『播州巡行（考）聞書』】ばんしゅうじゅんこうききがき

『播陽万宝智恵袋（ばんようばんぼうちえぶくろ）』巻43収録。芦屋道海（あしやどうかい）著。播磨諸所の古跡、寺社や武家、僧侶たちをめぐる奇談や逸話を集めた書物。芦屋道海は天正年間に著作活動を進めた人物であり、本書もそのころの成立と考えられる。道海については、本用語解説『播磨府中めぐり（はりまふちゅうめぐり）』項目を参照されたい。

【『播陽万宝知恵袋』】ばんようばんぼうちえぶくろ

天川友親（あまかわともちか）が編纂した、播磨国の歴史・地理に関する書籍を集成した書物。宝暦10（1760）年に一旦完成したが、その後も若干の収録書籍の追加が行われている。天川友親は現在の姫路市御国野町御着（ひめじしみくにのちょうごちゃく）の商家に生まれた。収録された書物は、戦国末・安土桃山時代から、友親の同時代にまでわたる125件に及ぶ。これらのほとんどは、現在原本が失われてしまっており、本書の価値は高い。活字化されたものは、八木哲浩校訂『播陽万宝知恵袋』上・下（臨川書店、1988年）がある。

【『播州府中記』】ばんしゅうふちゅうき

『播陽万宝智恵袋（ばんようばんぼうちえぶくろ）』巻14収録。天正4（1576）年芦屋道仙（あしやどうせん）の著。播磨の伝説集で、もと79項目の話が収められていたが、『播陽万宝智恵袋』には、三木通識が他書に出ているものを省いて、19項目を抽出したものが収められている。芦屋道仙は、『播陽万宝智恵袋』巻43収録の赤松了益（あかまつりょうえき）著『播州龍城聞書（ばんしゅうりゅうじょうききがき）』に、飾東郡三宅（しきとうぐんみやけ＝現在の姫路市三宅）に住む占い師であり、平安時代の伝説的陰陽師芦屋道満（あしやどうまん）の子孫である、と記されているので、実在の人物と見てよいだろう。なお、三木通識については、本用語解説の『播州府中めぐり拾遺（ばんしゅうふちゅうめぐりしゅうい）』項目を参照されたい。

【『峰相記』】みねあいき

峰相山鶏足寺（みねあいさんけいそくじ＝現在の姫路市石倉の峰相山山頂付近にあった寺）の僧侶が著した中世播磨の宗教・地理・歴史を記した書物。原本は本文冒頭の記述から貞和4（1348）年ごろに成立したと考えられる。現存する最善本は揖保郡太子町（いぼぐんたいしちょう）の斑鳩寺（いかるがでら）に伝わる写本で、奥書から永正8（1511）年2月7日に書写山別院（しょしゃざんべついでん）の定願寺（じょうがんじ）で写されたものであることがわかる。活字化されたものは、『兵庫県史』史料編中世4（兵庫県史編集専門委員会、1989年）や、全文口語訳をした、西川卓男『口語訳『峰相記』 中世の播磨を読む』（播磨学研究所、2002年）などがある。

用語解説

【羽柴秀吉】はしばひでよし

1537 - 1598。織田信長に仕えて頭角を現し、天正5（1577）年に信長の命を受けて播磨に進出する。この時点ですでに播磨の多くの勢力は信長に服属していたが、小寺孝高（こでらよしたか、後の黒田如水）の協力などによってあらためて平定を進めた。しかし、天正6（1578）年に三木の別所（べっしょ）氏、摂津有岡城（ありおかじょう=現在の伊丹市）の荒木村重（あらかむらしげ）が相次いで離反したため、三木城などをめぐって戦った。天正8（1580）年に、別所氏のほか、英賀（あが=現在の姫路市飾磨区英賀宮町付近）の一向一揆勢力、宍粟郡（しそぐん）の宇野（うの）氏などを攻略して播磨を平定した。また同時期に但馬へも兵を進めていて、最終的には播磨と同じ天正8年に、守護家山名氏を降伏させて平定した。天正9（1581）年には因幡国鳥取城や淡路国を攻略するとともに、居城としていた姫路城を改築している。

天正10（1582）年の本能寺の変の後、明智光秀（あけちみつひで）、柴田勝家（しばたかついえ）らを相次いで滅ぼし、小牧・長久手の戦い（1584年）の2年後に徳川家康（とくがわいえやす）を臣従させ、天正13（1585）年に四国を平定する。翌14年には豊臣姓を名乗り関白となり、15年に九州を平定、天正18（1590）年に関東、東北を平定し全国を統一した。文禄元（1592）年からは2度にわたる朝鮮半島への侵略戦争を進めたが、慶長3（1598）年に没した。

【『播州古所伝聞志』】ばんしゅうこしよでんぶんし

『播陽万宝智恵袋（ばんようばんぼうちえぶくろ）』巻14収録。天正2（1574）年芦屋道考（あしやどうこう）の著。播磨の社寺、歴史、風俗などを記したもの。本来は82項目の話が載せられた書物であったが、『播陽万宝智恵袋』には、三木通識が他書との重複を省いて抽出した39項目が載せられている。著者の芦屋道考については詳しいことはわからない。三木通識については、本用語解説の『播州府中めぐり拾遺（ばんしゅうふちゅうめぐりしゅうい）』項目を参照されたい。

参考書籍

伝説の参考書籍

書籍名	刊行年	著者名	発行者
播州府中記(収録:『播陽万宝知恵袋』上)	1988	編纂:天川友親、校訂:八木哲浩	臨川書店
播州巡行(考)聞書(収録:『播陽万宝知恵袋』下)	1988	編纂:天川友親、校訂:八木哲浩	臨川書店
播州龍城聞書(収録:『播陽万宝知恵袋』下)	1988	編纂:天川友親、校訂:八木哲浩	臨川書店
日本伝説 播磨の巻	1918 (1978復刻)	編著:藤沢衛彦	日本伝説叢書刊行会

歴史・文化の参考書籍

書籍名	刊行年	著者名	発行者
峰相記(収録:『兵庫県史』史料編中世4)	1989	編集:兵庫県史編集専門委員会	兵庫県
増補播陽里翁説(収録:『播陽万宝知恵袋』上)	1988	編纂:天川友親、校訂:八木哲浩	臨川書店
播州古所伝聞志(収録:『播陽万宝知恵袋』上)	1988	編纂:天川友親、校訂:八木哲浩	臨川書店
播磨鑑	1958	著者:平野庸修、校訂:播磨史籍刊行会	播磨史籍刊行会
山島民譚集(収録:『定本柳田國男集』27)	1964	柳田國男	筑摩書房
千種村是	1920	編集:兵庫県宍粟郡千種村役場	兵庫県宍粟郡千種村役場
伝説の兵庫県	1961 (2000再刊)	西谷勝也	神戸新聞総合出版センター(再刊)
千種 西播奥地民俗資料緊急調査報告書	1972	編集:兵庫県教育委員会文化課	兵庫県教育委員会
兵庫の伝説 1	1981	編集:有井基、絵:のざきジョー	神文書院
播磨 山の地名を歩く	2001	編集:播磨地名研究会	ひめしん文化会、神戸新聞総合出版センター
日本の昔話と伝説	2004	大島建彦	三弥井書店
しそあの逸話	2006	編集:しそあ森林王国協会	しそあ森林王国協会

所在地リスト



千種町	宍粟市千種町
未広	佐用町未広
峰相山	姫路市石倉
明石	明石市中崎、ほか

ひょうご歴史ステーション「ひょうご伝説紀行」は、兵庫県立歴史博物館により管理・運営しております。サイトで使用するテキスト・画像などのコンテンツ全般の著作権は当館に帰属し、無断での複写・転用・転載などを禁止いたします。

ひょうご伝説紀行 妖怪・自然の世界
<http://www.hyogo-c.ed.jp/~rekihaku-bo/historystation/legend3/>

編集発行 兵庫県立歴史博物館
 〒670-0012 兵庫県姫路市本町6-8 079-288-9011

第1刷 2009年4月1日

ひょうご伝説紀行
妖怪と自然の世界

夢前川の河童
穴淵の綱引き、大勝負

伝説

夢前川の河童
穴淵の綱引き、大勝負

紀行

河童
・前之庄穴淵の河童
・県域各地の河童伝説
・河童の考え方

関連情報

用語解説
参考書籍
所在地リスト

伝説

夢前川の河童 穴淵の綱引き、大勝負

姫路市夢前町前之庄（ひめじしゆめさきちようまえのしょう）に岡（おか）というところがあります。西側に夢前川（ゆめさきがわ）が流れていて、むかしはその川原に、村の人たちが飼っている牛や馬を放して、草を食べさせていました。川原の南の方には、高い岩山を背にして大きな淵（ふち）があります。どんなに日照りが続いても底を見たものがないというくらい深い淵で、村の人々は「穴淵（あなぶち）」と呼んでいました。

ここから西へ山を越えた反対側の谷に、「どんどが淵」という淵があります。穴淵は、じつはこの「どんどが淵」と地下でつながっているとも伝えられています。

この穴淵には、大きな河童（かっぱ）が住んでいて、川原で草を食べている牛や馬を淵へ引きこんで食べてしまうと言われていました。ある日、庄屋（しょうや）さんの家の馬が、いつものように川原で草を食べていると、首に付けた手綱（たづな）がふとしたひょうしに川の水につかまえてしまいました。すきをうかがっていた河童は、この手綱を取って、馬を引きこんでしまおうと力いっぱい引っかかりました。しかし、庄屋さんの馬は、たいへんな名馬で、とても強い力を持っていたのです。

川原で、河童と馬との命がけの綱引きが続きました。とうとう馬の力が少しだけ勝って、河童の甲羅（こうら）が水の上に出てしまいました。河童は水の中にいるときはものすごい力を持っていますが、甲羅が水面に出てしまうと力が出ません。ついに馬に引きずりだされ、そのまま庄屋さんの家まで引っぱって行かれてしまいました。

庄屋さんは河童を見ると、

「いつも村のものが大事にしている牛や馬を引きずりこんでしまうやつは、おまえか。覚悟（かくご）しろ。」

と、槍（やり）で一つきにしまおうとかまえました。

「どうか命ばかりはお助けください。今日までしてきた悪事は深くおわび申し上げます。お助けいただければ、よい薬の作り方をお教えますから。」

河童は手をすりあわせ、頭を地面にすりつけて頼みました。庄屋さんも、心からわびていることがわかりましたので、許してやることにしました。

河童が教えてくれた薬は、お乳の出が悪いお母さんにあげると、たくさんお乳が出るようになる薬でした。それからこの薬は、庄屋さんの家で作られるようになったということです。

（『郷土の民話』中播編をもとに作成）

紀行 河童

前之庄穴淵の河童

全国どこにでもある河童話。川遊びをする子供や水を飲みにきた馬を川に引き込んで、「尻こ玉」を抜いてしまうという恐ろしい話もあれば、逆に悪事が露見して人間に捕まり詫言証文を書かされ、薬の製法を伝授するという話もある。このサイトで紹介した「夢前川の河童」の伝説は、馬を川に引き込もうとするが失敗して秘伝薬を伝える話で、類話は数多い。

ただし、河童が伝える秘伝薬は、「骨接ぎ（ほねつぎ）の薬（外傷の治療薬）」とする話が一般的である。夢前川の河童の場合は「お乳の出がよくなる薬」となっていて、骨接ぎ薬話が一般的に流布した後に、それをアレンジしてできあがった話ではないかと考えられる。

河童がいたという、姫路市夢前町前之庄（ゆめさきちょうまえのしょう）の夢前川を訪ねてみた。この話は前之庄のうちでも、中国縦貫自動車道の南側にある岡（おか）という集落を舞台に伝わっている。岡地区で畑仕事をしていた女性にうかがってみると、河童が出るという「穴淵（あなぶち）」は集落の南側にあるというので行ってみる。一目見ただけでたしかに深い淵であることが実感できる。夢前川が南から東向きへ流路を曲げるところで、対岸には山が迫って切り立った崖になっている。すぐ下流に、農業用水を取水する井堰（いせき）があって、ちょうどダム状になっているためにより一層水量が多く見える。ただし、見た目だけではなく実際に川底も深いようで、女性の話では、渇水の時でも底が見えたことはないという。今でも夏になると付近の子供たちが水遊びをするそうだ。岡の集落内には、この伝説に出てくる庄屋さんの子孫がお住まいのお宅もあった。



河童と雷公(錦絵 江戸名所道 戯尽 二 両国の夕立、個人蔵)



夢前川の穴淵



穴淵 深い...



穴淵遠景(正面の崖の下)

「穴淵」とつながっているとされる、姫路市夢前町高長（こうちょう）と寺（てら）の境界にある「どんどが淵」にも行ってみた。前之庄の谷筋からひとつ西側の谷で、菅生川（すごうがわ）へ合流する坪川（つぼがわ）の上流部にある。この淵は、「ひょうご伝説紀行 語り継がれる村・人・習俗」の「鹿が壺（しかがつぼ）から安志（あんじ）の里へ」で紹介した姫路市安富町関（やすとみちょうせき）の鹿が壺と同じで、地質学的には「ポットホール（甌穴＝おうけつ）」と呼ばれる岩盤のくぼみである。姫路市と合併する前の夢前町のころから町指定の天然記念物になっていて、「穴淵」とつながっていると伝説を含めた案内柱がたてられていた。



どんどが淵遠景



どんどが淵

県域各地の河童伝説

県域にはほかにもたくさんの河童話がある。たとえば日本民俗学を作り出した柳田國男（やなぎたくにお）も、自らの故郷の河童話を伝えている。柳田は福崎町辻川（ふくさきちょうつじかわ）の生まれで、13歳までこの地を中心に育った。生家は現在辻川山の麓に移築保存され、隣接して「柳田國男・松岡家顕彰会記念館」も建てられている。柳田が自らの人生を回顧した『故郷七十年』には、幼いころの記憶として辻川付近の民俗に関わる話もたくさん語られていて、その中に次のような市川の河童（河太郎＝ガタロ）の話も出てくる（「駒ヶ岩の河太郎」）。



柳田國男生家
（福崎町西田原）

辻川あたりでは河童はガタロというが、随分いたずらをするものであった。子供のころに、市川で泳いでいるとお尻をぬかれるという話がよくあった。それが河童の特長なわけで、私らの子供仲間でもその犠牲になったものがあった。毎夏一人ぐらいいは、尻を抜かれて水死した話を耳にしたものである。市川の川っぴちに駒ヶ岩（こまがいわ）というのがある。今は小さくなって頭だけしか見えていないが、昔はずいぶん大きかった。高さ一丈もあったであろう。それから石の根方が水面から下へまた一丈ぐらいあって、蒼々（あおあお）とした淵になっていた。そこで子供がよく死ぬのである。私ももう少しで死にかかった経験がある。水が渦を巻いているので引き込まれるが、あわてないで、少しじっとしていると、流れのまにまに身体が運ばれ、浅瀬へ押し流されて、浮かび上がることができる。そこであまりバタバタすると、渦の底へ引きこまれてしまうのだった。鰻（うなぎ）のたくさんとれる所で、枝釣りをよくしたものであった。

駒ヶ岩は、柳田が言うように今はそれほど大きくは見えない。しかし、岩の上に立ってみると、市川の流れはやはり少し深い淵になっていて、手頃な飛び込み台のようにも感じられる。



市川の駒ヶ岩



市川の駒ヶ岩

そのほか、河童伝説は県内だけでも無数にある。ここでは3つだけ紹介しておこう。

加古川は、その上流部、現在の丹波市氷上町（ひかみちょう）付近では、「本郷川」とも呼ばれているが、ここには「尻引きマント」と呼ばれる河童がいたという。子供が川で遊ぶとき、なまあたたかい、どんよりした日は気を付ける、とくに佐治川（さじがわ）と葛野川（かどのがわ）との合流点の下流、蔵ヶ淵（くらがふち）は危ない、と言われている。



本郷の加古川



本郷の加古川

西宮市塩瀬町生瀬（しおぜちょうなまぜ）・木元（このもと）付近にある武庫川（むこがわ）の大きな淵でも、河童話がある。武庫川が大きく湾曲している「うるしが淵」と呼ばれる淵が舞台で、ここでも子供が犠牲になると、河童のしわざとされた。淵の底で水流が巻いている渦は、河童が子供を引き込むためにつくったものと言われ、河童の好物のキュウリを食べると引き込まれやすいそうである。



武庫川 うるしが淵



武庫川 うるしが淵

豊岡市竹野町竹野では、7月に川すそ祭りという川の神の祭りが行われる。この日は、川すその神が河童（川コ）を川に放しているの、川で遊ぶとはらわたを抜かれてしまう、と言う。



竹野海岸



竹野川河口

河童の考え方

最後に、少し堅い話になるが、河童が研究の世界でどのように語られてきているかを見ておきたい。柳田國男は、河童は古い水神の零落した姿とみた。かつては水の神として尊重され、信仰されていた水神が、時代の変化の中で地位を落とし、今日伝えられるような人間に害を与える怪物や、失敗して詫び証文を書く少々間抜けな姿になっていったとの変化を想定したのである。柳田は、河童が馬を水に引き込むとの話は、水神へ馬が捧げ物とされていたことの痕跡と見た。こうした「神が零落したものが妖怪である」との見方は、河童のみではなく、柳田の妖怪論全体に通底する仮説として述べられている。

柳田の研究には、自らが立ち上げた「民俗学」の確立のために、ひとまず日本一国を対象をしぼって研究を進める必要があるとの方針があった。これに対して、ひろくユーラシア大陸の広がりの中で河童を検討したのが石田英一郎である。

石田は、河童が馬を水に引き込む河童駒引伝説（かっぱこまひきでんせつ）は、水辺で雌馬を飼って竜や水神の子供を得るという民間信仰や、優れた馬が水の中から出現したとする伝承と共通する根源から生まれたもの、ととらえ、こうした類話がユーラシア大陸全体にわたって見られることを指摘する。そして、ユーラシア大陸では、水神と牛、馬、猿とは伝説上で密接に関わりを持っていたとし、日本各地に見られる河童駒引伝説も、こうした水神と馬との結合を物語る一類型であると位置づけた。石田によれば、ギリシャ神話のポセイドンも、牛馬と結びついた水神として河童と共通性があるという。



河童（『北斎漫画』）

しかし近年では、柳田の妖怪論を見直そうとする研究が進められている。小松和彦氏は、柳田の「神の零落した姿＝妖怪」という考え方に異議をとなえている。妖怪の中には、たしかに神から「零落」したものも存在したであろうが、中には、はじめから神ではなく、妖怪でしかなかったものや、あるいは妖怪から神へと上昇していったものもあるのではないかと、いうのである。

河童に関する研究では、こうした小松氏の考え方によく合う研究として、中村禎里氏のものがある。中村氏は、河童は近世以降に現れる妖怪であるとし、近世の文献に見える河童を検討し、四段階に分けてそのイメージの変遷を明らかにした。そして、柳田説の基礎になっている祭祀（さいし）の対象となるような河童は、第四段階の18世紀末以降になってようやく現れることや、河童イメージの元になった実在の動物・人間として、カワウソ、スッポン、猿や、山の民、あるいは差別の対象となっていた人々などを示している。こうした中村氏の分析結果を、小松氏の考え方に照らして読むと、河童はむしろ妖怪から神へと上昇していく存在のようにも見えるのである。

どこにでも、といってよいほど全国的に見られる河童の伝説。しかし、その奥は深い。

用語解説

【ポットホール（甌穴）】ぼっとほーる（おうけつ）

河床が岩盤などの硬い物質でできていた場合、そこにできた割れ目などの弱い部分が水流で侵食されてくぼみとなる。そのくぼみに礫が入り、水流によって回されることで、岩盤を丸く浸食してできる穴のこと。

【柳田國男】やなぎたくにお

1875 - 1962。1875（明治8）年、現在の福崎町西田原辻川区（ふくさきちょうにしたわらつじかわく、当時の兵庫県神東郡田原村辻川）に松岡操（まつおかみさお）の6男として生まれる。11歳の時辻川の旧家三木家に預けられ、同家の蔵書を濫読したという。13歳で長兄の鼎（かなえ）に引き取られ、茨城県利根町（いばらきけんとなねちょう、当時の茨城県北相馬郡布川村）に転居した。

東京帝国大学に入学し、このころから兄井上通泰（いのうえみちやす）の紹介などで、田山花袋（たやまかた）、島崎藤村（しまざきとうそん）などの文学者との交流を持つ。大学卒業後、柳田家の養子となり、農商務省に就職し、その後法制局参事官、内閣書記官記録課長、貴族院書記官長などを歴任する。

こうした官僚としての仕事の傍ら、『遠野物語（とおのものがたり）』の刊行や雑誌『郷土研究』の創刊など、後に自らが「民俗学」として確立させる分野の研究と組織作りを進めた。1919（大正8）年に官界を辞職、以後東京朝日新聞社客員などを経て、民俗学研究の確立に専念する。戦後も自宅に民俗学研究所を設立、日本民俗学会の会長を務めるなど活躍を続けた。1962（昭和37）年死去。著作集としては、『定本柳田國男集』全31巻＋別巻5冊（筑摩書房）、『柳田國男全集』全36巻＋別巻2（筑摩書房、刊行中）などがある。

参考書籍

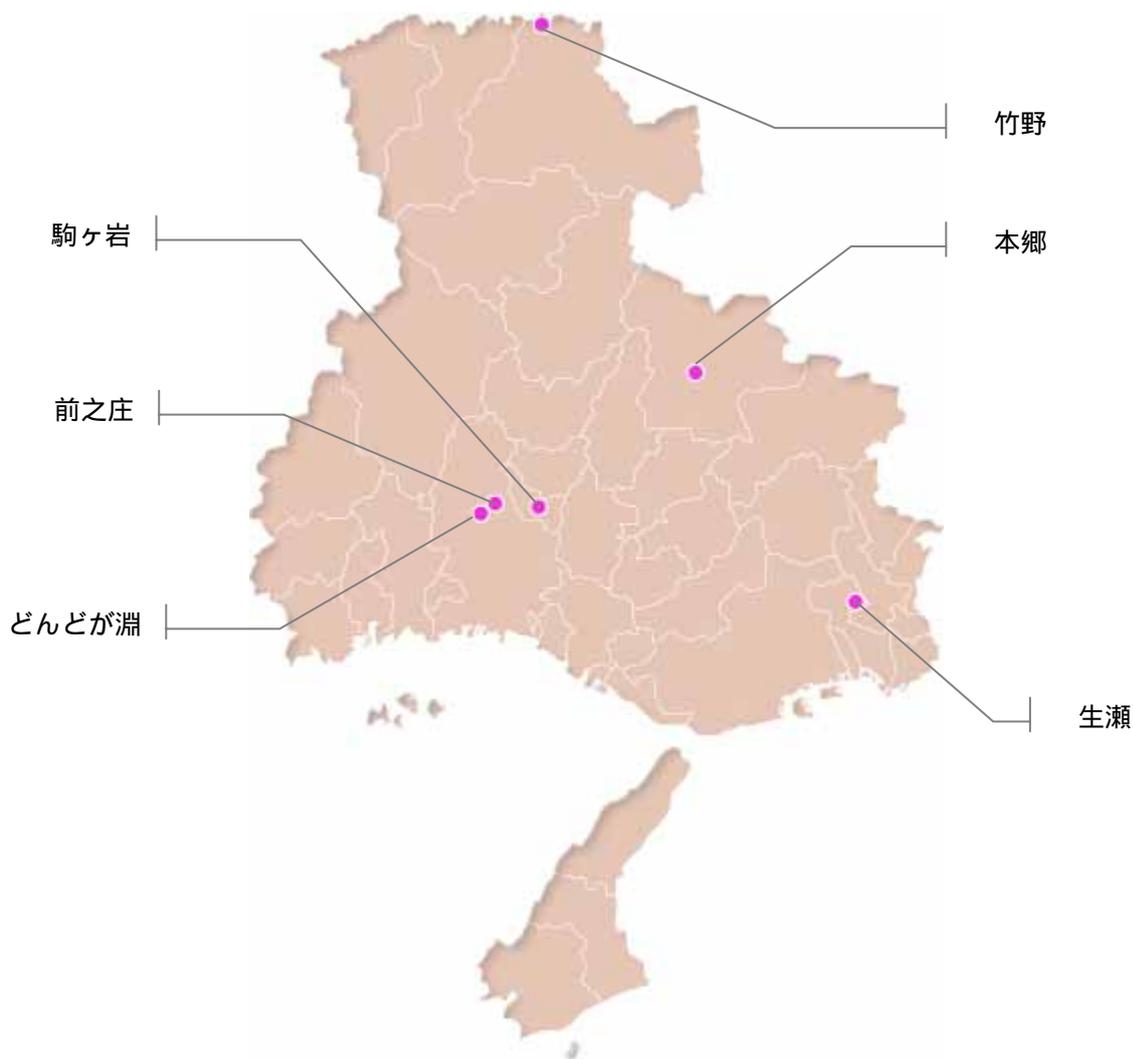
伝説の参考書籍

書籍名	刊行年	著者名	発行者
郷土の民話 中播編	1973	編集:"郷土の民話"中播地区編集委員会	兵庫県学校厚生会
日本伝説大系 8 北近畿編	1988	編集:福田晃	みずうみ書房

歴史・文化の参考書籍

書籍名	刊行年	著者名	発行者
日本伝説集	1913 (1973復刊)	高木敏雄	郷土研究社(復刊:宝文館出版)
山島民譚集(収録:『定本柳田國男集』27)	1964	柳田國男	筑摩書房
妖怪談義(収録:『定本柳田國男集』4)	1964	柳田國男	筑摩書房
故郷七十年(収録:『定本柳田國男集』別巻3)	1964	柳田國男	筑摩書房
新版 河童駒引考 比較民族学的研究 (岩波文庫青193-1)	1994 (新版初出 1966)	石田英一郎	岩波書店(新版初出:東京大学出版会)
兵庫のむかし話	1978	編著:兵庫県小学校国語教育連盟	日本標準
日本の伝説 43 兵庫の伝説	1980	宮崎修二郎、足立巻一	角川書店
西宮ふるさと民話	1990	編集:西宮市郷土資料館	西宮市教育委員会
妖怪学新考 妖怪からみる日本人の心 (MC新書18)	2007 (初出1994)	小松和彦	洋泉社(初出:小学館)
河童の日本史	1996	中村禎里	日本エディターズスクール出版部
怪異の民俗学 3 河童	2000	責任編集:小松和彦	河出書房新社
丹波(篠山市・丹波市)のむかしばなし 5	2005	編集:「丹波(篠山市・丹波市)のむかしばなし」編集委員会	(財)丹波の森協会
河童伝承大事典	2005	和田寛	岩田書院

所在地リスト



本郷	丹波市氷上町本郷
竹野	豊岡市竹野町竹野
駒ヶ岩	福崎町南田原
前之庄	姫路市夢前町前之庄
どんどが淵	姫路市夢前町高長、寺
生瀬	西宮市塩瀬町生瀬、名塩木之元

ひょうご歴史ステーション「ひょうご伝説紀行」は、兵庫県立歴史博物館により管理・運営しております。サイトで使用するテキスト・画像などのコンテンツ全般の著作権は当館に帰属し、無断での複写・転用・転載などを禁止いたします。

ひょうご伝説紀行 妖怪・自然の世界
<http://www.hyogo-c.ed.jp/~rekihaku-bo/historystation/legend3/>

編集発行 兵庫県立歴史博物館
 〒670-0012 兵庫県姫路市本町6-8 079-288-9011

第1刷 2009年4月1日

ひょうご伝説紀行
妖怪と自然の世界

神池寺の澄まざるの池
お坊さんの大蛇退治



伝説

神池寺の澄まざるの池
お坊さんの大蛇退治

紀行

蛇
・神池寺
・丹波の大蛇伝説

関連情報

用語解説
参考書籍
所在地リスト

伝説

神池寺の澄まらずの池 お坊さんの大蛇退治

丹波市市島町（たんばしいちじまちょう）の西の山上に神池寺（じんちじ）という大きなお寺があります。むかしむかし、このお寺で、子供のお坊さんがつぎつぎといなくなる不思議なできごとがありました。

いなくなった小僧（こぞう）さんたちは、みな夕べの鐘（かね）をつきに行き、そのまま帰ってこないのです。おかしいと思った和尚（おしょう）さんは、鐘つきに行く小僧さんの後を、大人のお坊さんに見はらせることにしました。

数日の間、おかしいことは何もおこりませんでした。どんよりとした雲が空をおったある日の夕方のことです。いつものように小僧さんが夕べの鐘をつくとき、にわかにお堂の裏の林がざわざわと音をたて、中から大きな蛇（へび）が「にゅーっ。」と太い首を持ち上げてあらわれたのです。

大蛇（だいじゃ）は、そのままものすごいスピードで鐘をついている小僧さんを一のみにしてしまいました。見はっていたお坊さんは、あまりのできごとに声も出さず、腰がぬけてしまってしばらく動くこともできませんでした。

「これは大変なことじゃ。みなさん、よいお知恵はないかのう。」

この話を聞いた和尚さんは、すぐにお坊さんたちを集めて相談しました。

「大蛇は小僧を食べてしまうために姿をあらわします。ならば小僧とそっくりの人形を作って、その中に大変な毒を仕こんでおいてはいかがでしょう。」

一人のお坊さんの提案に和尚さんたちみんなも賛成して、さっそく人形作りに取りかかりました。

前に小僧さんがいなくなったのと同じどんよりとしたくもり空の日、お坊さんたちは毒を仕こんだ人形を鐘つき堂に運びました。そして、鐘をつく木に縄（なわ）をつけ、遠くはなれた大木のかげから、夕べの鐘をつきました。

「ゴォーン、ゴォーン。」

鐘の音がひびきわたります。すると、この間のようにまた裏の林がざわざわと音をたて、大蛇が首を持ち上げてあらわれたかと思うと、またたく間に人形を「バクリ。」と一のみにして、また山の中に姿を消していきました。

伝説

神池寺の澄まずの池

お坊さんの大蛇退治

しかししばらくすると、また山の林がざわざわ暴れだし、空からはゴーゴーともものすごい音をたてて大風が吹いてきました。お坊さんたちが大木にしがみつकिながら必死で様子を見つめていると、林の中で大蛇がもがき苦しみながら山の下の池へころがり落ちていく姿が見えました。

やがて風がおさまり、山ももとのように静かになりました。お坊さんたちがおそろおそろ大蛇が落ちていった池に近づくと、もとは澄んでいた池の水が、大蛇の血で赤くにごってしまっていました。

大蛇はそのまま姿を消しました。小僧さんたちがいなくなることも、もうありませんでした。お坊さんたちはまた安心して修行に打ちこむことができるようになりました。でも、池の水は、いつまでたっても赤黒くにごったままで、もとの澄んだ水には戻りませんでした。いつのころからか、人々はこの池のことを「澄まずの池」と呼ぶようになりました。

(『郷土の民話』丹有編をもとに作成)

紀行 蛇

神池寺

丹波市市島町（いちじまちょう）の東にそびえる妙高山（みょうこうさん）。その山頂近くに天台宗（てんだいしゅう）の古刹（こさつ）、神池寺（じんちじ）がある。神池寺という名前は、この伝説の舞台となった「澄まらずの池」に由来する。この池が、山頂近くにありながら、どんな大雨でも日照りでも枯れることがない、という不思議な池であることから、「神の池の寺」と付けられたという。



神池寺



澄まらずの池



澄まらずの池



常行堂

紅葉の美しい晩秋の日、ご住職の荒樋榮晋師にお寺に伝わる伝説の概要を教えていただいた。「澄まらずの池」は、境内の伽藍（がらん）からはやや離れた、神池寺会館の前にある。池の背後には昭和10（1935）年ごろに建てられた明治神宮の遥拝所（ようはいじょ）がある。池の水は、このサイトでは赤茶色に濁っているとしたが、当日は時間や季節のためか、ややどす黒く感じられた。深さはかなりあるようで、50年ほど前に底をさらったことがあったが、すり鉢状に泥がたまっていて、棒を刺しても底には届かなかったという。



常行堂前の
宝篋印塔

庫裏（くり）の近くには常行堂（じょうぎょうどう）があり、南北朝期の宝篋印塔（ほうきょういんとう）が残されている。そこから石段をあがって、門をくぐったところが鐘楼、本堂、仙人堂などがある伽藍の中心地である。

神池寺の境内へとつづく車道には、山のかなり下の方に寺域の入り口を示す標柱がある。中世までは広大な寺域の中に多数の伽藍、僧坊が建ち並び、近在の多くの子弟が入寺して繁栄した寺院であったとされていて、その面影を伝えている。しかし神池寺も、丹波のほかの多くの中世寺院と同様に、天正3～7（1575～79）年の明智光秀（あけちみつひで）による丹波攻めの中で焼き討ちにあい、大きく勢力を削減されたという。

さて、「澄まらずの池」伝説を紹介した文献の多くは、鐘突きに来た小僧さんをねらって、澄まらずの池から大蛇が登場したとする。しかしご住職の話では、大蛇は鐘楼の背後にある山から出てきたという。たしかに実際の伽藍配置から見ると、こちらの方がよく合うので、このサイトでもそのように紹介した。また、伝説の結末もお寺では、僧侶の法力によって大蛇が竜になって昇天した、としているという。



本堂

この神池寺には、「澄まらずの池」の他にも、いくつかの歴史にまつわる話が伝えられている。源平のころには平重盛（たいらのしげもり）が参詣し、寺域の北谷に一字一石の法華経を埋納したとされている。その跡とされているのが、境内からやや山を降りたところにある経塚で、今は小さな祠（ほこら）に石の地蔵がまつられ、その脇に宝篋印塔がある。



鐘楼

また、南北朝内乱に際しては、大塔宮護良親王（おおとうのみやもりよししのう）の命令書が届き、寺の僧兵が京都の合戦に参戦したという。神池寺僧兵の参戦は、『太平記（たいへいき）』巻8にも元弘3（1333）年の六波羅探題（ろくはらたんだい）攻めの中でのこととして記されていて、これは事実と見てよいだろう。また、護良親王が奉納したという鎧（よろい）も伝わっていた。こちらは明治維新のころ、梶井宮門跡（かじいのみやもんぜき）のもとへ貸し出した後、鎌倉に創建された護良親王をまつる鎌倉宮（かまくらぐう）の神体になった。『丹波氷上郡志』（1985年復刻、臨川書店）には、明治2（1869）年に鎧が神体になったときに、政府から神池寺に渡された書類が引用されている。



仙人堂



経塚



神池寺衆徒慰霊碑



神池寺衆徒慰霊碑

丹波の大蛇伝説

よく知られているように、蛇は、古来水の神や山の神の化身として信仰されてきた。時として、人間の力ではどうしようもない猛威をふるう水の力や、縦横に平野を流れる大河の乱流が、細長く力強い蛇を連想させたのであろう。

県域にも、水や山と蛇との結びつきを示す伝説は数多い。ここでは神池寺に近い丹波市（たんばし）、篠山市（ささやまし）に伝わる蛇伝説のいくつかを紹介したい。

篠山市街地のすぐ北東にある沢田（さわだ）地区の氏神が沢田八幡神社である。ここでは、10月中旬に「はも祭り」と呼ばれる秋祭りが行われる。むかしむかし、このあたりは一面の湿地であり、一匹の大蛇が住んでいて、村人たちに長男を人身御供（ひとみごくう）として差し出すよう要求していた。しかしあるとき、この村を通りかかった一人の武士が大蛇を退治してくれたので人身御供のならわしはなくなり、それから大蛇になぞらえた八モを切る行事を行うようになったとされている。紀行文「犬と人」で紹介している猿神退治伝説と同じモチーフの話である。

また、篠山盆地全体が大きな湖で、そこに大きな竜が住んでいたという伝説も伝わっている。この竜を大神が一矢で射殺し、それから盆地の水が減って人々が安心して暮らせるようになった、という。これは、篠山盆地の水を集めて加古川（かこがわ）へ注ぐ篠山川を、竜に見立てた話と考えられている。

丹波市でも同様の話は多い。ここでは佐治川（さじがわ）・本郷川（ほんごうがわ）などとも呼ばれる加古川の上流部が、人々に恵みをもたらす川になる。丹波市山南町応地（さんなんちょうおうじ）では、「蛇ない（じゃない）」という行事が毎年行われている。あるとき、大雨が降って加古川が増水し、川を渡ろうとしていた子供が流されそうになってしまった。そのとき、川上から白い大きな蛇が現れ、兩岸につかまって橋代わりになり、子供たちを助けてくれたという。

応地の人々は、この大蛇を山の神の化身と見た。それから毎年1月9日の山の神の日に、新しい藁を持ち寄って長い蛇をかたどった綱によりあわせ、村の大年神社（おおとしじんじゃ）に奉納するようになった、という。この「蛇ない」行事は、現在は成人の日に行われている。



沢田八幡神社



沢田八幡神社



篠山川
(篠山統合井堰上流)



応地大年神社



藁の蛇が掛けられた松



応地の加古川

用語解説

【宝篋印塔】ほうきょういんとう

本来は「宝篋印陀羅尼經（ほうきょういんだらにきょう）」を納めるための塔。日本ではとくに石塔の場合、墓碑や供養塔として建てられるようになっていた。石塔としては、鎌倉時代中ごろからの遺品が残る。形状は、方形の基礎、基礎よりも小ぶりの塔身、笠形の屋根、円筒状の相輪からなる。屋根には四隅に隅飾（すみかざり）と呼ばれる突起が立てられる。この隅飾りの開きぐあいに時代ごとの特徴がよくあらわれ、古いものほど直立し、新しいものは外側へ開いていく傾向がある。

【明智光秀】あけちみつひで

? 1582。美濃国（みののくに＝現在の岐阜県南部）の武家である土岐（とき）氏の一族とされる。越前国（えちぜんのくに＝現在の福井県東部）で朝倉（あさくら）氏に仕えていたが、永禄11（1568）年に足利義昭（あしかがよしあき）が織田信長を頼って美濃へ赴いた時に同行して信長に仕えるようになったと見られている。

以後信長に才能を認められ、京都の政務や、畿内周辺各地での軍事活動などに従事した。天正3（1575）年からは丹波攻略を命じられ、一時は多紀郡（たきぐん＝現在の篠山市）の波多野（はだの）氏を傘下に収めて、氷上郡（ひかみぐん＝現在の丹波市）黒井城（くろいじょう）の赤井（あかい）・荻野（おぎの）氏を攻めたが、翌年波多野氏の離反によって一旦敗れて撤退する。

その後天正5（1577）年ごろから再び丹波へ進出し、同7（1579）年6月に波多野氏の八上城（やかみじょう）を落とし、ついで赤井・荻野氏の黒井城や丹後（たんご＝現在の京都府北部）の一色（いっしき）氏を下して丹波・丹後を平定した。

天正10（1582）年6月、京都本能寺に信長を殺して天下の権を窺ったが、羽柴秀吉（はしばひでよし）に山城国山崎（やましらのくにやまざき＝現在の京都府大山崎町）で敗れ、敗走中に小栗栖（おぐるす＝現在の京都市）で住民に襲撃され死去した。

【平重盛】たいらのしげもり

1138 79。平清盛（たいらのきよもり）の長男。保元の乱（1156年）、平治の乱（1159年）では父に従って参戦。その後は清盛の後継者として順調に官位を昇進させ、仁安2（1167）年、父清盛が太政大臣を辞任するにあたって、朝廷から重盛に国家的軍事・警察権が与えられた。翌年から清盛が福原（ふくはら＝現在の神戸市兵庫区）の山荘に移ると、重盛が都において平家を代表するようになる。

しかし、安元3（1177）年、妻の兄であり、また長男維盛（これもり）の妻の父でもある藤原成親（ふじわらのなりちか）らによる平家打倒の陰謀が発覚する事件（鹿ヶ谷の陰謀、ししがたにのいんぼう）が起き、政治的に大きな打撃を受ける。その後、目立った活躍を見せないまま、治承3（1179）年7月に没した。

用語解説

【大塔宮護良親王】おおとうのみやもりよししんのう

1308 35。後醍醐天皇（ごだいごてんのう）の皇子。幼少のころに梶井門跡（かじいもんぜき）に入り、天台座主（てんだいざす）を2度務めた。元弘元（1331）年に後醍醐天皇が2度目の倒幕運動として元弘の変を起こすと、還俗してこれに参加した。建武政権成立後は一旦征夷大將軍に任命されるが、後醍醐や足利尊氏（あしかがたかうじ）と対立し、建武元（1334）年に謀反を企てたとされて捕らえられ鎌倉に幽閉された。翌年、鎌倉北条氏の残党が蜂起した中先代の乱（なかせんだいのらん）で鎌倉が陥落したとき、尊氏の弟である足利直義（ただよし）によって殺害された。

なお、播磨の守護となった赤松円心（あかまつえんしん）の三男則祐（そくゆう）は比叡山で出家しており、元弘の変では護良の配下として戦ったとされる。

また、護良をはじめとする後醍醐の皇子の名前につけられた「良」については、一般には「なが」と読まれることも多いが、近年では「よし」と読むべきとする説が有力である。

【梶井宮門跡】かじいのみやもんぜき

「門跡」とは、本来は仏法の正当な後継者を指すが、後にそうした後継者と見なされた貴族の子弟が入る格の高い寺院のことをも指すようになった。このうち、とくに天皇の子弟が入る寺院の場合は「宮門跡」と呼ばれた。

梶井門跡は、現在は洛北大原（おおはら）の三千院（さんぜんいん）のことを指すが、本来は天台宗（てんだいしゅう）の開祖最澄（さいちょう）が開いた寺院で、当初は比叡山（ひえいざん）の上により円融房（えんゆうぼう）と呼ばれていた。その後、比叡山東麓の坂本（さかもと＝現在の滋賀県大津市坂本）に移り、平安末期からは天皇家の子弟も入寺するようになり、梶井宮門跡とも呼ばれるようになった。

鎌倉・室町時代には京都市中周辺を転々としており、応仁の乱後に大原にあった政所（まんどころ）が本坊となった。江戸時代中ごろから、再び門跡自身は京都市中に房（僧侶の住居）を構えるようになり、寺院としての門跡もこの京都市中の房を指すようになっていた。現在の三千院が本坊とされたのは明治4（1871）年のことである。

参考書籍

伝説の参考書籍

書籍名	刊行年	著者名	発行者
郷土の民話 丹有編	1972	編集: "郷土の民話"丹有地区編集委員会	兵庫県学校厚生会
日本伝説大系 8 北近畿編	1988	編集: 福田晃	みずうみ書房
丹波のむかしばなし 1	1998	編集: 丹波むかしばなし編集委員会	(財)丹波の森協会

歴史・文化の参考書籍

書籍名	刊行年	著者名	発行者
丹波氷上郡誌 下	1927 (1985復刻)	編纂: 丹波史談会	臨川書店(復刻)
日本の伝説 43 兵庫の伝説	1980	宮崎修二郎、足立巻一	角川書店
丹波(篠山市・丹波市)のむかしばなし 6	2006	編集: 「丹波(篠山市・丹波市)のむかしばなし」編集委員会	(財)丹波の森協会
丹波(篠山市・丹波市)のむかしばなし 8	2008	編集: 「丹波(篠山市・丹波市)のむかしばなし」編集委員会	(財)丹波の森協会

所在地リスト



沢田八幡神社	篠山市沢田523
神池寺	丹波市市島町多利2609-1
応地	丹波市山南町応地

ひょうご歴史ステーション「ひょうご伝説紀行」は、兵庫県立歴史博物館により管理・運営しております。サイトで使用するテキスト・画像などのコンテンツ全般の著作権は当館に帰属し、無断での複写・転用・転載などを禁止いたします。

ひょうご伝説紀行 妖怪・自然の世界
<http://www.hyogo-c.ed.jp/~rekihaku-bo/historystation/legend3/>

編集発行 兵庫県立歴史博物館
 〒670-0012 兵庫県姫路市本町6-8 079-288-9011

第1刷 2009年4月1日

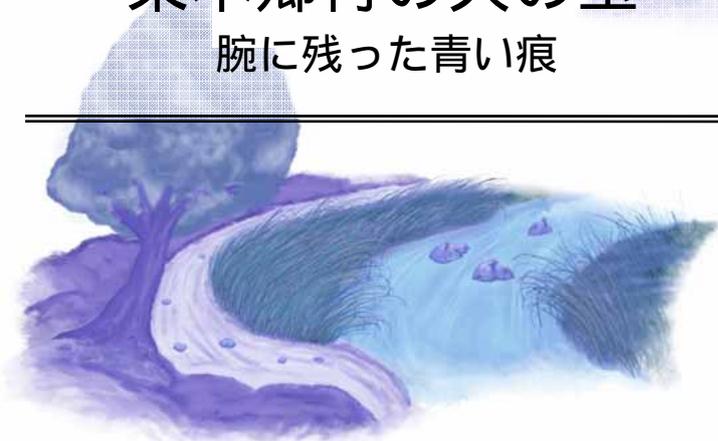
ひょうご伝説紀行
妖怪と自然の世界



佐用安川の猫堂
魚を盗んだ猫のとむらい



東本郷村の火の玉
腕に残った青い痕



伝説

佐用安川の猫堂
魚を盗んだ猫のとむらい
東本郷村の火の玉
腕に残った青い痕

紀行

近世西播磨の怪談
・化け猫
・火の玉
・『西播怪談実記』

関連情報

用語解説
参考書籍
所在地リスト

伝説

佐用安川の猫堂

魚を盗んだ猫のとむらい

江戸時代、元禄（げんろく）年間（1688～1704）のある夏の暑い日のことです。今の佐用町安川（さようちょうやすかわ）に住んでいた佐右衛門（さえもん）さんは、村の前の川でたくさんの魚を捕り、家に帰って竹ぐしにさして魚を焼いていました。

すると飼っていた猫（ねこ）がその魚をくわえて縁の下（えんのした）へ逃げこみ、食べてしまいました。

「こら！ 悪いことをするな！」

佐右衛門さんはしかりつけましたが、猫の方はそれを聞いた様子もなく、そのうちまた魚を持っていこうと手を出しはじめました。

佐右衛門さんはとても腹を立て、そばにおいてあった竹の棒で猫をたたきました。ところが、当たりどころが悪かったのでしょうか、そんなに強くたたいたつもりはなかったのに、猫はぱったりとたおれ、そのまま死んでしまいました。

「こりゃ、かわいそうなことをしてしまった。」

佐右衛門さんはくやみましたが、どうにもなりません。しかたがないので前の川原にうめてあげることにしました。

その翌年のことです、佐右衛門さんの奥さんが子供を産みました。生まれて七日目の晩のこと、赤ん坊を奥の部屋に寝かせて、家族がいろいろばたでそれぞれの仕事をしていると、赤ん坊の「きゃっ。」という声が聞こえました。佐右衛門さんがおどろいて奥の部屋へとんでいくと、一匹のやせた猫が赤ん坊をくわえてつれていこうとしています。

「なんてことをする！」

佐右衛門さんがどなりつけると、猫は赤ん坊をはなしてどこかへ逃げてしまいました。しかし赤ん坊はすでに意識を失っていて、いろいろ手当をしましたが、そのかいなく、とうとう死んでしまいました。佐右衛門さんたちはなげき悲しみ、ねんごろにとむらってあげました。

伝説

佐用安川の猫堂

魚を盗んだ猫のとむらい

それから一年がたち、また子供が生まれました。ところがその赤ん坊も、ある日の夜中に姿が見えなくなり、家族みんなで探したところ、裏の畑で食い殺されていました。世間では、これは猫のしわざだ、佐右衛門さんが殺してしまった猫がうらみを晴らしているのだ、とうわさし合いました。

それからまた一年、男の子が生まれました。今度こそは、と家中で用心して育てていましたが、ある夜、見はりの家族があまりの眠たさについとうとしてしまい、はっと眼をあげると、赤ん坊にかけていた着物がなくなっていました。急いで赤ん坊の様子を確かめると、かわいそうなことにもう息をしていませんでした。

佐右衛門さんはすぐに呼びおこされて話を聞きましたが、今度は驚きませんでした。

「実はいま、夢を見ていた。やせた猫がやってきて、『おれはおまえに殺された猫だ。うらみを晴らすためにおまえの子供を三人殺した。でもまだうらみは晴れない。これからもどんどん殺してやる。』と言っていた。やはり猫のしわざだったのや。」

佐右衛門さんは青ざめた顔でぼそぼそとそう話すと、頭をかかえてうずくまりました。家族たちもとてもこわくなり、こうなっては猫のとむらいをねんごろにしてあげるしかないかと相談し、小さなお堂を建て、お坊さん呼んで精いっぱい猫の供養(くよう)をしてあげました。

それで猫が許してくれたのでしょうか、それからは何事もおこらなくなりました。その後に生まれた佐右衛門さんの子供も、無事に大人になったということです。

(『西播怪談実記』をもとに作成)

伝説

東本郷村の火の玉 腕に残った青い痕

江戸時代の元禄（げんろく）年間（1688～1704）のことです。今の佐用町上本郷、下本郷（さようちょうかみほんごう、しもほんごう）のあたりに、太郎左衛門（たろうざえもん）さんという人が住んでいました。そのころ本郷は、東本郷村（ひがしほんごうむら）と呼ばれていました。

秋口のある日、太郎左衛門さんは、用事があって近くの村へ出かけ、帰りが夜おそくなってしまいました。雨がしとしとと降る暗い夜でしたが、よく通いなれた道なので、傘（かさ）をさしてゆっくりと歩いて帰ってきていました。

するとある藪（やぶ）のかけで、火が燃えているのが見えます。太郎左衛門さんは少しおどろきましたが、むしろ持ち前の負けん気が出てきました。

「これはうわさに聞く火の玉というやつやな。ちょうどいい。今夜ははっきり正体を見届けてやろう。」

太郎左衛門さんはこっそりとその火の玉の方へ近づいていきました。しかし、あともう少し、というところまで来たときに、火の玉はすっと消えてしまいました。また出てくるかとしばらく待ってみましたが、もう何事もおこりませんでした。この辺で燃えていたはず、という場所を探ってもみたのですが、やはり何も見つかりませんでした。

つぎの朝、太郎左衛門さんが顔を洗おうとして手を見ると、両腕（りょううで）のひじから先が真っ青になっていました。

「ははあ、これは火の玉の場所を探したせいやな。」

太郎左衛門さんは、何度も腕を洗いましたが、その色はまるで落ちませんでした。でも、二、三日たつと、次第にうすくなり消えていったということです。

（『西播怪談実記』をもとに作成）

紀行 近世西播磨の怪談

化け猫

猫が化けると恐ろしい。このサイトで紹介した猫の怨霊（おんりょう）は、殺されたうらみを子供殺して晴らす。紀行文「狸と狐」で紹介している狐や狸も人に害を及ぼすが、失敗して返り討ちにあうような間の抜けた話も多いし、場合によっては人間に恩返しをしてくれることもある。猫にもそうした話はあるが、やはり凶暴な話の方が目立つ。

よく知られているのは、吉田兼好（よしだけんこう）の『徒然草（つれづれぐさ）』89段に出てくる「猫また」であろうか。夜更けに家路を急ぐ僧侶の足もとに、何者かがやってきて首もとに飛びついた。僧侶は腰を抜かして道ばたの小川に転がり込み、「助けてくれ。猫まただ、猫まただ。」と叫んだ。近所から松明（たいまつ）を手に人々が駆けつけてみると、実は僧侶が飼っていた犬が主人に飛びついただけだった、という話である。

この話は笑い話になっているが、猫は年をとりすぎると「猫また」になって人を喰う、と考えられていた。「猫また」は尾の先が二股に分かれている、という。



猫
（『北斎漫画』）



猫また
（『怪物画本』、個人蔵）



佐用町安川



安川の薬師堂



たつの市新宮町香山の揖保川

このサイトの伝説の典拠とした、18世紀の怪談集『西播怪談実記（せいばんかいだんじつき）』には、ほかに3つの猫の伝説が載せられている。1つ目は、現在のたつの市新宮町香山（しんぐうちょうこうやま）の伝説である。久太夫（きゅうだゆう）という村人が、飼っている鶏が毎晩夜鳴きをするのでよくないきざしと考え、村の前を流れる揖保川（いぼがわ）に捨てた。するとその鶏が、たまたま香山に商売でやってきて川原で昼寝をしていた塩商人の夢枕に立ち、「どこかへ行ってしまっていた久太夫の飼い猫が戻ってきて、久太夫の命をねらっている。自分はそれに気づいたので毎晩早鳴きをして猫を追い払っているのだ。」と告げた。商人はびっくりして久太夫にこのことを告げ、久太夫は猫を見つけて殺した、とされている。

2つ目の話。現在の姫路市林田町六九谷（むくだに）では、村の庄屋の家に住んでいた尼僧に、長い間飼っていた年寄りの猫が言葉をかけた、という。尼僧は夫と相談して、「この猫はいずれ災厄をもたらすだろうから殺した方がいい。しかし、自分の手で殺すと死後の怨霊が恐ろしい。」と考え、ワナにかけてこの猫を殺したという。



姫路市林田町六九谷



六九谷の因幡街道

3つ目は、たつの市新宮町の城山城跡（きのやまじょうし）の話。龍野（たつの）で仕事をしている大工たちが、休日に近くの城山城跡の見物に出かけた。すると、唐猫谷（からねこだに）というところで岩の上に一匹の大きな猫を目撃した。仲間たちと、「人里離れたところに猫がいるのはおかしい、山猫ではないか」と恐ろしがった。龍野に帰ってから仕事場にしていた寺の住職に話をしたところ、「むかしから猫がいるという話は聞いていた。やはり、猫がいるので唐猫谷と言うのだろうか。」と語ったという。



城山城跡



城山城跡搦手への登山口
(唐猫谷)

この3つの話では、猫は何もしない。しかし、人語を語るという異常なきざしに、人々は敏感に反応している。さらには姿を目撃したりしただけで恐れおののいてもいる。妖怪化した猫は恐ろしいという共通認識があったためである。香山の猫の場合は、鶏が告げただけで、猫自身が異常な行動を見せたわけでもないのに殺されてしまった。少し猫に同情したくなるくらい恐れられている。

火の玉



宗玄火
（『怪物画本』、個人蔵）



姥ヶ火
（『怪物画本』、個人蔵）

火の玉の類をひっくるめて「光りもの」というが、これにはいくつか種類がある。最も有名なのは、靈魂を象徴するヒトダマ（人魂）であろう。そのほかに、狐や狸がおこす狐火、狸火、怪鳥や鬼神などのさまざまな怪物がおこす火や吐く火もある。そして、なんだか正体のわからない火の玉もある。

このサイトで紹介した火の玉も、正体は明示されていない。秋口の雨の降る闇夜、道ばたの藪の中で燃えていた火とされている。これも『西播怪談実記』から採った話である。この書物にはあと6つ火の玉の話がある。



佐用町上本郷、下本郷（江戸時代の東本郷村）



佐用川と佐用の町

紹介した話とよく似ているのが、佐用村（さようむら = 現在の佐用町佐用）の町はずれの藪に出た火の玉の話。ここではよく火の玉が出ると伝えられていて、著者の春名忠成（はるなただなり）が夜更けまで囲碁遊びをしておの帰り道、雨が降っていたのできっと火の玉が出るだろうと藪を見ていると、はたして火の玉が燃え上がりぱっと消えた。翌日その話を若い者にしたところ、また雨の夜に2、3人が見に行き、やはり火の玉を見たという。火の玉は間近で見ると青く、離れて見ると赤く見えた。火焰が出る場所には古い塚があるとされるが確認できていない、という。塚と結びつけられているところからみると、人魂と考えられているようだ。

佐用村の住人の墓所にあった春草庵（しゅんそうあん）という寺院で目撃された火の玉も、場所柄から見て人魂と見てよいだろう。ある夏の夜のこと、この寺の僧侶が窓から外をながめると少し離れたところに火の玉が見え、まっすぐ庵の方へやってくる。僧侶がさわがず経をと念えていると、火は庭先を少しさまよった後に消えた、という。

人魂の話としてはつぎの話もある。梅雨のころで雨が降りそうなどんよりした日暮れ時、蒲田村（かまたむら = 現在の姫路市広畑区蒲田、西蒲田付近）へ友人を訪ねて出かけた人が野道を歩いていると、道の真ん中に2つの火が現れ、よじれたりもつれたりしてからまたぱっと消えた。友人宅に着いてその話をすると、それは「草刈火」と呼ぶ火で、むかし草刈りをしている時に喧嘩した子供たちが鎌で切りあって、2人とも死んでしまったことがあり、その亡霊が今でもその場所で喧嘩を続けているのだ、と教えてくれたという。



蒲田付近の夢前川



龍野城下町の町並み

龍野城下町の商家では、臨終間ぎわの母親を看病していた娘が、とつぜん何かを止める様子で外へ走り出した。と同時に母は死んでしまい、帰ってきた娘はすぐに気絶してしまった。やがて意識を取り戻すと「熱い、熱い。」と言うので、周りのものが様子を見たところ、着物の袖の下に火がついてくすぶっていた。落ち着いてから語った娘の話では「鬼が火の燃えさがる車を引いてきて、母を放り込んで引いていった。母を取り返したい一心で車をつかんで止めようとしたが引き離されてしまった、車はそのまま空へ昇っていき、あとは覚えていない。」ということである。これは死者を運ぶ鬼の火の話である。

このほか、現在の宍粟市山崎町上牧谷、下牧谷（しそうしやまさきちょうかみまきだに、しもまきだに）では狐火（きつねび）が目撃されている。狐が口に三味線（しゃみせん）のばちに似た牛の骨のようなものをくわえていて、それを振ると火がつくというものだ。目撃した村人は、近寄ってきた狐をおどかして狐火を手に入れた。しかしつぎの晩から、夜中に寝間の戸を叩いて「返せ、返せ。」という声が続いたので、やむをえず返したという。

佐用郡山田村（やまだむら = 現在の佐用町山田）では、ある夏の終わりの午後、手まりぐらいの大きさの火がものすごい音をたてて飛び去っていき、その通った筋にあたる木はすべて枝が折れていたという。話の内容から考えると、これは隕石（いんせき）だったと考えてよいだろう。ここには墓場の亡霊と見られる火、死んだ子供の亡霊の火、鬼の車の火、狐火、はては隕石など、さまざまな怪火があげられている。江戸時代の人々は、実にさまざまな火の玉を見ていたようだ。こうした火は、日常生活の中で本当の暗闇を失った現代の私たちに、もはや見ることはできないのだろうか。



挑灯火（『怪物画本』、個人蔵）

『西播怪談実記』

ここで紹介してきた『西播怪談実記』は、佐用郡佐用村に住んでいた春名忠成が執筆し、宝暦4（1754）年に本編4冊が、同11（1761）年に続編にあたる『世説麒麟談（せせつきりんだん）』4冊が刊行された。ここでは両者をあわせて『西播怪談実記』と呼んでいる。

著者春名忠成は、佐用村で商業を営みながら、怪談・奇談集などを著した文化人であった。忠成の本家は佐用郡新宿村（しんじゅくむら＝現在の佐用町末広）の大庄屋で、この一族のものが大坂で吉文字屋（きちもんじや）という書店兼出版社を営んでおり、忠成の著書もこの吉文字屋から出版されていた。

また、佐用には忠成と同時期に岡田光かど（ ）（おかだみつかど）という歌人がおり、忠成も光かどを中心とする文化人サークルの中で活動していた。江戸時代には、江戸や大坂といった大都市だけではなく、各地の地域社会でも多数の文化人たちが活躍していたのである。

（ ）「岡田光かど」は、正しくは、「岡田光圃」と表記しますが、インターネット上では正しく表示されない可能性があるため、ひらがなで表記しています。

『西播怪談実記』は、著者が実際に見聞した話を実話として記録する、という姿勢で執筆された。その文章は大げさにならず淡々と記されている。しかし、その分だけリアリティーがある。

本書には、合計87編の怪談が収められている。話の舞台となった地域は、佐用郡を中心に近隣の赤穂（あこう）、宍粟、揖西（いっさい）、揖東（いっとう）各郡から姫路周辺までに広がっている。内容で分類すると、狐や蛇など動物の怪異が26話、河童や幽霊・大入道（おおにゅうどう）などの物の怪（もののけ）話が25話、神仏の靈験が9話、ここで紹介した怪火、怪風といった自然の怪現象が7話、そのほかの奇談が20話となっている。

忠成が収録した話は、現代に編纂された民話・伝説集には収録されていないものがほとんどである。伝説や昔話は、歴史の中ではつぎつぎと新しい話が生まれ出され続けていたはずだ。これは今日でも「都市伝説」などを考えれば同じことが言えるだろう。しかし、今日われわれが知りうるものは、そのごく一部分に過ぎない。今日ですでに伝承としては残されていない伝説を数多く知ることができるという点でも、本書は貴重な文献となっている。



佐用の町並み



忠成の本家 旧佐用郡新宿村
春名家（佐用町末広）

用語解説

【城山城跡】きのやまじょうし

播磨守護赤松氏の拠点城郭の跡。たつの市新宮町にある。赤松則祐（あかまつそくゆう）が、文和元（1352）年ごろから築城を初めたが、その後も長期間にわたって工事が進められていたことがわかっている。赤松氏の本拠地であった赤穂郡（あこうぐん）、佐用郡（さようぐん）は、播磨の西部に偏っていたため、より播磨の中心に近い位置に拠点を構える必要があったことと、このころ美作方面で山名氏と対峙していたため、美作への交通路上に拠点が必要であったことの二つが、城山に拠点が置かれた理由と考えられている。

参考書籍

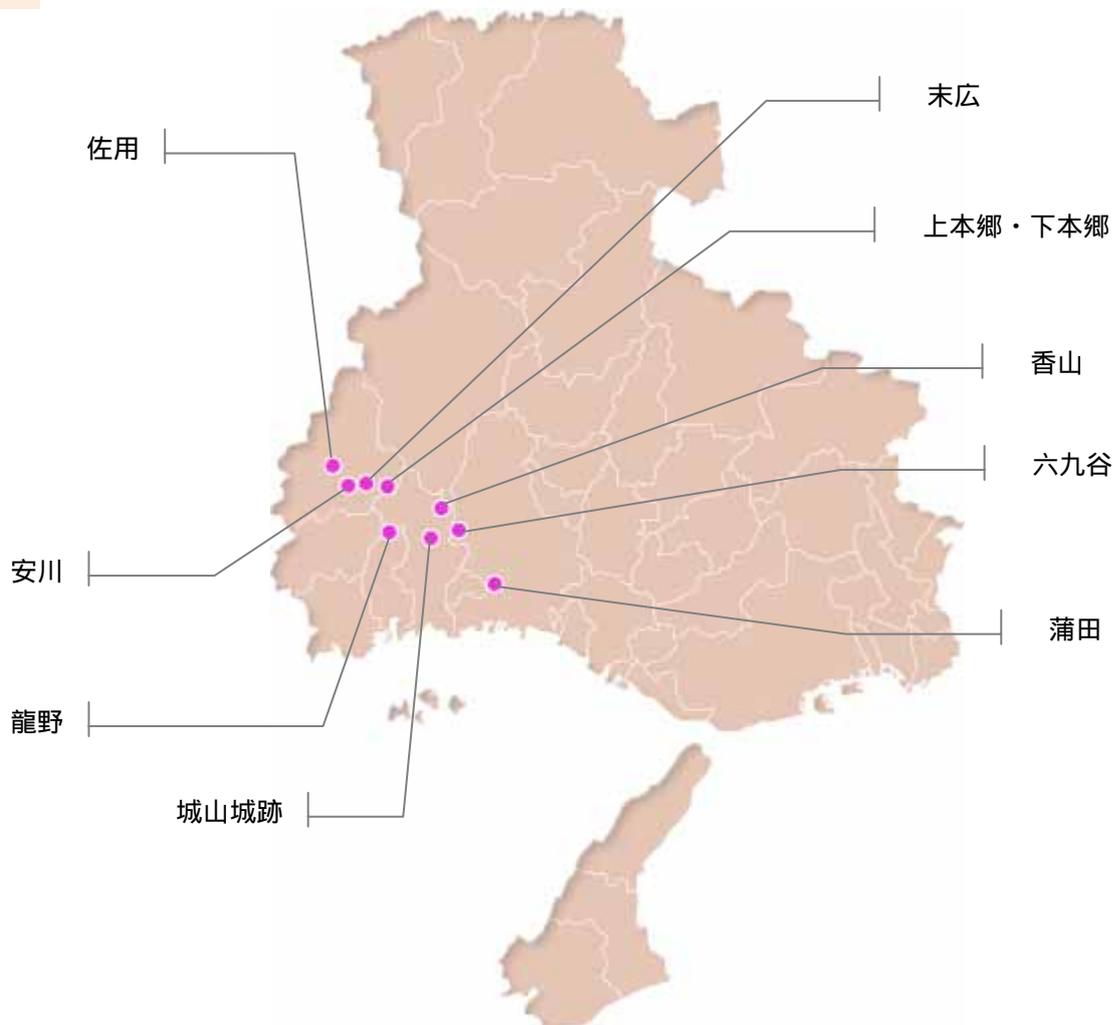
伝説の参考書籍

書籍名	刊行年	著者名	発行者
播磨の妖怪たち 「西播怪談実記」の世界	2001	編著：小栗栖健治・埴岡真弓	神戸新聞総合出版センター

歴史・文化の参考書籍

書籍名	刊行年	著者名	発行者
徒然草 (収録：新日本古典文学大系39『方丈記 徒然草』)	1989	著者：吉田兼好、校注：久保田淳	岩波書店
播磨の妖怪たち 怪猫譚を中心に (収録：播磨学研究所編『播磨の民俗探訪』)	2005	埴岡真弓	神戸新聞総合出版センター

所在地リスト



香山	たつの市新宮町香山
上本郷・下本郷	佐用町上本郷、下本郷
未広	佐用町未広
佐用	佐用町佐用
安川	佐用町安川
龍野	たつの市龍野町龍野
城山城跡	たつの市新宮町馬立、市野保、ほか
六九谷	姫路市林田町六九谷
蒲田	姫路市広畑区西蒲田、ほか

ひょうご歴史ステーション「ひょうご伝説紀行」は、兵庫県立歴史博物館により管理・運営しております。サイトで使用するテキスト・画像などのコンテンツ全般の著作権は当館に帰属し、無断での複写・転用・転載などを禁止いたします。

ひょうご伝説紀行 妖怪・自然の世界
<http://www.hyogo-c.ed.jp/~rekihaku-bo/historystation/legend3/>

編集発行 兵庫県立歴史博物館
〒670-0012 兵庫県姫路市本町6-8 079-288-9011

第1刷 2009年4月1日

ひょうご伝説紀行
妖怪と自然の世界

芝右衛門狸

洲本にひびく腹つづみ

およし狐

狩人と暮らしたお相手は

伝説

芝右衛門狸

洲本にひびく腹つづみ

およし狐

狩人と暮らしたお相手は

紀行

狸と狐

- ・洲本八狸
- ・狐に化かされる
- ・県域の狐話

関連情報

用語解説

参考書籍

所在地リスト

伝説

芝右衛門狸 洲本にひびく腹つづみ

淡路島（あわじしま）の洲本（すもと）の町の南に、三熊山（みくまやま）という山があります。この山には芝右衛門（しばえもん）と呼ばれる狸（たぬき）が住んでいました。よく晴れた月の夜などには、「ぼんぼこぼん。」と陽気な腹つづみの音がひびき渡り、洲本の人たちにも親しまれていました。

芝右衛門狸には、親友の狸がいました。名を阿波の禿げ狸（あわのはげだぬき）といい、よく芝右衛門狸と化けくらべをして遊んでいました。ある日、いつものように化けくらべをすることになり、芝右衛門狸が、街道を行く大名行列（だいみょうぎょうれつ）に化けることにしました。

「下あーにいー。下あーに。」

阿波の禿げ狸が木の上で見物していると、たくさんのお供衆を連れた立派な行列がやってきました。阿波の禿げ狸は感心して、木の上から、「いやー、立派なもんやなあ。本物そっくりや。」と手をたたいて大声でほめてあげました。

しかし、そのとき。

「無礼者！」

と、行列の先頭の侍（さむらい）が刀を抜き、阿波の禿げ狸を木からひきずりおろし、一刀のもとに切りすててしまいました。阿波の禿げ狸が見たのは本物の大名行列だったのです。芝右衛門狸は、自分が変なものに化けると言ったせいで親友を失ってしまったと、深く悲しみました。

それからしばらくして、芝右衛門狸はふと思いたって、大坂（おおさか）の芝居（しばい）を見に行くことにしました。芝右衛門狸は芝居見物が大好きでした。

「やっぱり芝居は大坂が本場や。一度じっくりと本場の芝居を楽しんでみたいな。」

芝右衛門狸はお侍の姿に化けると、船に乗って一路大坂へと向かいました。大坂の芝居小屋はさすがにぎやか、役者の芝居もすばらしいものでした。すっかりとりこになってしまった芝右衛門狸は、洲本へ帰ることも忘れて、毎日毎日、芝居小屋に通いました。

でも、窓口ではらう銭は、木の葉を化かしたものです。芝居小屋の人たちは、このところ毎日銭の中に木の葉がまざっているので、「これは狐（きつね）か狸のしわざに違いない。」と腹を立て、銭を受け取る窓口の下に犬をひそませることにしました。

伝説

芝右衛門狸 洲本にひびく腹つづみ

次の日、芝右衛門狸はいつものように心を浮き立たせながら小屋にやってきました。ところが、窓口で銭を払おうとしたとき、下から犬がものすごい勢いでほえかかってきたのです。化け上手の芝右衛門狸でしたが、こうだしぬけに苦手の犬にほえられてはたまりません。ぽろり、とふさふさしたまん丸いしっぽが出てしまいました。

「おのれ、おまえが悪狸やな。」

小屋の人たちは芝右衛門狸をさんざんに棒でたたきのめしました。いつもかわいがってくれている洲本の人たちならば、笑って許してくれたのですが、ここは遠くはなれた大坂。そういうわけにはいきませんでした。芝右衛門狸の意識は、だんだん遠くなっていきました。

それからしばらくして、洲本の町にも、「大坂で芝居見物に来ていた狸が殺されたらしい。」とうわさが流れてきました。「このところ三熊山から腹つづみが聞こえてこないな」、と思っていた人たちは、このうわさですべてをさとりました。洲本の人々は心から悲しんで、三熊山に祠（ほこら）を建て、ねんごろにとむらってあげたということです。

(『郷土の民話』淡路編、『兵庫の伝説』第一集をもとに作成)

伝説

およし狐 狩人と暮らしたお相手は

むかしむかし、姫路（ひめじ）の近くに住んでいた狩人（かりゅうど）が山へ出かけると、一匹の狐（きつね）が大蛇（だいじゃ）にしめ殺されそうになっているところに出くわしました。かわいそうに思った狩人は、鉄砲（てっぽう）で大蛇を追いはらい、狐を助けてあげました。

その帰り道、林の中を歩いていると、突然目の前の木から女の人が落ちてきました。見上げると枝に縄（なわ）がかけられていて、どうやら首をつろうとして失敗したようです。

「ばかなことをするな。どうしてこんなことをするのや。」

女の人を助けおこしながら狩人は聞きました。

「どうか見逃してください。私、どうしても死ななくてはならないのです。」

「どうしてや。わけを話してはくれないか。」

「私は、父が亡くなり、継母（ままは）や義理の妹と暮らしているのですが、どうしても死ななくてはならないわけがあるのです。どうか死なせてください。」

「うーん。それはきっとよくよくのわけがあるのやな。でも、死ぬなんてつまらないことを考えるものやない。どうや、今すぐ家に帰れないのなら、しばらくわしの家において、そのうち様子がよくなったら帰っては。」

やさしい狩人の言葉を聞いて、女の人もおあとをついて行くことにしました。

狩人の家へ来た女の方は、よく働きました。狩人もいろいろと助かるので、つつい帰すことを忘れて、しばらく一緒に暮らしていました。

しかも、女の方が来てからというもの、狩人が山へ行こうとすると、女の方が、「今日は西の山がいいですよ。東は獲物（えもの）がありません。」などと教えてくれます。狩人がそのとおりにすると、いつもたくさんの獲物がとれました。

暮らし向きも豊かになってきた狩人は大喜びで、だんだんその女の人を妻にむかえたいと思うようになりました。でも、直接言い出す勇気がないので、友達に頼んで女の方の気持ちを聞いてもらうことにしました。

ところが、気持ちを聞かれた女の方は、悲しそうな顔をして、「あの人のためにならないから、あきらめてほしい。」と言います。でも、狩人はあきらめることなどできないので、勇気を出して直接熱心に頼みました。すると女の方も、しぶしぶ承知しました。

伝説

およし狐 狩人と暮らしたお相手は

いよいよ結婚式をあげる段取りをすることになりました。暮らしも豊かになっていたので、できるだけ盛大にしたいと狩人がはりきっていると、女の人が、「お金は私の方で全部持ちますから。」と言います。狩人は、「おかしなことを。」と思いましたが、とりあえず言うとおりにまかせてみました。すると、どこからともなく大勢の人々がやってきて、たくさんの嫁入り道具から、山のような料理まですべてそろえて運びこんできました。

とうとう婚礼の日になりました。花嫁は、綿帽子（わたぼうし）を深くかぶって席に座り、結婚式が行われました。ところが翌朝、花嫁の顔を見た狩人はおどろきました。花嫁は別人なのです。

「あなた、どうしてここにいるのですか。」

「わたしも、……、よくわからないのです……。」

「あなたはどこのどなたです。」

「私は、となり村の庄屋（しょうや）の娘です。」

「ええっ！ あの大きなお宅のおじょうさんですか。」

狩人はわけがわかりません。でも気をとりなおして、

「どういうわけなのやろう。あなたの知っていることを教えてください。」

「はい。実は、私は親が決めた人のところへおよめに行くことになっていたのですが、どうしてもいやだったのです。それで毎日泣き暮らしていたのですが、昨日の朝、どこからか女の方がやってきて、『私の言うとおりにしなさい。そうすればあなたは幸せになれるですよ。』と言われます。知らない人だったのですけれど、私はわらにもすがるような気持ちでしたし、それにとてもよさそうな方だったので、私、言われるとおりにしようって決めたのです。そしたら、それから気分が何だかぼんやりしてきて、ふと気がついたらこちらの婚礼の席に座っていたのです。」

狩人はますますわからなくなって、ぼかんと口を開けて座りこんでしまいました。すると、縁側の障子（しょうじ）に一匹の狐の影が大きく映りました。狩人が驚いて目を見開くと、その狐の影がぴょこん、とおじぎをしました。

「あ！ これでわかった。」

狩人がさけぶと同時に、すーっと障子が開いて、昨日までいた女の人が姿を見せました。

「あ、私がお会いしたのもこの方です！」

花嫁もさげびました。

二人の声を聞いた女の方は、にっこりとほほえんで、またもとの狐の姿に戻りました。そして、そのままどこへともなく姿を消してしまいました。

その後狩人夫婦は、花嫁の両親の許しもえて、幸せに暮らしたということです。二人を結んだ狐の名は、「およし狐」と伝えられています。

（『郷土の民話』中播編をもとに作成）

紀行 狸と狐

洲本八狸

淡路島（あわじしま）の洲本（すもと）の町を見守るように、背後にそびえる三熊山（みくまやま）。この山に住むという狸が芝右衛門狸（しばえもんだぬき）である。芝右衛門狸は、佐渡島（さどがしま = 現在の新潟県佐渡市）の団三郎狸（だんざぶろうだぬき）、讃岐国屋島（さぬきのくにやしま = 現在の香川県高松市）の禿狸（はげだぬき）とならんで、日本三名狸にあげられる有名な狸だ。なお、「芝右衛門狸」は「柴右衛門狸」とも表記されるが、ここでは古い文献の表記を尊重して、「芝右衛門狸」で統一したい。



三熊山から見た洲本市街



洲本市街から見た三熊山

三熊山の山頂部には、中世の安宅（あたぎ、「あたか」とも言う）氏の城に由来するとされる洲本城がある。現在は、江戸時代はじめに脇坂安治（わきざかやすはる）が築いた石垣が残る。大坂夏の陣以降、淡路国は蜂須賀（はちすか）氏の阿波国（あわのくに = 現在の徳島県）徳島藩領となり、寛永12（1635）年から重臣の稲田（いなだ）氏が城代として洲本に入る。しかし、稲田氏時代の洲本城は山麓部に築かれたもので、三熊山の山頂部は使われていなかった。現在は、1928（昭和3）年に昭和天皇即位式に合わせて建設された模擬天守閣が、町を見下ろしている。



洲本城



三熊山の芝右衛門狸の祠



道頓堀角芝居（『浪華の賑い』）

主郭跡の片隅には、芝右衛門狸をまつる祠（ほこら）があり、中には狸像がまつられている。これは1962（昭和37）年に片岡仁左衛門（かたおかにながえもん）、藤山寛美（ふじやまかんび）といった、大阪の芸能人たちが寄進したものである。今は解体された道頓堀中座（どうとんぼりなかざ）にも、「おたぬきさん」と呼ばれる芝右衛門狸をまつる祠があった。大阪の芸能人たちにも、芝右衛門狸の話は親しまれていたのである。

近年、洲本ではこの狸伝説を生かした町おこしに取り組んでいる。きっかけは1999（平成11）年の大阪中座の閉館で、そこにまつられていた芝右衛門狸が洲本に帰ってくる話もちあがったことにあった。今では芝右衛門狸をはじめとする8つの狸の石像が街の各所に建てられ、八狸（やだぬき）マップも作られて、狸を訪ねながら街を散策できる。8つの狸の話は、『洲本八だぬきものがたり』（2002年、アリス館）として刊行されているので、これにもとづいてそれぞれ紹介していこう。



芝右衛門(柴右衛門)狸



芝右衛門狸の社



洲本八幡神社

まず、芝右衛門狸は、洲本八幡神社の境内にいる。石像の背後には、大阪中座から洲本に帰ってきた芝右衛門狸をまつる社殿もある。社殿の前にある舞台には、「大阪中座 お狸さん」という額がかけられている。神社のお話では、大阪中座から芝右衛門狸が帰ってきたときに、もともとあった舞台の後ろに、新しく社殿を建設したものだという。



柴助狸

芝右衛門狸の息子が「いたずらだぬきの柴助（しばすけ）」で、洲本八幡神社の門前の足湯の脇にある池の中に立っている。子供のころは芝右衛門に教えてもらった化ける術で街の人にいたずらばかりしていたが、あるとき思い立って北前船（きたまえぶね）に乗り込んで蝦夷地（えぞち = 現在の北海道）まで大冒険に行ってきたのはしっかりしてきたようだ。途中の越後国柏崎（えちごのくにかしわざき = 現在の新潟県柏崎市）の港で見た花火大会が忘れられず、洲本へ帰ってからは仲間を集めて花火に化けては町の人を楽しませたという。



武左衛門狸

八幡神社から西へ、巖島神社の境内にいるのが「夜まわりだぬきの武左衛門（ぶざえもん）」である。町の武家屋敷の人たちが戸締まり、火の用心をしないことを見かねて、毎晩役人に化けて見回りをしていたという。



お増狸

さらに商店街のアーケードの中には「買いものだぬきのお増（おます）」がいる。お増狸は芝右衛門狸の妻で、芝居見物にうつつをぬかす芝右衛門狸の留守をまもって子育てをした、しっかりものの狸だ。お増狸は街に出て買い物をするのを楽しみにしていたが、払うお金はやはり晩になると木の葉になってしまうものだった。でも、なぜかお増狸が来た店はそのあと商売繁盛するようになるので、街の人たちにはとても人気があったという。



川太郎狸

アーケードの西の端、千草川（ちくさがわ）の橋のたもと近くには「河守りたぬきの川太郎（がたろう）」がいる。一家みんなが川太郎という名前で、人間の姿に化けては川の掃除をしたり土手を直したり、あるいは川で仕事をする街の人たちを助けたりする狸とされている。



宅左衛門狸

川太郎狸がいるところから、寺町筋（てらまちすじ）を北へ行き、城下町の西北の出口にあたる洲本川沿いにたたずむのが「頼母子講（たのもしこう）だぬきの宅左衛門（たくざえもん）」である。洲本狸の長老で、たくさんの蓄えを持っていて、困った狸があると分け与えて助けてあげたという。また、みんなで少しずつ蓄えを出し合って、くじで当たった人に順番に融通しあう頼母子講というしくみをはじめた狸ともされている。



お松狸

洲本川沿いには、紡績工場（ぼうせきこうじょう）の煉瓦建築（れんがけんちく）を活用した、商業施設や市立図書館がある。ここに、「美人だぬきのお松」がいる。芝右衛門狸の娘で、洲本で評判の器量よし、結婚を申し込む狸はたくさんいた。いったん阿那賀（あなが）の与茂太夫狸（よもだゆうだぬき）の熱心な求婚にほだされて嫁入りしたが、遊び人の与茂太夫狸はすぐに家をあけてしまうようになったので別れ、最後は台場の伊助狸（いすけだぬき）と結ばれて幸せに暮らした、という。



榎右衛門狸

最後に、市役所近くの堀端筋（ほりばたすじ）の交差点の隅に「大入道（おおにゆうどう）だぬきの榎右衛門（ますえもん）」がいる。この像、何をかたどっているのか、一目ではよくわからない。なまけものの狸で、いつも昼間からお酒を飲んで寝てばかりいたという。この像は、どうやら丸いおなかの上にお酒を飲むおちょこを乗せて寝転がっているところのようだ。ただし、榎右衛門狸はいつもごろごろしてばかりいたわけではない。小僧さんに化けて、夜になって帰り道に困っている老人の道案内をしたり、悪い男にいやがらせを受けている娘さんを大入道に化けて助けてあげたりした、という。

この芝右衛門狸の話、最近洲本の人々によってリライトされた絵本（『しばえもん』、2000年、淡國書房）もある。この絵本では、中座で芝右衛門狸が犬に殺されるという筋は避けられ、また洲本に戻って穏やかに暮らすように改変されている。洲本を訪れた日、編集にたずさわった書店主のお話をうかがうことができたが、執筆者の間で、子供向けの話なのにかわいそうすぎる、ということで、あえて平成の芝右衛門狸を書こうということで改変したのだそうだ。

伝説は時代によって少しずつ変わっていくが、このエピソードは今まさに変わろうとしている姿を示しているのだろう。ほかの伝説にもみられるように、昔話や伝説には、人が死んだり不幸になったりという悲しい話がよく出てくる。かつてはそのことに意味が見出されていたはずなのだが、今日目から見ると、もっと楽しく幸せな話の方が受け入れやすいのだろう。

実際、芝右衛門狸の話は歴史の中で大きく変容してきたようだ。古くは、天保12(1841)年の『絵本百物語(えほんひゃくものがたり)』にすでに見える。ただし、そこでは洲本で芝居を見に行き犬に殺されたという話で、大坂まで出ていく話にはなっていない。中座の話は、大坂で独自に発展したものが、明治以降に洲本に持ち込まれたとも考えられている。

また、1922(大正11)年に公表された論文では、このサイトで紹介している芝右衛門狸と阿波の禿狸の化けくらべの話は、京都伏見で土地の狐と化けくらべをして、芝右衛門狸が大名行列を勘違いして殺された、という話で載せられている。

狐と狸の化けくらべの話は佐渡の団三郎狸にも見られ、こちらの方が古い形と見てよい。なお、阿波の禿狸とは、日本三名狸にあげられている、隣の讃岐国屋島の禿狸のことと考えられる。どこかで両者が結び付けられるようになったのであろう。

さらに、柴助狸やお増狸など、芝右衛門狸以外の狸についても、幕末以降に語られはじめたと見られている。たしかに、紹介した8つの狸のキャラクターはいずれも親しみやすく、とても新しい印象を受ける。

いずれにせよ、洲本には狸にまつわる話が数多く伝えられてきた。これは四国の特徴と重なるもので、四国にも多くの狸伝説が残されている。淡路島は、現在は兵庫県に含まれているが、古代では四国や紀伊国(きいのくに=現在の和歌山県)と同じ南海道(なんかいどう)の一つとされたように、歴史的には四国や紀伊とのつながりが深かったのである。俗に「四国に狐なし」と言われ、四国では狐伝説はほとんどなく、その位置を狸の伝説が占めている。洲本の狸話には、こうした地域性がよく表れている。



狸(『怪物画本』、個人蔵)

狐に化かされる

姫路に伝わる「およし狐」伝説。この話は人に助けられた狐が恩返しとして人の妻となる「狐女房」型の話と言えるが、一般的な狐女房の話は、狐が人の妻となるものの正体を見破られて去っていく、という話が多い。この伝説の「およし狐」は嫁入りを避けて、人間に幸せな結末をもたらしている。こうした筋立ては、一般的な狐女房話よりは新しい時期のものと考えてよいだろう。

ただし、「およし狐」の名前自体は中世末期の文献までさかのぼることができる。天正4(1576)年の奥書がある『播磨府中めぐり』で「椰寺(なぎでら)の小よし狐」と記されていて、少なくともこのころから、姫路で語られ続けてきたことがうかがえる。

寛延3(1750)年の『播州府中めぐり拾遺(しゅうい)』では、椰寺の柱が動くことがあり、これをおよし狐の仕業と伝えている。椰寺は、姫路城下町建設以前には姫山近くの椰本(なぎもと)というところにあった寺で、現在は市内の坂田町(さかたまち)にある善導寺(ぜんどうじ)の前身とされている。



狐(『北斎漫画』)

天正4(1576)年の奥書がある『播州故事考(ばんしゅうこじこう)』では、永正10(1513)年のこととして、柳寺にまったく同じ服装をした二人の女性が参詣し、寺僧が不思議と見て見ていると、近くの泉のあたりで一人は消えてしまい、「柳寺の狐」の仕業とされたという。

柱を動かしたり、参詣の女性に化けたり、ここに見える「およし狐」は、一般的な狐の怪異話になっている。おそらくこのほかに、さまざまな怪異がおよし狐の仕業とされていたのだろう。

また江戸時代以来、およし狐は、紀行文「姫山の地主神」で紹介した姫路城天守閣のおさかべ姫と結びつけられることもあった。寛延3(1750)年の『播州雄徳山八幡宮縁起(ばんしゅうゆうとくさんはちまんぐうえんぎ)』では、「柳寺のおよし狐は女に化けて活動したことが諸書に見える」とし、「ここからおさかべ姫と混同されるようになったのであろう」と述べている。江戸時代の知識人の間でも、両者は本来別物で、後から結びついたものと見られていた。



久長門跡



久長門北側の中堀

およし狐がいた柳本には、中世までは柳寺とともに播磨総社(はりまそうしゃ)もあった。柳本の場所は、近世の諸書では一致して、城下町の久長門(きゅうちょうもん)の内側にある岐阜町(ぎふまち)あたりとされている。現在の場所にあてはめると、国立病院機構姫路医療センターや県立姫路東高校の付近になる。当館のすぐ東側である。



かつての柳本付近
(県立姫路東高校と国立病院
機構姫路医療センターの間)



国立病院機構姫路医療センター



総社

さて、およし狐のほかにも、姫路周辺には狐話が多数あった。『播磨府中めぐり』では、「宿村の小六」の話があり、天正3(1575)年の『近村めぐり一歩記』では蒲田(かまた)の「井内源二郎」、才(さい)の「竹次郎」のほか、「福吉狐」、「山本村の鼠狐」、「朝日山大法主の狐」、「又鶴の半まだら狐」、「利生のおしも狐」、「神村の太郎太夫狐」、「管長狐」、「黒岡山のはら斑狐」など多数の狐の名前があげられている。また、天正元(1573)年の成立と伝える『播陽うつつ物語』では、名古屋(なごやま)の「万太郎狐」、「黒天狗」、「翠髪」、「釣狐」に化かされた話がある。

こうした狐話の多さは、姫路に限ったことではない。中世末期から江戸時代にかけて、狐の話は全国各地で数多く語られるようになっていた。量的に見れば、狐は江戸時代の妖怪の主要級である。

県域の狐話

そのほかの県域でも、狐話は無数と言ってよいほどあるので、いくつか紹介しておこう。但馬の養父市（やぶし）、旧山陰道（きゅうさんいんどう）が通る八木川（やぎがわ）のほとりに、八木と三宅（みやけ）という地区がある。両地区の境には、かつて「琴引きの松右衛門（まつえもん）」や「みみんどうの小女郎（こじょうろ）」という狐が出るという話があった。

あるとき、日暮れ時に八鹿から帰ろうとこのあたりを通りかかった別のおじいさんが化かされ、いつまでたっても八木と和土（わつち、三宅の少し西側）の間を行ったり来たりさせられ、気がついたら夜が明けていたという話がある。また、あるときは畑仕事をしているうちに日が暮れてしまっただけで帰ろうとしたおじいさんが、村中の家に火がついているまぼろしを見たともいう。



しん板ばかされ尽
(個人蔵)



泉 八幡神社



八木川
(八木と三宅の境界付近)



琴引峠



泉の集落

つぎに丹波篠山（たんばささやま）の狐話。篠山市泉（いずみ）の八幡神社には、明治の神仏分離まで竜泉寺（りゅうせんじ）という寺院もあった。この裏山には、尾の先が白い狐が住んでいたというが、とくに悪いこともしないので村では折にふれてお供えなどをしておまつりしていた。

あるとき、この竜泉寺が火事で焼けてしまい、再建をどうしようかと村の人々は悩んでいた。ちょうどそのとき、少し離れた小枕村（こまくらむら）ではお寺を建て替え、古い材木の置き場に困っていた。そこへ泉村の人が訪ねてきて、代銀を払って後日引き取りにくると約束して帰った。ところが、一ヶ月経っても誰も引き取りにこないで、小枕村から泉村に催促に行くと、誰も心当たりがない話だった。しかし、代銀は払ってあるので泉村総出で引き取りにいき、無事竜泉寺の再建ができた。村では裏山に住む狐の恩返しだろうと語り伝えてきたという。



古坂峠

この話はいい話だが、やはり人を化かす話も伝わっている。篠山盆地の南、後川（しつかわ）という谷を經由して摂津国能勢郡（せつつのくにのせぐん = 現在の大阪府能勢町）へ抜ける道に、古坂峠（ふるさかとうげ）がある。あるとき後川の人が篠山の祭りからの帰り道、おみやげのご馳走を二人で担いで家路を急いでいると、一方の男の妻が向こうからやってきて、代わりにご馳走を持ってあげようと言う。これはあやしいと思った男は持っていた小刀で女の胸を刺して追い払った。家に帰ってみると果たして妻は無事だったが、ちょうど夫に胸を刺された夢を見て目が覚めたところだったと話した。夜が明けて峠の現場へ行ってみると、大きな狐が胸を刺されて死んでいた、という話である。

ここまでで紹介した話は、現代の民話集に載せられている話で、人を化かすが命まではとらないものが多い。しかし、江戸時代の書物に出てくる狐にはもっと恐ろしいものがある。紀行文「近世西播磨の怪談」でも紹介している『西播怪談実記（せいばんかいだんじつき）』に見える、宍粟郡山崎（しそぐんやまさき = 現在の宍粟市山崎町）の話を紹介しておこう。

山崎の市街地から見て揖保川（いぼがわ）の対岸、出石（いだいし）というところには、江戸時代、周辺の幕府直轄領を治める山方役所（やまがたやくしょ）があった。出石の川原は、瀬戸内海へと通じる揖保川水運の起点ともなっていた。

正徳年間（1711～16）のこと、出石の米蔵で狐が子を生んだが、近くの子供が一匹取りあげて遊んでいるうちに死んでしまった。4、5日後、その子供と母親が出かけて帰ってこないのを捜索すると、子供は揖保川に沈んでいて、母親は少し離れた比地村（ひじむら）の七里が岡で、葛に巻きつかれ、大きな松の枝につるされて死んでいた。



山崎出石 幕領山方役所跡



揖保川の出石川原

話を聞いた山方役所の責任者は怒り、領内の狐狩りを命じた。その夜、役所の蔵奉行は、庭にやってきた2匹の狐に、「おまえたちはどこかへ立ち去るように」と諭したので、狐は1匹も捕らえられなかったという。

この話では、子供のかたきを討つために、実際に人の命を奪ったことになっている。どの伝説でも似た傾向があるが、狐も江戸時代の話では、人間にとって恐ろしい存在として描かれる場合が多い。

用語解説

【佐渡島の団三郎狸】さどがしまのだんざぶろうだぬき

佐渡島の狸の大将とされる。夜道を歩く人を壁を作り出しておどかさず、屋敷で化かす、木の葉を化かした銭で買い物をする、などの話が伝わっている。また、芝右衛門狸とよく似た狐との化けくらべ話もある。加賀国で狐と化けくらべをすることになり、団三郎が大名行列に、狐が奥女中に化けて殿様に声をかける、とのことになった。やがて大名行列がやってくると、狐は女中となって殿様の籠に声をかけようとしたが、実は本物の大名行列で狐は斬られそうになり、あわてて逃げていった、という。

なお、佐渡では狸を貉（むじな）と呼ぶので、団三郎貉と呼ぶのが一般的である。

【讃岐屋島の禿狸】さぬきやしまのはげだぬき

香川県高松市屋島にある屋島寺の守護神で、四国の狸の総大将とされる。源平の屋島合戦での様子を幻術で再現するなどしたという。後に獵師に撃たれて死んでしまうが、その霊が阿波に移り住んだともされている。

【安宅氏】あたぎし（あたかし）

紀伊国安宅荘（きののくにあたぎのしょう = 現在の和歌山県白浜町）を本貫地とする武士。南北朝時代から水軍としての活躍が知られ、やがて淡路にも勢力を広げた。由良城（ゆらじょう）や洲本城を拠点としたとされ、戦国時代には三好（みよし）氏に従うようになった。

【脇坂安治】わきざかやすはる

1554 - 1626。近江国脇坂（おうみのくにわきざか = 現在の滋賀県湖北町）出身の武士。羽柴秀吉（はしばひでよし）に仕え、天正11（1583）年の賤ヶ岳の合戦（しずがたけのかっせん）で活躍、賤ヶ岳の七本槍（しちほんやり）の一人に数えられる。天正13（1585）年淡路洲本3万石の領主となる。慶長5（1600）年の関ヶ原の合戦では、はじめ西軍に属したが、小早川秀秋らとともに東軍に寝返った。慶長14（1609）年伊予国大洲（いよのくにおおず = 現在の愛媛県大洲市）5万3千石余に転封。寛永3（1626）年京都で没。子孫は後に播磨龍野（たつの = 現在のたつの市）藩主となる。

【蜂須賀氏】はちすかし

尾張国蜂須賀（おわりのくにはちすか = 現在の愛知県美和町）から出た領主。織田信長、豊臣秀吉に仕え、天正13（1585）年に阿波国（あわのくに = 現在の徳島県）一国を与えられる。ついで大坂の陣（1615年）の後、淡路一国を加増され、25万石余となる。その後代々徳島藩主として幕末に至る。

【『絵本百物語』】えほんひゃくものがたり

天保12（1841）年刊。別名『桃山人夜話（とうさんじんやわ）』。文章は桃園三千磨が執筆、画は竹原春泉（たけはらしゅんせん）が描き、45種の妖怪話を多色刷りの絵とともに紹介している。

用語解説

【『播磨府中めぐり』】はりまふちゅうめぐり

『播陽万宝智恵袋（ばんようばんぼうちえぶくろ）』巻18収録。芦屋道海（あしやどうかい）著。末尾に天正4（1576）年4月7日とあり、このころの成立と見られる。播磨府中（姫路）周辺の城跡、社寺、名所などを詳細に記し、池田輝政（いけだてるまさ）による現姫路城築城以前の姫路を知るうえで重要な史料である。ただし、後世の補筆も多く見られる。著者の芦屋道海は、英賀（あが＝現在の姫路市飾磨区英賀宮町付近）の住人で、平安時代の陰陽師芦屋道満の子孫を称したという。『播陽万宝智恵袋』には、この他に、『近村めぐり一歩記』、『播州巡行（考）聞書』も道海の著書として収録されている。また、『播磨鑑（はりまかがみ）』にも道海の和歌が見える。

【『播州府中めぐり拾遺』】ばんしゅうふちゅうめぐりしゅうい

『播陽万宝智恵袋（ばんようばんぼうちえぶくろ）』巻18収録。寛延3（1750）年、三木通識著。同書に収められた芦屋道海（あしやどうかい）著『播磨府中めぐり』の注釈書としての性格を持ち、姫路周辺の寺社、古跡などについての考証を加えた書物。三木通識は18世紀前半から中ごろにかけて活動した姫路の文人。幼少より学を好み、多くの著作を残した。『播陽万宝智恵袋』にも、通識の著作は17点収められている。

【『播州故事考』】ばんしゅうこじこう

『播陽万宝智恵袋（ばんようばんぼうちえぶくろ）』巻14収録。天正4（1576）年赤松寿斎（あかまつじゅさい）の著。播磨の寺社やさまざまな故事を記したもの。著者の赤松寿斎については詳しいことはわからないが、『播陽万宝智恵袋』巻44の『播州諸家注進』も、寿斎の著と記されている。

【『播州雄徳山八幡宮縁起』】ばんしゅうゆうとくさんはちまんぐうえんぎ

『播陽万宝智恵袋（ばんようばんぼうちえぶくろ）』巻17収録。寛延3（1750）年三木通識著。現姫路市山野井町（ひめじしやまのいちょう）にある男山（おとこやま）とその周辺にある寺社の、由来、変遷、伝説などを記したものの。著者の三木通識については、本用語解説の『播州府中めぐり拾遺（ばんしゅうふちゅうめぐりしゅうい）』項目を参照されたい。

【『近村めぐり一歩記』】きんそんめぐりいっぼき

『播陽万宝智恵袋（ばんようばんぼうちえぶくろ）』巻18収録。芦屋道海（あしやどうかい）著。本文中に、天正3（1575）年3月7日に著者が居住していた英賀（あが＝現在の姫路市飾磨区英賀宮町付近）のあたりを一巡して書いたもので、同4年3月30日にもう一度歩いて補訂した、とされている。英賀を中心に、西は姫路市網干区和久（ひめじしあばしくわく）付近、北は太子町の鶯（いかるが）あたり、東は現在の姫路駅付近から飾磨港（しままこう）あたりまでが記録され、社寺、名所、伝説などが記されている。中世最末期の姫路周辺を示す、数少ない史料の一つである。著者の芦屋道海については、本用語解説の『播磨府中めぐり』項目を参照されたい。

用語解説

【『播陽うつつ物語』】ばんよううつつものがたり

『播陽万宝智恵袋（ばんようばんぼうちえぶくろ）』巻39収録。奥書によると、天正元（1573）年12月10日の夜、赤松了益（あかまつりょうえき）が久保玄静（くぼげんせい）に話した内容をまとめたもので、剣持清詮（けんもちきよあき）が所蔵していた本を三木通識が元禄年間に転写し、延享5（1748）年に校訂したものとされる。播磨の古跡の由来や物語が、別の本からの引用を含めて記されている。著者の赤松了益は、龍野赤松氏の一族で、戦国末期から安土桃山時代にかけて龍野で医業を営む傍ら著述を行った人物とされ、『播陽万宝智恵袋』にも他に3点の著書が収録されている。

参考書籍

伝説の参考書籍

書籍名	刊行年	著者名	発行者
日本伝説 播磨の巻	1918 (1978復刻)	編著：藤沢衛彦	日本伝説叢書刊行会
兵庫の民話(日本の民話 25)	1960	編集：宮崎修二郎、徳山静子	未来社
郷土の民話 淡路編	1972	編集："郷土の民話"淡路地区編集委員会	兵庫県学校厚生会
郷土の民話 中播編	1973	編集："郷土の民話"中播地区編集委員会	兵庫県学校厚生会
兵庫のむかし話	1978	編著：兵庫県小学校国語教育連盟	日本標準
兵庫の伝説 1	1981	編集：有井基、絵：のざきジョー	神文書院
兵庫のむかし話釈講	1983	著：船知慧、さしえ：森崎伯霊	中央出版エージェンツ
あわじの昔ばなし	1985	編集：濱岡きみ子	神戸新聞出版センター
兵庫の伝説 2	1986	編集：有井基、絵：のざきジョー	神文書院
洲本八だぬきものがたり	2002	文：木戸内福美、絵：長野ヒデ子	アリス館

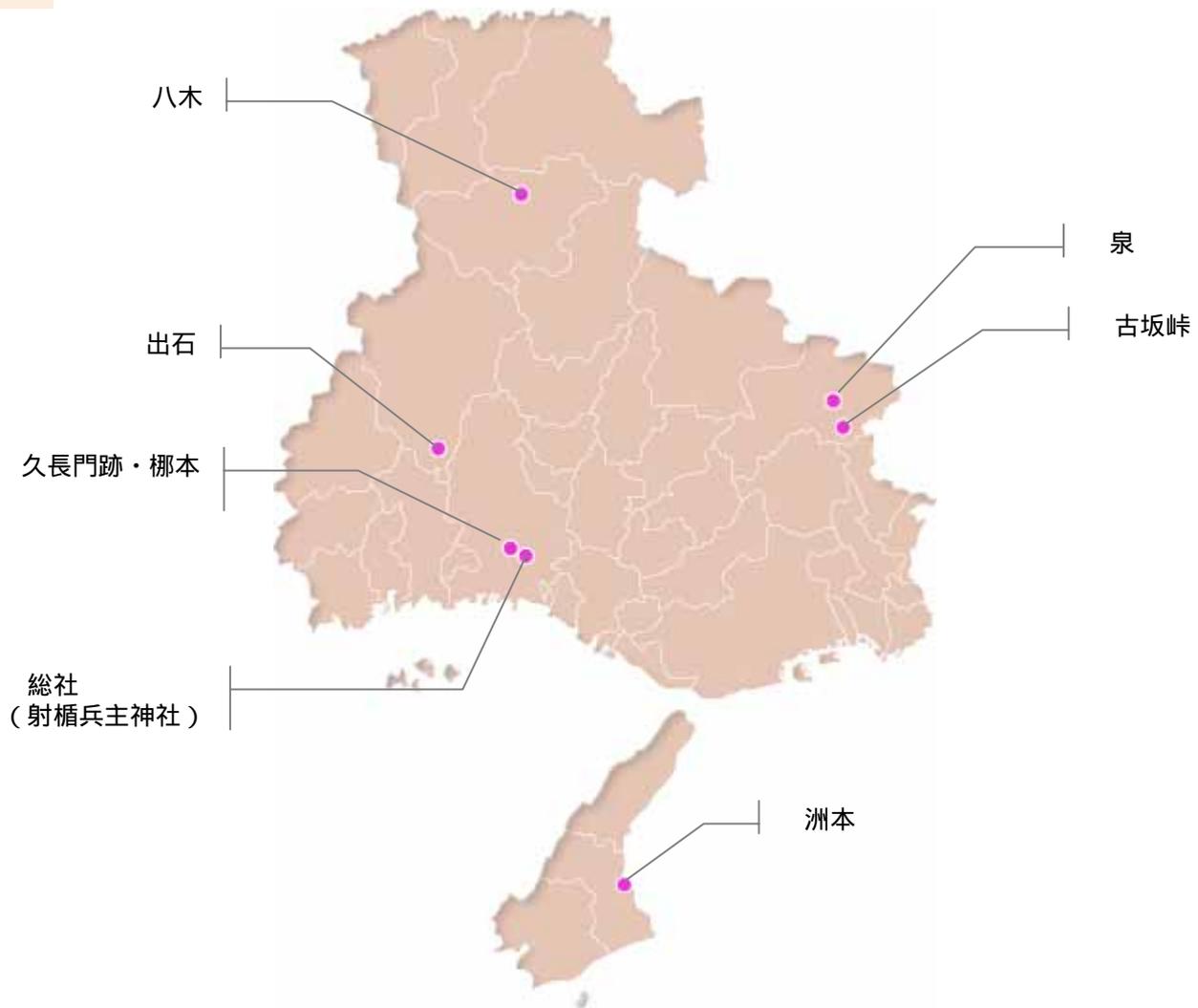
歴史・文化の参考書籍

書籍名	刊行年	著者名	発行者
総社集日記(収録:『播陽万宝知恵袋』上)	1988	編纂:天川友親、校訂:八木哲浩	臨川書店
播州古所伝聞志(収録:『播陽万宝知恵袋』上)	1988	編纂:天川友親、校訂:八木哲浩	臨川書店
播州故事考(収録:『播陽万宝知恵袋』上)	1988	編纂:天川友親、校訂:八木哲浩	臨川書店
国衙巡行考証(収録:『播陽万宝知恵袋』上)	1988	編纂:天川友親、校訂:八木哲浩	臨川書店
播州雄徳山八幡宮縁起(収録:『播陽万宝知恵袋』上)	1988	編纂:天川友親、校訂:八木哲浩	臨川書店
播磨府中めぐり(収録:『播陽万宝知恵袋』上)	1988	編纂:天川友親、校訂:八木哲浩	臨川書店
播州府中めぐり拾遺(収録:『播陽万宝知恵袋』上)	1988	編纂:天川友親、校訂:八木哲浩	臨川書店
近村めぐり一步記(収録:『播陽万宝知恵袋』上)	1988	編纂:天川友親、校訂:八木哲浩	臨川書店
播陽うつつ物語(収録:『播陽万宝知恵袋』下)	1988	編纂:天川友親、校訂:八木哲浩	臨川書店
播州続古処拾考(収録:『播陽万宝知恵袋』下)	1988	編纂:天川友親、校訂:八木哲浩	臨川書店
播磨鑑	1958	著者:平野庸修、校訂:播磨史籍刊行会	播磨史籍刊行会
播州名所巡覧図絵	1974	著者:秦石田、校訂:井口洋	柳原書店
桃山人夜話 絵本百物語 (角川文庫ソフィア)	2006	竹原春泉	角川書店
阿波における狸伝説 附外道について (収録:山田野理夫編『憑物』)	1988 (初出 1922)	著者:後藤捷一、編集:喜田貞吉	宝文館出版
郷土の民話 丹有編	1972	編集:"郷土の民話"丹有地区編集委員会	兵庫県学校厚生会
郷土の民話 但馬編	1972	編集:"郷土の民話"但馬地区編集委員会	兵庫県学校厚生会
日本物語通観 16 兵庫	1978	責任編集:稲田浩二、小沢俊夫	同朋舎
日本の伝説 43 兵庫の伝説	1980	宮崎修二郎、足立巻一	角川書店
狸とその世界(朝日選書400)	1990	中村禎里	朝日新聞社
しばえもん	2000	作:野口早苗、絵:山口久仁子	淡國書房(成錦堂出版部)
狐の日本史 古代・中世編	2001	中村禎里	日本エディタースクール出版部
狐の日本史 近世・近代編	2003	中村禎里	日本エディタースクール出版部
丹波(篠山市・丹波市)のむかしばなし 8	2008	編集:「丹波(篠山市・丹波市)のむかしばなし」編集委員会	(財)丹波の森協会

その他の参考資料

書籍名	刊行年	著者名	発行者
洲本八狸 虎の巻(洲本バスセンター内観光案内所配布パンフレット)	不詳	編集:洲本市街地活性化センター 八狸委員会	洲本市街地活性化センター 八狸委員会

所在地リスト



古坂峠	篠山市曾地中、後川上
泉	篠山市泉
八木	養父市八鹿町八木
出石	山崎町須賀沢
総社（射楯兵主神社）	姫路市総社本町190
久長門跡・柳本	姫路市本町
洲本	洲本市山手、本町、ほか

ひょうご歴史ステーション「ひょうご伝説紀行」は、兵庫県立歴史博物館により管理・運営しております。サイトで使用するテキスト・画像などのコンテンツ全般の著作権は当館に帰属し、無断での複製・転用・転載などを禁止いたします。

ひょうご伝説紀行 妖怪・自然の世界
<http://www.hyogo-c.ed.jp/~rekihaku-bo/historystation/legend3/>

編集発行 兵庫県立歴史博物館
〒670-0012 兵庫県姫路市本町6-8 079-288-9011

第1刷 2009年4月1日

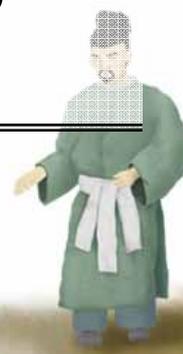
ひょうご伝説紀行
妖怪と自然の世界



犬飼村の猿神退治
芝左太夫の賢いお供



犬寺ものがたり
白と黒の二頭の犬



伝説

犬飼村の猿神退治
芝左太夫の賢いお供
犬寺ものがたり
白と黒の二頭の犬

紀行

犬と人
・犬飼を歩く
・『今昔物語集』の猿神伝説
・粟賀法楽寺

関連情報

用語解説
参考書籍
所在地リスト

伝説

犬飼村の猿神退治 芝左太夫の賢いお供

むかしむかし、今の姫路市香寺町犬飼（ひめじしこうでらちょういぬかい）のことを沢村（さわむら）と呼んでいました。そのころの沢村には、年に一度の氏神（うじがみ）の祭りに、神へのささげ物として人をいけにえにする、「人身御供（ひとみごくう）」と呼ぶならわしがありました。ある年、堤佐助（つみさすけ）の十三歳になる娘に順番が回ってきました。

「いくら氏神様のためとはいえ、手塩にかけて育てた娘をいけにえにするなんて。」

佐助は深く悲しんでいました。

そんなとき、佐助の家へ、伊勢神宮（いせじんぐう）の教えを広めるために、芝左太夫（しばさだゆう）という男が、毛並みのつやつやした犬を供に従えて訪ねてきました。左太夫は、佐助から人身御供の話聞き、「なんとむごいことを。」と心から同情しました。

「よし。それならば、わたしがその娘の代わりに氏神のところへ行くでしょう。」

左太夫は愛犬を連れて、氏神の社（やしる）へ向かいました。社殿（しゃでん）の戸を閉めて、中で犬とともに待っていると、夜半過ぎにとつぜん戸が開きました。そして、見たこともないような大きな猿（さる）が、左太夫を一かみにしようとするすごい勢いでおそいかかってきました。

しかしそのとき、左太夫の愛犬がすばやく飛び出し、大猿と犬とは組んだりはなれたり、はげしく戦いました。ついに愛犬が大猿を追いつめ、ノドにかみついてとどめをさそうとしたとき、大猿は急に狸に姿を変えて山の上へと逃げていきました。

それから後、この村では人身御供のならわしはなくなりました。村人たちは左太夫が伝えた伊勢の神様を氏神としてまつことにしました。そして村の名前も、沢村をあらためて犬飼村と呼ぶようになったのです。

（『播磨鑑』、『郷土の民話』中播編をもとに作成）

伝説

犬寺ものがたり 白と黒の二頭の犬

むかしむかし、奈良（なら）の飛鳥（あすか）に都があったころの話です。今の神河町（かみかわちょう）に枚夫長者（まいぶちょうじゃ）という豪族（ごうぞく）がいました。そのころ飛鳥で争いがあり、枚夫長者たち地方の豪族にも軍勢として都にのぼるよう命令が届いたので、戦（いくさ）のしたくを整えて出かけていきました。

数か月後、都の争いもおさまり、枚夫長者はなつかしいわが家に帰ってきました。留守をまかせていた家来がうやうやしく主人を出迎えました。

「長者さまがお留守の間に、鹿（しか）がたくさん集まるよい狩り場（かりば）を見つけました。ぜひ明日、一緒にまいりませんか。」

枚夫長者は狩りが大好きだったので大変よろこび、つぎの日、いつもかわいがっている白と黒の愛犬二頭をつれ、家来と二人で狩りに出かけました。

ところが、これはワナでした。家来は主人が留守の間に、自分が長者になろうと考え、いろいろと計略を練っていたのです。ほかにだれもいない山奥まで来たとき、とつぜん家来は弓に矢をつがえ、枚夫長者にねらいを定めてきました。長者は不意を打たれて、どうすることもできませんでした。

死を覚悟（かくご）した長者は、家来に少しだけ待つよう頼むと、供につれていた愛犬たちに、持っていた弁当を分け与えながら語りかけました。

「わしはもはやこれまでじゃ。しかし、おまえたちに一つだけ頼みがある。わしが殺されたら、おまえたちはわしの体をきれいに残さず食べてしましてほしい。わしもこのあたりでは少しは名の知られた長者だ。そんなわしが家来に殺されたとあっては恥（は）ずかしくて死んでも死にきれない。よいな、恥（はじ）を残さないために、わしの体を食べてしまうのじゃぞ。」

愛犬たちは、首をうなだれて聞いていましたが、主人の言葉が通じたのでしょうか、その言葉がおわるやいなや、二頭ともすばやく飛びあがって、一頭は家来の弓の弦（つる）をかみ切り、もう一頭は家来ののどに食らいつきました。

こうして長者は愛犬のおかげで助かることができました。やがて愛犬たちが天寿（てんじゅ）をまっとうして死ぬと、長者は二頭のために墓所にお寺を建て、すべての財産を愛犬たちの供養（くよう）のためにお寺に寄付しました。このお寺は神河町にある法楽寺（ほうらくじ）というお寺で、犬寺と呼ばれて親しまれています。

（『郷土の民話』中播編をもとに作成）

紀行 犬と人

犬飼を歩く

人身御供（ひとみごくう）を要求する神を、いあわせた来訪者が愛犬とともに退治するという犬飼の伝説。江戸時代中ごろの文献である『播磨鑑（はりまかがみ）』や、『播陽万宝知恵袋（ばんようばんぼうちえぶくろ）』に収録された『めざまし草』、『播陽うつつ物語』、『播州古所説略説（ばんしゅうこしょせつりやくせつ）』などにも見える。このうち『めざまし草』は天正7（1579）年の奥書を持ち、これが正しければ江戸時代になる前から語られていた伝説ということになる。その舞台となる姫路市香寺町犬飼（ひめじしこうでらちょういぬかい）を訪ねてみた。



神明神社



竹宮大明神社殿



天照大神社殿

伝説の舞台となった氏神の社は、神明神社（しんめいじんじゃ）である。境内は伊勢山と呼ばれる山の麓にあり、社殿は二つに分かれている。山の斜面の上にあるのが天照大神（あまてらすおおみかみ）をまつる神明神社の社殿、斜面の下にあるのが、「竹宮大明神（たけのみやだいみょうじん）」と額が掛けられている社殿である。



字宮ノ後付近

斜面の下の「竹宮大明神」の社殿は、地元の伝承では、かつては「宮ノ後（みやのしり）」という地名で呼ばれている平地にあったとされている。現在は地区の公民館やスーパーマーケットがあるあたりだ。しかし、湿地帯で場所が悪かったため、江戸時代前半に現在の神明神社境内に移したという。天照大神をまつる社殿の方は、神社に伝わる伝承では、永禄10（1567）年に、姫路の北の有明山（ありあけやま）から迎えたものとされている。

二つの社殿から石段を下りたところに、今は広場として整地されている平坦地がある。かつてはもう少しゆるやかな斜面だったというが、ここは「キタノヤシキ」と呼ばれ、中世後期にこの地を治めていた喜多野（きたの）氏の屋敷跡と伝えられている。この喜多野屋敷の南東の隅に、「犬塚」と書かれた石碑が建てられている。



伝「キタノヤシキ」



犬塚

また、神社の参道が鳥居をくぐるあたりに、かつて「ひひ塚」があったとされる場所がある。現在は参道を拡幅した際に削られ、断面が見えている状態になっているが、かつては少し盛り上がった塚状を呈していたという。

なお、このサイトでは神を「大猿」として紹介したが、正確には「ひひ」と言うべきである。ここで言う「ひひ」とは、今日アフリカなどにいるヒヒを指すのではなく、化けるほど年をとった猿を指している。



ひひ塚跡



ひひ(『北斎漫画』)

さらに、神社から旧道を南に下り、犬飼から地区外にでようとする地点に、大きな岩盤が露出している。ここにはかつて「馬すべり」と呼ばれたへこみのある岩があり、伊勢の神が馬に乗ってやってくるときに、馬がすべったひずめの跡であると伝えられていた。岩自体は、『神崎郡誌』によれば、道路拡幅のため1897(明治30)年ごろに削り取られたとされている。現在の岩盤は、この岩が削り取られた後の姿である。

伝説では、伊勢からやってきた男とその愛犬の活躍で、古い氏神を打ち負かしたとされている。こうした社殿のあり方や、祭神をめぐる伝承から考えると、この伝説には、古くからまつられていた竹宮大明神の後に、伊勢の天照大神がまつられるようになった、という歴史が反映されていると考えられる。

一般的に、伊勢信仰は、室町後期～戦国時代に庶民の間にも広く浸透していったとされている。伝説に出てくる男とは、全国をまわって伊勢への参詣を勧めるとともに、参詣の際の宿所を提供するなどした御師(おし)と呼ばれた宗教者であった。



馬すべり跡

犬飼の神明神社の場合、犬飼にまつられるようになった年代が伝承では永禄10(1567)年とされ、こうした伊勢信仰の広まりの一般的傾向とよく一致する。あるいは、このころ新たに伊勢の神を村の氏神とするにあたって、古い神との交代をスムーズに進めるために、こうした伝説が語られ始めたのではないか。その際、伊勢の御師が関与していた可能性が高いと考えられる。

『今昔物語集』の猿神伝説



篠山市犬飼 大歳神社

香寺町犬飼の伝説のように、猿などの人身御供を要求する神を、外来者が犬とともに退治するという話は、全国的に多数の類話が存在する。県域でも篠山市犬飼（ささやましいぬかい）や姫路市広畑区才（ひめじしひろはたくさい）にほぼ同じ内容の伝説が見られ、篠山市の場合は村の名前も同じく犬飼である。

こうした猿神退治型伝説は、時期的にも古くから定着していたようで、12世紀に編纂された『今昔物語集（こんじゃくものがたりしゅう）』には、飛騨国（ひだのくに＝現在の岐阜県北部）と美作国（みまさかのくに＝現在の岡山県北部）の二つの話が収録されている。いずれも若い女性の人身御供を要求する猿や蛇の神に対して、外部から来た男が犬とともにこれを退治し、その後人身御供の習慣は途絶えたとするものである。



篠山市犬飼 大歳神社

この話の源流は中国の説話集まで行き着くことも指摘されている。3世紀～6世紀に成立した『搜神記（そうじんき）』巻19には、現在の福建省（ふっけんしょう）の話として、大蛇の神に少女を生贄（いけにえ）にするならわしがあったところ、ある娘がみずから志願して犬とともに大蛇を退治したという話が記されている。



姫路市広畑区才 犬塚

さて、猿神退治伝説をめぐるのは、明治の昔から、そこで語られている人身御供が実際に太古の日本で行われていたかどうかをめぐる、さまざまな論争が繰り返されてきている。しかし、ここではその点に深入りすることは避けて、参考文献ライブラリーにあげた小松和彦氏の編著書と六車由美氏の著書をご覧くださいことをお勧めするに止めておこう。ここで注目しておきたいのは、全国的な広がりを持つこの伝説が、各地域に伝わり、定着していった過程についてである。

香寺町犬飼の事例は、この点を考える上で興味深い。村に新しく伊勢信仰が受け入れられていく過程で、こうした話が定着していったと推定できるためである。これは、伝説の伝播・定着について、宗教者が大きな役割を果たしていた事例と言える。この点については、もう一つの伝説を紹介しながら、また述べてみたい。

栗賀法楽寺

もう一つの犬の伝説として、このサイトでは神河町中村（かみかわちょうなかむら）の法楽寺（ほうらくじ）の開基伝説を紹介している。この話は、古くから「播州犬寺（ばんしゅういぬでら）」の縁起として、地域ではよく知られていた話である。法楽寺境内には、本堂の前に白犬・黒犬像がまつられている。



法楽寺本堂



開山堂



山門



白犬像



黒犬像

中村から南に行った福本（ふくもと）の福山集落（ふくやましゅうらく）には、牧夫長者（まいぶちょうじゃ）の屋敷跡と伝承されてきたところがある。現在は稲荷の祠（ほくら）がまつられている。その背後の山頂付近には、犬の供養塔とされる宝篋印塔（ほうきょういんとう）と五輪塔（ごりんとう）もある。宝篋印塔は南北朝期の形式を示す優品である。そこから谷を一つ隔てたところにある五輪塔は、各時代のものを寄せ集めたものようだ。



伝牧夫長者屋敷跡



宝篋印塔のある山



福本福山宝篋印塔 (写真提供：
神河町教育委員会)



福本福山五輪塔 (写真提供：
神河町教育委員会)

また、神河町の北部、長谷（はせ）地区にも犬塚がある。現在の「犬塚」石碑は新しいものであるが、背後のお堂には宝篋印塔がまつられている。長谷に伝わる犬塚伝説は、法楽寺伝説の後日談ともいえるもので、牧夫長者の妻が、夫の地位を奪おうとした家来に味方したことを恥じて出家し、この地に清水寺（せいすいじ）という寺を建てて隠棲したとのものである。現在は長谷地区と呼んでいるが、江戸時代までは犬見村（いぬみむら）と呼ばれていて、長谷を流れる市川の支流を犬見川と呼んでいる。



神河町長谷 犬塚



清水寺



犬見川

なお、このサイトでは小学生にも読みやすくするために省略しているが、犬寺伝説には、牧夫長者の留守中に、妻が家来と恋仲になってしまっていた、との話が含まれている。長谷の伝説は、この話を踏まえたものである。

この法楽寺の犬寺伝説は、比較的古くからよく知られていたようである。鎌倉時代後期に成立した『元亨釈書（げんこうしゃくしょ）』巻28に、現在の伝説の原型が記されている。『元亨釈書』は全国的に広く読まれていた書物である。また、南北朝時代の播磨の地理・歴史書である『峰相記（みねあいき）』にも、やや変形された話が見られる。

さらに江戸時代の絵画作品として、『犬寺縁起絵巻（いぬでらえんぎえまき）』（大阪市立美術館蔵）もある。この絵巻は、法楽寺とは関係のないところで、江戸時代の都市の富裕層が楽しむ作品として制作されたと考えられている。犬寺伝説が、すでに江戸時代には有名な伝説として、播磨以外の地域でもよく知られていたことがうかがえるのである。

さて、この話も猿神退治伝説と同様に、源流は中国の怪異記録（「志怪〔しかい〕」と言う）にさかのぼることが指摘されている。先にあげた『搜神記』の続編にあたる、『搜神後記（そうじんこうき）』に、つぎのようなよく似た話が載せられているのである。現在の浙江省（せつこうしょう）から都に労役として駆り出された男が、休暇をもらって故郷に帰ってきた。しかし、男の留守中に、妻は召使と恋仲になってしまっていた。帰ってきた男を迎えた妻は、召使に弓矢で男を狙わせながら、男に食事を出して食べるように勧めた。男が死を覚悟したその時、飼っていた犬が召使を倒し、男は難を逃れた、という話である。犬寺の伝説と、話の骨組みは大変よく似ており、原話とみなして差し支えないと考えられている。

香寺町犬飼の伝説は、伊勢の神がこの地区に迎えられた戦国時代ごろ以降の定着と考えられるが、犬寺伝説は、『元亨釈書』に見えるので、遅くとも鎌倉後期には成立していたことになる。いずれも共通するのは、中国にまでさかのぼる原話があることと、宗教者がその伝播や定着に大きな役割を果たしていたと見られる点である。歴史の中では、宗教者がさまざまな古典から材料を得て、地域の実情に合わせてアレンジすることが、かなり古くから、そしてしばしば行われていたようだ。

このように、伝説のルーツをたどっていくと、中国にまで行き着く場合がある。紀行文「岩と樹木」で紹介している「おりゅう柳」伝説も、類似した事例である。

用語解説

【『播磨鑑』】はりまかがみ

宝暦12（1762）年ごろに成立した播磨の地理書。著者は、播磨国印南郡平津村（はりまのくにいなみぐんひらつむら＝現在の加古川市米田町平津）の医者であった平野庸脩（ひらのつねなが、ひらのようしゅう）。享保4（1719）年ごろから執筆が始められ、一旦完成して姫路藩に提出した宝暦12年以降にも補訂作業が進められた。著者の40年以上にわたる長期の調査・執筆活動の成果である。活字化されたものは、播磨史籍刊行会校訂『地志 播磨鑑』（播磨史籍刊行会、1958年）がある。

【『播陽万宝知恵袋』】ばんようばんぼうちえぶくろ

天川友親（あまかわともちか）が編纂した、播磨国の歴史・地理に関する書籍を集成した書物。宝暦10（1760）年に一旦完成したが、その後も若干の収録書籍の追加が行われている。天川友親は現在の姫路市御国野町御着（ひめじしみくにのちょうごちゃく）の商家に生まれた。収録された書物は、戦国末・安土桃山時代から、友親の同時代にまでわたる125件に及ぶ。これらのほとんどは、現在原本が失われてしまっており、本書の価値は高い。活字化されたものは、八木哲浩校訂『播陽万宝知恵袋』上・下（臨川書店、1988年）がある。

【『めざまし草』】めざましくさ

『播陽万宝智恵袋（ばんようばんぼうちえぶくろ）』巻42収録。天正7（1579）年永良鶴翁（ながらかくおう）著。播磨国内のさまざまな奇談、逸話を集めたもの。著者の永良鶴翁については詳しくはわからないが、現在の市川町西部にあった永良荘（ながらのしょう）に居住した人物と見られている。なお、奥書には「芦屋道たつ」という人物が見えるが、これは『播陽万宝智恵袋』巻15収録の『播磨国衛巡行考証（はりまこくがじゅんこうこうしょう）』の著者である「芦屋道建」を指すと見られる。道建は、天正ごろ活動した人物であるので、本書も天正ごろの書物と見てよいだろう。

【『播陽うつつ物語』】ばんよううつつものがたり

『播陽万宝智恵袋（ばんようばんぼうちえぶくろ）』巻39収録。奥書によると、天正元（1573）年12月10日の夜、赤松了益（あかまつりょうえき）が久保玄静（くぼげんせい）に話した内容をまとめたもので、剣持清詮（けんもちきよあき）が所蔵していた本を三木通識が元禄年間に転写し、延享5（1748）年に校訂したものとされる。播磨の古跡の由来や物語が、別の本からの引用を含めて記されている。著者の赤松了益は、龍野赤松氏の一族で、戦国末期から安土桃山時代にかけて龍野で医業を営む傍ら著述を行った人物とされ、『播陽万宝智恵袋』にも他に3点の著書が収録されている。

【『播州古所跡略説』】ばんしゅうこしよせきりやくせつ

『播陽万宝智恵袋（ばんようばんぼうちえぶくろ）』巻13収録。宝暦6年天川友親（あまかわともちか）の著。播磨の名所、寺社、故事、伝説など101項目を記す。著者の天川友親は『播陽万宝智恵袋』の編纂者。詳しくは、本用語解説の『播陽万宝智恵袋』項目を参照されたい。

用語解説

【『今昔物語集』】こんじゃくものがたりしゅう

12世紀成立と見られる説話集。著者は大寺院の僧侶と考えられているが、詳しくはわかっていない。天竺（てんじく＝インド）・震旦（しんたん＝中国）・本朝（ほんちょう＝日本）の三部構成で、合計1,000話以上が収録されている。

ただし、未完成のまま残された書物と見られ、全体の構成は完結しておらず、また地名などを中心に記述が空白のまま残されている箇所も多い。また収録された説話は、大部分が数多くの先行文献から採録されたものと見られているが、仏教的な功德、靈験譚などの仏教的説話から、武士の武功や民間の奇談異聞などの世俗的説話まで、幅広い内容の話がみられる。平安時代後期の社会相を知る上で貴重な文献。

【『搜神記』】そうじんき

東晋（とうしん）王朝の官僚である干宝（かんぼう）が編纂した怪異話、奇談を集めた書物。こうした書物のジャンルを「志怪（しかい）」と呼ぶ。本書が著された六朝時代（3～6世紀）は、こうした「志怪」が現れはじめ、盛んに記されていた時代であった。著者の干宝は、王朝の歴史編纂にも携わっており、『晋紀（しんぎ）』という晋王朝の歴史書も著している。『搜神記』にも、こうした干宝の学識が反映されていると見られていて、収録された話題の幅が広いことや、過去の史料や書籍からの引用が見られる点が特徴とされている。

【宝篋印塔】ほうきょういんとう

本来は「宝篋印陀羅尼經（ほうきょういんだらにきょう）」を納めるための塔。日本ではとくに石塔の場合、墓碑や供養塔として建てられるようになっていた。石塔としては、鎌倉時代中ごろからの遺品が残る。形状は、方形の基礎、基礎よりも小ぶりの塔身、笠形の屋根、円筒状の相輪からなる。屋根には四隅に隅飾（すみかざり）と呼ばれる突起が立てられる。この隅飾りの開きぐあいに時代ごとの特徴がよくあらわれ、古いものほど直立し、新しいものは外側へ開いていく傾向がある。

【五輪塔】ごりんとう

供養塔、墓塔として造られることが多かった仏塔の一種。石製のものが多く残る。下から順に、基礎にあたる方形の地輪（ちりん）、円形の水輪（すいりん）、笠形の火輪（かりん）、半球形の風輪（ふうりん）、宝珠形（ほうしゅがた）の空輪（くうりん）の五段に積み、古代インドで宇宙の構成要素と考えられていた、地、水、火、風、空（五大、ごだい）をあらわす。密教の影響が強く、石塔としては平安時代末期からの遺品が知られている。

【『元亨釈書』】げんこうしゃくしょ

鎌倉時代後期に成立した仏教史書。日本への仏教伝来から元亨2（1322）年までの僧侶の伝記や諸事跡を記したものの。著者は禅僧の虎関師錬（こかんしれん）。南北朝時代に、朝廷の許可によって大蔵經（だいぞうきょう、仏教の主要經典集）に加えられ、永和3（1377）年に初版本が刊行されている。

用語解説

【『峰相記』】みねあいき

峰相山鶏足寺（みねあいさんけいそくじ＝現在の姫路市石倉の峰相山山頂付近にあった寺）の僧侶が著した中世播磨の宗教・地理・歴史を記した書物。原本は本文冒頭の記述から貞和4（1348）年ごろに成立したと考えられる。現存する最善本は揖保郡太子町（いぼぐんたいしちょう）の斑鳩寺（いかるがでら）に伝わる写本で、奥書から永正8（1511）年2月7日に書写山別院（しょしゃざんべついでん）の定願寺（じょうがんじ）で写されたものであることがわかる。活字化されたものは、『兵庫県史』史料編中世4（兵庫県史編集専門委員会、1989年）や、全文口語訳をした、西川卓男『口語訳『峰相記』 中世の播磨を読む』（播磨学研究所、2002年）などがある。

【『搜神後記』】そうじんこうき

干宝（かんぼう）著『搜神記』の続編を標榜した書物。鬼神や動物にまつわる怪異話が目立ち、仏教に関する話題が収められている点が特徴とされる。著者は陶潜（とうせん、365～427）とされる。陶潜は字（あざな、通称）は淵明（えんめい）。現在の江西省の人で、自由な隠遁生活を好み、詩の「帰去来辞（ききょらいじ）」の作者としてよく知られている。

参考書籍

伝説の参考書籍

書籍名	刊行年	著者名	発行者
峰相記(収録:『兵庫県史』史料編中世4)	1989	編集:兵庫県史編集専門委員会	兵庫県
播州古所跡略説(収録:『播陽万宝知恵袋』上)	1988	編纂:天川友親、校訂:八木哲浩	臨川書店
播陽うつつ物語(収録:『播陽万宝知恵袋』下)	1988	編纂:天川友親、校訂:八木哲浩	臨川書店
播州諸所古今物語(収録:『播陽万宝知恵袋』下)	1988	編纂:天川友親、校訂:八木哲浩	臨川書店
播磨鑑	1958	著者:平野庸修、校訂:播磨史籍刊行会	播磨史籍刊行会
日本伝説 播磨の巻	1918 (1978復刻)	編著:藤沢衛彦	日本伝説叢書刊行会
郷土の民話 中播編	1973	編集:"郷土の民話"中播地区編集委員会	兵庫県学校厚生会
兵庫の伝説	1980	編著:兵庫県小学校国語教育連盟	日本標準
兵庫のむかし話釈講	1983	著:船知慧、さしえ:森崎伯霊	中央出版エージェンツ
日本伝説大系 8 北近畿編	1988	編集:福田晃	みずうみ書房

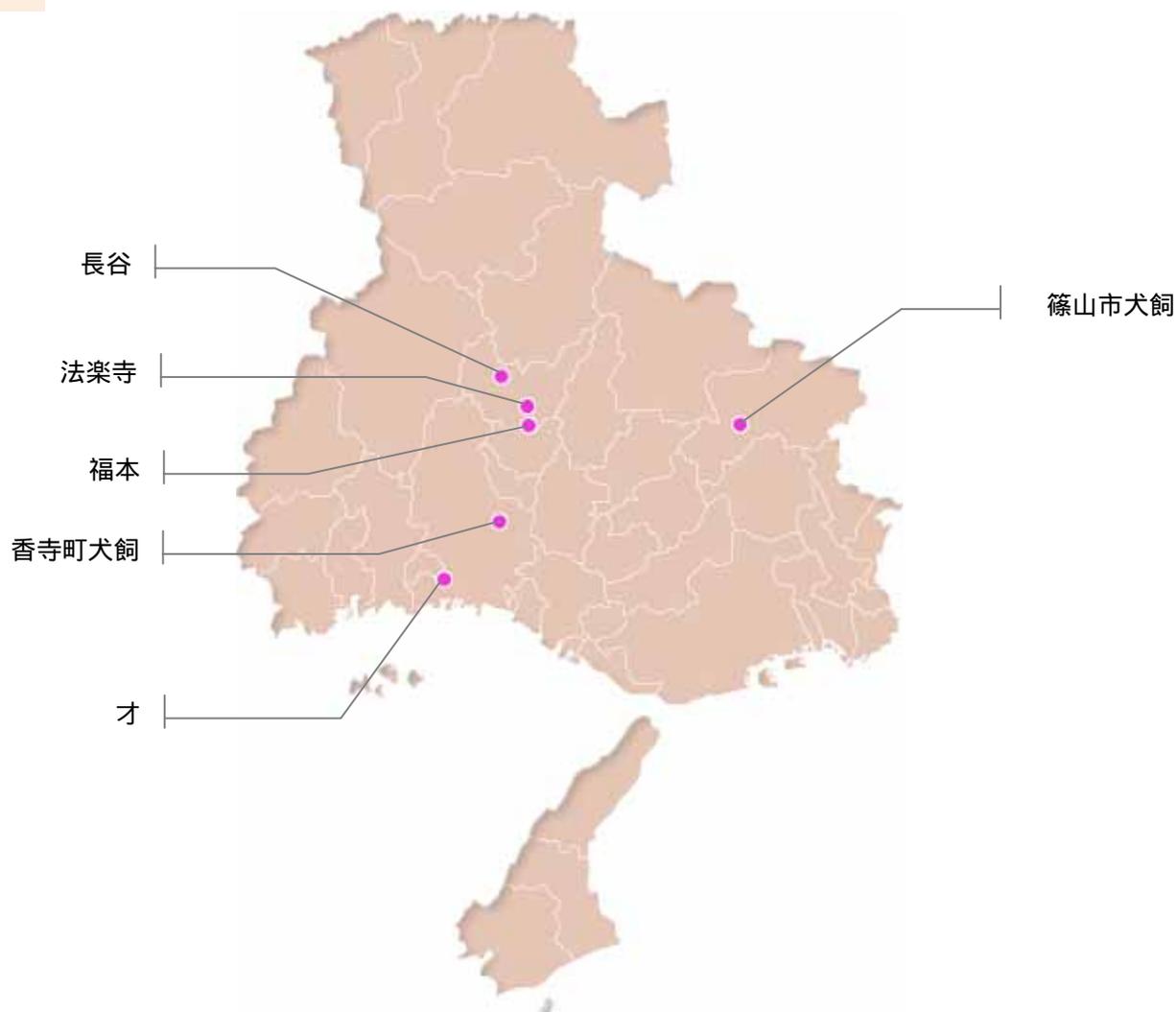
歴史・文化の参考書籍

書籍名	刊行年	著者名	発行者
搜神記(収録:中国古典小説選2『搜神記 幽明録 異苑他』)	2006	編纂:干宝、編集:竹田晃	明治書院
搜神後記(収録:中国古典文学大系24『六朝・唐・宋小説選』)	1968	編纂:陶潜、編訳:前野直彬	平凡社
今昔物語集 5(新日本古典文学大系37)	1996	校注:森正人	岩波書店
元亨釈書(収録:新訂増補国史大系31『日本高僧伝要文抄・元亨釈書』)	1965	編集:黒板勝美	吉川弘文館
十六郡寺院縁起(収録:『播陽万宝知恵袋』上)	1988	編纂:天川友親、校訂:八木哲浩	臨川書店
めさまし草(収録:『播陽万宝知恵袋』下)	1988	編纂:天川友親、校訂:八木哲浩	臨川書店
日本伝説集	1913 (1973復刊)	高木敏雄	郷土研究社 (復刊:宝文館出版)
伝説の兵庫県	1961 (2000再刊)	西谷勝也	神戸新聞総合出版センター (再刊)
郷土の民話 丹有編	1972	編集:"郷土の民話"丹有地区編集委員会	兵庫県学校厚生会
兵庫のむかし話	1978	編著:兵庫県小学校国語教育連盟	日本標準
日本の伝説 43 兵庫の伝説	1980	宮崎修二郎、足立巻一	角川書店
新稿 社寺参詣の社会経済史的研究	1982	新城常三	塙書房
かんざき夜話 - - 史話と民話 - -	1987	編集:神崎町文化協会郷土史研究部会	神崎町文化協会
日本伝説大系 別巻1 研究編	1989	編集:荒木博之他	みずうみ書房
新版 今昔物語集の世界	1999	池上洵一	以文社
『犬寺縁起絵巻』の成立 付・翻刻 (収録:『学習院女子大学紀要』1号)	1999	徳田和夫	学習院女子短期大学・学習院女子大学
再び『犬寺縁起絵巻』について(収録:『学習院女子大学紀要』2号)	2000	徳田和夫	学習院女子短期大学・学習院女子大学
怪異の民俗学 7 異人・生贄	2001	責任編集:小松和彦	河出書房新社
神、人を喰う 人身御供の民俗学	2003	六車由美	新曜社
香寺町史 村の記憶 地域編	2005	編集:香寺町教育委員会 町史編集室	兵庫県香寺町
丹波(篠山市・丹波市)のむかしばなし 8	2008	編集:「丹波(篠山市・丹波市)のむかしばなし」編集委員会	(財)丹波の森協会

その他の参考資料

書籍名	刊行年	著者名	発行者
犬飼地区神明神社史跡探索(平成20年10月26日(日)実施)(見学会パンフレット)	2008	編集:犬飼歴史研究会	犬飼地区自治会・町史編集室・ため池クリーンキャンペーン&コスモまつり実行委員会

所在地リスト



篠山市犬飼	篠山市犬飼
長谷	神河町長谷
法楽寺	神河町中村1048
福本	神河町福本
才	姫路市広畑区才
香寺町犬飼	香寺町犬飼

ひょうご歴史ステーション「ひょうご伝説紀行」は、兵庫県立歴史博物館により管理・運営しております。サイトで使用するテキスト・画像などのコンテンツ全般の著作権は当館に帰属し、無断での複写・転用・転載などを禁止いたします。

ひょうご伝説紀行 妖怪・自然の世界
<http://www.hyogo-c.ed.jp/~rekihaku-bo/historystation/legend3/>

編集発行 兵庫県立歴史博物館
〒670-0012 兵庫県姫路市本町6-8 079-288-9011

第1刷 2009年4月1日

ひょうご伝説紀行
妖怪と自然の世界



唐櫃の黄金の鶏
村の行事と大きな石



鷲の地主神
如意尼とソランジン

伝説

唐櫃の黄金の鶏
村の行事と大きな石
鷲の地主神
如意尼とソランジン

紀行

鳥
・金鶏伝説
・寺院と地主神

関連情報

用語解説
参考書籍
所在地リスト

伝説

唐櫃の黄金の鶏 村の行事と大きな石

神戸の北、六甲山（ろっこうさん）を越えたところに唐櫃（からと）というところがあります。そのむかし、神功皇后（じんぐうこうごう）という人が朝鮮半島（ちょうせんはんとう）で戦争をして帰ってきたときに、武器や衣服といっしょに、雌雄（しゆう）二羽の黄金の鶏（にわとり）を石の唐びつ（唐櫃）に納めてうめたので、ここを唐櫃と呼ぶようになったと伝えられています。

唐びつがうめられたと伝えられるところには、後に石の祠（ほこら）がまつられるようになりました。そのまわりは大きな森になっています。これをヌノド（布土）の森と人々は呼んでいます。また、唐櫃には、節分の夜、子供たちが鶏の鳴きまねをする行事が残されています。村の神社で、「トテコロー。」「クー、クー。」と鳴きまねをします。

この金の鶏は、村がよほどおとろえたときでないかぎり、掘り出してはならないと伝えられています。また、唐びつが埋められたところは、本当は森の中のもう少し北にある大きな石の下だとも伝えられています。この大石は大事にしないといけないとされていて、あるとき、村人がこの大石にこしかけて休んだので、病気になって苦しんだと言われています。

（『神戸の伝説』をもとに作成）

伝説

鷲の地主神 如意尼とソランジン

平安時代のはじめのことです。都から、天皇のお后（きさき）が今の西宮（にしのみや）へやってきました。お后は夢の中で女神から、甲山（かぶとやま）にお寺を建てるように、とのお告げを受けていました。六甲（ろっこう）の山なみの東のはずれ、ひとつだけ独立してとがっているのでよく目立つ山があります。それが甲山です。

一行は、そのころこのあたりで一番大きい神社だった広田神社（ひろたじんじゃ）にお参りしてから、甲山へと曲がりくねった坂道を上りはじめました。やがて、紫（むらさき）の美しい雲がたなびいてきて、美しい女性があらわれました。

「私は広田の神です。ここはたいへんに良いところです。ここにお寺をお建てなさい。」

そう言うと、女性は姿を消しました。お后はとてもよろこんでその場所にお寺を建てました。そして、髪（かみ）をおろして仏に仕える身となって、如意尼（によいに）と名乗り毎日修行にはげんでいました。

ところが、お寺から見て西の方の山に大きな鷲（わし）が住んでいました。その山は常に黒い雲におおわれ、ときどき火の玉がふき出ていました。その火の玉は、大鷲がはきだす火だったのです。ある日、とうとう大鷲は火をはきながらお寺に近づき、寺を燃やしてしまおうとおそいかかってきました。

如意尼は、仏にお供えするための井戸水を運ばせ、鷲がはく火に注ぎかけました。すると火はどんどん小さくなり、消えてしまいました。大鷲は、かなわないと見て西の山へと帰っていきました。

この大鷲は、西の山に古くから住んでいるソランジンという神が姿を変えたものでした。ソランジンは、もともとは自分が神としてあがめられていたのに、近ごろは仏教の教えが広まり、人々は仏教をありがたがって自分をないがしろにするので、日ごろから面白くないと思っていたのです。

そんなことがあってから、如意尼は弘法大師（こうぼうだいし）を招き、いろいろなことを教えてもらいながら、大鷲のことをどのようにしたらよいか相談しました。大師は、

「どんなに悪い神でも、けっしてにくんではなりません。ソランジンはこの地方のもともとの神といます。言うならば地主神（じぬしがみ）です。東の谷に大きな岩があるので、その上にソランジンをおまつりしてあげるとよいでしょう。そうすればもう悪いことはしなくなるはずです。」

如意尼は、そのとおりにソランジンをまつりました。それからというもの、もう大鷲がお寺をおそうこともなくなったということです。

（『西宮ふるさと民話』をもとに作成）

紀行 鳥

金鶏伝説

あるところに金の鶏が埋まっていた、村が危機になったときにだけ掘り出してよい、とする話。これを金鶏（きんけい）伝説といい、全国各地に伝わっている。その広がりには日本のみではなく、中国や西洋にも類話があるという。

県域では、摂津国八部郡（せつつのくにやたべぐん）、有馬郡（ありまぐん）から播磨国美囊郡（はりまのくにみのうぐん）にかけて、現在の行政区分で言うと神戸市北区・西区から三木市（みきし）にかけてが、この伝説が比較的目立つ地域である。その一つ、現在は戸建てニュータウンと、古くからの農村が共存している神戸市北区の唐櫃台（からとだい）周辺を訪ねてみた。

伝説の舞台となり、唐櫃の地名の由来ともなっているヌド（布土）の森は、小学校の脇にあった。森の中には石の祠（ほこら）があり、かつては近所の人たちがお供えもしていたという。近くには宝篋印塔（ほうきょういんとう）の一部も転がっていた。



ヌドの森



ヌドの森



森の中の祠



森の中の石



宝篋印塔残欠

また、子供たちが鶏の鳴きまねをする行事が行われる神社は、下唐櫃の山王神社のことである。現在も、2月3日の節分の日（うるう年の場合は2月4日）の夜に行われている。地区では、この行事を「東天紅（トテコロ）」と呼び、古くはヌドの森の祠で行っていたとも伝えられているという。



下唐櫃 山王神社



下唐櫃 山王神社

このあたりの金鶏伝説は、唐櫃のように神功皇后（じんぐうこうごう）伝説と結びついている場合が多い。神功皇后伝説は大阪湾沿岸に色濃く伝えられ、県域でも摂津や播磨の瀬戸内海に近い地域を中心に伝わっている。たとえば、後で紹介する神呪寺（かんのうじ）がある甲山（かぶとやま）も、神功皇后が武器や宝物を埋めたところと伝えられている。

六甲山頂付近にある「石の宝殿（ほうでん）」も、金鶏埋蔵伝説と神功皇后伝説が結びついている。ここは神功皇后が朝鮮半島から持ち帰った神の石を納めたところで、祠のそばの三ツ葉ウツギの根元には金鶏が埋まっている、とされている。



六甲山白山神社 石の宝殿

主役が源義経（みなもとのよしつね）になっている場合もある。須磨区白川（すまくしらかわ）では、集落奥の山中に「宝山」と呼ぶところがあり、一の谷の合戦に向かう途中、義経が雄と雌の金の鶏を埋めたと伝えられている。白川などの六甲山西麓には、江戸時代に鶴越（ひよどりごえ）と呼んだ神戸と三木をつなぐ交通路と、そこから須磨方面に派生する枝道に沿って、義経が戦場へ向かった話にちなむ伝説が多い。

金鶏伝説は、神戸周辺から離れると、かつて大変な長者がいたという長者屋敷伝説や、地域を治める領主が住んでいたという城跡伝説と結びついている場合が多い。たとえば養父市高柳（やぶしたかやなぎ）の近くの「梶原（かじわら）」という丘にある、太郎兵衛長者（たろべえちょうじゃ）という富豪の屋敷跡には財宝が埋まっていて、節分の夜には金の鳥が飛び回る、とされている。こうした伝説は全国各地に無数に見られる。



神戸市須磨区白川

神戸周辺の場合は、神功皇后や源義経など、地域に特徴的な人物と金鶏が結びついている。やはり金鶏は、長者や地域と関わった歴史上の偉人など、英雄との関連が深いのであろう。金鶏伝説には、村が危機に陥ったときに限って掘り出してよい、という話がついている場合が多いが、これも地域の英雄に村を守ってほしいという願望を反映したものではないだろうか。

寺院と地主神

つぎに、鷲にまつわる伝説を紹介しよう。六甲山の東、甲山（かぶとやま）の中腹にある神呪寺。このお寺の開基伝説に、建立を妨害する荒神（こうじん）として鷲が登場する。



神呪寺



神呪寺



山門



神呪寺(『摂津名所図会』)



広田神社



広田神社(『摂津名所図会』)

西の方にある山とは六甲山が想定されていると見られる。神呪寺からやや西方の六甲山の山裾には、鷲林寺（じゅうりんじ）という寺院もある。この鷲林寺にも神呪寺とよく似た開基伝説が伝わっていて、境内には、最近建立されたものであるが、鷲の地主神をまつる荒神堂（こうじんだう）もある。



鷲林寺



石造七重塔



荒神堂

神呪寺も鷲林寺も、真言宗（しんごんしゅう）の寺である。真言宗の総本山高野山金剛峰寺（こうやさんこんごうぶじ）にも、似たような話がある。高野山に寺を開こうとした弘法大師空海（こうぼうだいしゅうかい）を案内したのが、白と黒の2頭の犬を連れた高野明神（こうやみょうじん、「狩場明神（かりばみょうじん）」とも呼ばれる）で、空海に高野山の敷地を譲ったのが、丹生都比売明神（にうつひめみょうじん）であるとされている。両者ともに、高野山の鎮守神としてまつられている。

紀行文「姫山の地主神」でも紹介したように、新しく地域に入ってきた人々は、それ以前からまつられていた神、すなわち地主神を尊重しなくてはならなかった。寺院の世界でも、真言宗に限らず、寺ができる以前から寺域周辺で信仰されていた地主神をまつることは一般的である。神呪寺、鷲林寺の開基伝説については、宗派のつながりから見て、高野山の地主神伝説が影響していると考えてよいであろう。

用語解説

【宝篋印塔】ほうきょういんとう

本来は「宝篋印陀羅尼經（ほうきょういんだらにきょう）」を納めるための塔。日本ではとくに石塔の場合、墓碑や供養塔として建てられるようになっていた。石塔としては、鎌倉時代中ごろからの遺品が残る。形状は、方形の基礎、基礎よりも小ぶりの塔身、笠形の屋根、円筒状の相輪からなる。屋根には四隅に隅飾（すみかざり）と呼ばれる突起が立てられる。この隅飾りの開きぐあいに時代ごとの特徴がよくあらわれ、古いものほど直立し、新しいものは外側へ開いていく傾向がある。

【神功皇后】じんぐうこうごう

『古事記（こじき）』、『日本書紀（にほんしょき）』の神話に現れる伝説上の人物。夫である仲哀天皇（ちゅうあいてんのう）の急死後、住吉の神のお告げによって、子供の応神天皇（おうじんてんのう）を妊娠したまま朝鮮半島に出兵して、朝貢を約束させたという。また、朝鮮半島から畿内へ帰る途中、香坂皇子（かごさかおうじ）、忍熊皇子（おしくまおうじ）が反乱をおこして行く手をさえぎったが、これを平定したという。

【源義経】みなもとのよしつね

1159 - 89。源義朝（みなもとのよしとも）の九男。平治の乱（1159年）で父が敗死した後、鞍馬山（くらまやま）に預けられるが、後に脱出して陸奥国平泉（むつのかくにひらいずみ = 現在の岩手県平泉町）へ向かい、藤原秀衡（ふじわらのひでひら）の庇護を受けた。

治承4（1180）年に兄の頼朝（よりとも）が挙兵すると平泉を離れてこれに合流する。寿永2（1183）年末に兄の範頼（のりより）とともに頼朝の代官として軍勢を率いて出陣し、翌年1月に源義仲（みなもとのよしなか）を討ち取る。ついで同年2月には一の谷の戦い（いちのたにのたたかい = 現在の神戸市）で平家に壊滅的打撃を与えた。翌元暦2（1185）年2月に讃岐国屋島（さぬきのくにやしま = 現在の香川県高松市）で平家を破り、続いて3月に長門国壇ノ浦（ながとのくにだんのうら = 現在の山口県下関市）で平家を滅ぼした。

しかしその直後から頼朝との対立が深まり、文治元（1185）年11月に西国へ向けて都を離れるが、大物浦（だいまつうら = 現在の尼崎市）付近で嵐のために遭難、以後陸奥国平泉へ逃れて再び奥州藤原氏の庇護を受ける。しかし、秀衡没後の文治5（1189）年4月、頼朝からの圧力に屈した藤原泰衡（やすひら）によって殺害された。

【高野山金剛峰寺】こうやさんこんごうぶじ

和歌山県高野町（わかやまけんこうやちょう）にある高野山真言宗（しんごんしゅう）の総本山。京都の東寺（とうじ）とともに、弘法大師空海（こうぼうだいしゅうかい）が活動拠点にした寺院として真言密教（しんごんみつきょう）の聖地とされる。

弘仁2（816）年、空海は真言密教の道場として、高野山の地を朝廷から与えられ、伽藍（がらん）を建立した。紀行文「鳥」で述べた、高野明神と丹生都比売明神から寺地を譲られたとの伝説は、平安中期に成立したと見られる『金剛峰寺修行縁起（こんごうぶじしゅうぎょうえんぎ）』から見られるものである。

用語解説

【弘法大師空海】こうぼうだいしゅうかい

774 - 835。日本に真言密教（しんごんみつきょう）をもたらした平安時代初めの僧侶。同じ時期に天台宗をもたらした伝教大師最澄（でんぎょうだいしさいちょう）とならんで、この時期の日本仏教を代表する人物。延暦23（804）年遣唐使留学僧として入唐。長安（ちょうあん）青龍寺の恵果（えか、「けいか」とも言う）に真言密教を学ぶ。大同元（806）年帰国。弘仁7（816）年朝廷より高野山に金剛峰寺（こんごうぶじ）を開くことを許される。弘仁14（823）年朝廷より東寺（とうじ）を与えられ、真言密教の道場とした。承和2（835）年死去。延喜21（921）年、朝廷から弘法大師の諡号（しごう、死後の贈り名）が与えられた。

参考書籍

伝説の参考書籍

書籍名	刊行年	著者名	発行者
西宮ふるさと民話	1990	編集:西宮市郷土資料館	西宮市教育委員会
神戸の伝説	1998	田辺真人	神戸新聞総合出版センター

歴史・文化の参考書籍

書籍名	刊行年	著者名	発行者
播州名所巡覧図絵	1974	著者:秦石田、校訂:井口洋	柳原書店
西摂大観 郡部	1911 (1965復刻)	編纂:仲彦三郎	明輝社(復刻:内外書房)
日本伝説集	1913 (1973復刊)	高木敏雄	郷土研究社 (復刊:宝文館出版)
武庫郡誌	1921 (1973復刻)	編纂:兵庫県武庫郡教育会	兵庫県武庫郡教育会 (復刻:名著出版)
有馬郡誌 上	1929 (1974復刻)	編纂:山脇延吉	兵庫県有馬郡会 (復刻:名著出版)
摂播金鶏伝説地一覧(収録:『兵庫県民俗資料』1)	1932	河本正義	兵庫県民俗研究会
伝説の系統及び分類(収録:『定本柳田國男集』5)	1962	柳田國男	筑摩書房
郷土の民話 東播編	1972	編集:"郷土の民話"東播地区編集委員会	兵庫県学校厚生会
甲山 神呪寺史	1981	編集:神呪寺	神呪寺
八鹿のむかし話	1982	編集:ふるさと文庫編集委員会	八鹿町
有野町誌	1988	編集:神戸市有野更正農業協同組合	神戸市有野更正農業協同組合
阪神間の民話散歩 むかしと今と	1987	編集:読売新聞阪神支局	阪神読売会
日本伝説大系 8 北近畿編	1988	編集:福田晃	みずうみ書房

その他の参考資料

書籍名	刊行年	著者名	発行者
鷲林寺と麿乱荒神(境内配布パンフレット)	2008	編集:鷲林寺	鷲林寺

所在地リスト



白川	神戸市須磨区白川
唐櫃	神戸市北区唐櫃台
六甲山石宝殿	西宮市山口町、芦屋市奥山
鷲林寺	西宮市鷲林寺町4-8
神呪寺	西宮市甲山町25-1
広田神社	西宮市大社町7-7

ひょうご歴史ステーション「ひょうご伝説紀行」は、兵庫県立歴史博物館により管理・運営しております。サイトで使用するテキスト・画像などのコンテンツ全般の著作権は当館に帰属し、無断での複写・転用・転載などを禁止いたします。

ひょうご伝説紀行 妖怪・自然の世界
<http://www.hyogo-c.ed.jp/~rekihaku-bo/historystation/legend3/>

編集発行 兵庫県立歴史博物館
〒670-0012 兵庫県姫路市本町6-8 079-288-9011

第1刷 2009年4月1日

ひょうご伝説紀行
妖怪と自然の世界



明石の大ダコ
三郎左衛門の知恵



沼島女郎
島から妃が流した絵

伝説

明石の大ダコ
三郎左衛門の知恵
沼島女郎
島から妃が流した絵

紀行

海からやってくるもの
・明石の蛸
・沼島を訪ねる

関連情報

用語解説
参考書籍
所在地リスト

伝説

明石の大ダコ 三郎左衛門の知恵

むかしむかし、明石（あかし）の西、林崎（はやしざき）の岸崎（きさき）というところに、西窓后（せいそうこう）・東窓后（とうそうこう）という二人のお后（きさき）が住んでいました。

そのころ明石の海には、足の長さが八キロメートルから十二キロメートルもあるという、とてつもなく大きなタコが住みついていた。この大ダコは、美しいお后たちに目をつけ、何とかして海に引っぱりこんでしまおうと、岸崎近くの海辺をうろつくようになりまし。お后たちは、とてもおそろしくて、毎日じっと家の中に閉じこもるようになってしまいました。

近くの二見浦（ふたみがうら）に、浮須三郎左衛門（うきすさぶろうざえもん）という強い武士がいました。三郎左衛門は、この話を聞いて、「にくい大ダコめ。おれが退治してやる。」と決意しました。しかし、相手はおそろしく大きなタコ、太い足をふりまわされてはとてもかないそうもありません。何か作戦をたてなくてはいけないと、三郎左衛門は知恵（ちえ）をしぼりました。

そうして思いついたのが、タコツボでした。タコは、ふだんはタイなどの天敵から身を守るために、岩場のすき間にもぐりこんで生活しているので、壺（つぼ）のような狭いところを見つけるとそこに入ってじっとしてしまふ性質があります。これを利用したのが、現在も行われているタコツボ漁なのです。三郎左衛門は、大ダコ用に特別大きな壺を作って、海にしかけました。

ねらいは見事にあって、大ダコはこのタコツボでのんびりしているところを陸に引き上げられ、生けどられてしまいました。でも、それからが大変でした。大ダコは必死で足をのばして壺からはい出ようとものがきました。三郎左衛門は、暴れまわる大ダコの足を、一本一本刀で切り落としていきました。大ダコはますます暴れて、とうとうタコツボをひっくり返してしまいました。

大ダコは、タコツボをひっくり返すと、すばやく山伏（やまぶし）の姿に身を変え、ものすごい早さで北へと逃げだしました。逃がしてなるものかと三郎左衛門も必死で追いかけます。ついに林崎の林神社のあたりで追いつめ、山伏をみごと四つにたたき切りました。

切られた大ダコは、そのまま大きな石になってしまいました。都の天皇はたいそうよろこんで、三郎左衛門にたくさんのほうびと、「源時正（みなもとのときまさ）」という名前を与えたということです。

（『郷土の民話』東播編をもとに作成）

伝説

沼島女郎 島から妃が流した絵

今から700年近く前、後醍醐天皇（ごだいごてんのう）が鎌倉幕府（かまくらばくふ）をたおそうと、戦いをはじめていたころの話です。西風が吹きつけるある朝、淡路島（あわじしま）の南にうかぶ沼島（ぬしま）の水の浦（みずのうら）の浜辺に、小舟が流れつきました。漁師たちが船の中を見ると、十二単（じゅうにひとえ）を身にまとった、見たこともないような美しい女性が倒れていました。

漁師たちはおどろいてみなで助けおこしました。女性は、ぼつりぼつりと自分の身の上を語りはじめました。

「私は都の後醍醐天皇の皇子（おうじ）である尊良親王（たかよししんのう）の妃（きさき）です。いくさがあって、尊良親王が土佐国（とさのくに＝現在の高知県）に移される罰（ばつ）を受けましたので、私も後を追って土佐に行くところでした。」

土佐に移された尊良親王は、しばらくしてから家来の秦武文（はたのたけぶん）を送って、都に残してきた妃を呼んだのです。妃はいとしい夫に会う日を楽しみに、大物浦（だいもつうら＝現在の尼崎市）から土佐へと向けて船出することにしました。

ところが、妃が乗ろうとした船は、海賊船だったのです。海賊船の首領は、妃に付きそっていた武文を言葉たくみにだまし、陸に置きざりにして船を出しました。だまされたことに気づいた武文は、小舟に乗って必死で追いかけてましたが、とても追いつけず、ついに海に身を投げ自殺してしまいました。

しかし、海賊船が鳴門（なると）の海峡（かいきょう）に近づくと、にわかにかきくもり、海には大うずがおこって、横なぐりの雷雨（らいう）が吹きすさぶと、船は木の葉のように波にもまれはじめました。そして、荒れくるう海の中に、武文の亡霊（ぼうれい）があらわれたのです。

首領は、「これは海の神のいかりだ。これをしずめるには妃を海に放すしかない。」と考えました。妃は小舟に移され、荒れくるう海に放されました。妃はいつしか気を失ってしまいました。

妃は島の人たちの手厚いもてなしのおかげで、すぐに元気をとりもどしました。しかし、それにつけても思い出されるのは土佐にいる夫のこと。でも、大切にもてなしてくれる島の人々の気持ちを思うと、なかなか土佐に行きたいとは言い出せませんでした。

伝説

沼島女郎 島から妃が流した絵

やがて戦いは収まり、後醍醐天皇が都で新しい政治を始めることになり、土佐の尊良親王も都に帰ることができました。八方手をつくして妃が沼島にいることを知った親王は、すぐに妃をむかえる使者を送りました。

夫との再会を待ちわびる妃はすぐにでも都に帰ろうとしました。ところが、船を出そうとすると、またいつかのように海が荒れ、大風が吹きすさびはじめました。妃をしたう島の人々は口々に、「これは海神のおいかりじゃ。お妃様はやはり島にいてください。」と頼みました。

それでも妃の都に帰る決心はかたく、ふところから紙を取り出すと、自分とは似ても似つかないみにくい女性をえがき、「わたくしの姿はこのようなものですよ。」と海に流しました。すると、大風はぴたりと収まり、もとの静かな海に戻りました。

島の人々は、涙ながらに妃を見送りました。それからというもの、沼島の人々は近くの海でとれるオコゼによく似た魚のことを、「沼島女郎（ぬしまじょろう）」と呼ぶようになったのです。

(『郷土の民話』淡路編、『兵庫の伝説』第一集をもとに作成)

紀行 海からやってくるもの

明石の蛸

明石（あかし）のタコは名産として全国的に有名だが、やはり、明石には大ダコの話が伝わっている。明石市街地の西にある林神社付近がその舞台とされてきた。林神社の西側には現在貴崎（きさき）という地名があるが、ここが二人のお后が住んでいたという岸崎（きさき）にあたるという。また、林神社の東側の町名を立石（たていし）といい、ここの山裾に、大ダコが石になったという場所があって、「立石」と呼ばれている。ただし、現在は石そのものは見あらず、「立石」の下からいつしかわき出ようになった清水の跡とされる古井戸が残されている。また、この大ダコ退治の話は、タコツボ漁の起源の話としても語られてきた。



大ダコ
（『北斎漫画』）

ただし、この話、江戸時代中ごろの地誌『播磨鑑（はりまかがみ）』では、大ダコではなく、大エイを退治する話として載せられている。『播磨鑑』の誤記の可能性もあるが、あるいは明石のタコが名産として有名になるにつれて、主役がエイからタコに交代したのかもしれない。エイの伝説は、「ひょうご伝説紀行 語り継がれる村・人・習俗」の「えいがしま エイと一緒に祈りをする」で紹介したように、明石の西にある江井ヶ島（えいがしま）の由来伝説としても語られている。この地域にとって、古い段階での神聖な魚はタコではなくエイであったのであろうか。



林神社



立石の井



タコに限らず、明石の伝説にはやはり海にかかわるものが多い。紀行文「長寿伝説」で紹介した人魚伝説もその一つである。また、明石という地名も、林崎の西、松江の沖合の海中に赤い岩があったところからついたとされている。松江海岸には由来を記した立て札とともに、鹿の絵が彫られた赤い岩が置かれている。近年の調査で、実際に沖合の海中に赤い石があることが確認されているという。この赤石の由来については、これも「ひょうご伝説紀行 語り継がれる村・人・習俗」の「夢野 夢占いの結末は・・・」で夢野の鹿の話として紹介している。淡路へ渡ろうとして獵師に射殺された牡鹿（おじか）の血が固まったので赤いという話である。



タコツボ
（林崎漁港にて）



現在の
林崎・松江漁港

ただしこの話、「ひょうご伝説紀行 神と仏」の「神の坐す山と神出の里」で取り上げた神戸市西区神出(かんで)の最明寺(さいみょうじ)の縁起では、雄岡山(おっこさん)の男神が、小豆島(しょうどしま=現在の香川県小豆島町)の女性に恋をして、鹿の背に乗って海を渡ろうとしたが猟師に鹿が射殺された、という話としても伝えられている。人々の興味を引く話は、さまざまなバリエーションを生み出しながら広まっていくものなのだろう。伝説は、その時代の人々の関心や、語られる場所、目的によって、少しずつ変わっていく。



林崎の海



松江海岸の赤石



松江の海

沼島を訪ねる

「ひょうご伝説紀行 神と仏」の「古事記とオノコ口島伝説をめぐる」でも紹介した、淡路島の南に浮かぶ沼島(ぬしま)。沼島女郎(ぬしまじょうろ)の話は、この島に伝わった話である。沼島はかつて武島(むしま)とも呼ばれた。そのため、この話の題名も本来は「武島女郎(むしまじょうろ)」ともされていた。



淡路島から見た沼島



沼島の港

沼島の港がある入り江から、西に一つ離れた浜辺がある。現在は埋め立てが進んでかつての面影は失われているというが、ここは「水の浦」と呼ばれ、お妃が流れついたところと伝えられている。現在は削られて失われているが、この水の浦と港との境界にあった大岩を「王岩(おういわ)」と呼んでいたという。この「王岩」から港側へ少し歩いたところに、お妃が濡れた衣を乾かしたという「衣掛け岩(きぬかけいわ)」がある。さらに「衣掛け岩」から少し東には、お妃が腰を掛けたという「腰掛け岩(こしかけいわ)」がある。現在、岩の両側に二つの祠(ほくら)がまつられている。



水の浦



王岩跡(かつてはカーブミラーがある擁壁の前まで岩が突き出していたという)



衣掛け岩



腰掛け岩

また、お妃は、島内の「王寺（おうでら）」と呼ばれるところに住んだとされている。現在、「王寺」と呼ぶ一帯の中には、鎌倉幕府成立期の武将である梶原景時（かじわらかげとき）の墓と伝えられる五輪塔（ごりんとう）がある。南北朝時代以降、沼島には梶原姓を名乗る水軍が拠点置いていた。梶原景時の墓とするのもそこからきた伝承であろう。ただし、五輪塔自体は鎌倉時代中ごろ以前の古い様式で、兵庫県内では最古級である。

また、五輪塔の少し南方には、「沼島庭園」と呼ばれる庭園もある。かつては、戦国時代の戦乱の中で都を離れ、この島に流れてきた室町幕府10代將軍足利義植（あしかがよしなね）の館にともなうものともされてきたが、近年ではそれよりやや新しい江戸時代前半のものとも見られている。庭園の下には、「八角井戸」と呼ぶ井戸もあり、漂着したお妃を手当てするための水が汲まれた井戸と伝えられている。また、この「王寺」からやや東へ行った山裾には、「王流院（おうりゅういん）」との山号を持つ西光寺（さいこうじ）があり、お妃の屋敷跡に由来するお寺と伝えている。

さて、沼島女郎の話は、南北朝時代に入る直前、元弘の変（げんこうのへん）の時期に設定された話である。元弘の変とは、後醍醐天皇（ごだいごてんのう）が鎌倉幕府を倒そうと画策した事件で、この時は後醍醐が敗れて隠岐国（おきのくに＝現在の島根県隠岐諸島）に流罪となる。この伝説の骨組みとなる部分は、南北朝の内乱を描いた軍記物語『太平記（たいへいき）』巻第18に、「一宮御息所事（いちのみやみやすどころのこと）」としてすでに記述されている。

しかし、『太平記』に記されているからといって、必ずしも事実とは限らない。事実としては、尊良親王（たかよししんのう）が土佐国（とさのくに＝現在の高知県）に流された時点で、この話のお妃に相当する女性（今出川公顕娘＝いまでがわきんあきのむすめ）はすでに亡くなっていたとされており、やはりこの話自体は虚構のようである。この話は、『平家物語』の中のエピソードをもとに創作されたものと考えられている。

しかし、こうした話が生み出される背景には、沼島が当時本州と四国方面を結ぶ海上交通の要地で、風待ち、潮待ちの港として、古くから数多くの船や人々が行き交う島だったことがある。南北朝時代から戦国時代にかけては、先に触れた梶原氏のほかに、安宅（あたぎ、「あたか」とも言う）氏などの有力な水軍が沼島に拠点を置いており、淡路・紀伊・阿波の紀淡海峡周辺に勢力を広げていた。



伝梶原景時五輪塔



八角井戸

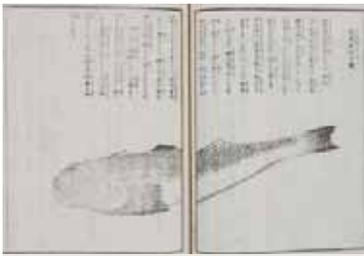


西光寺

京都を中心に活動していた『太平記』執筆者も、こうした沼島に関する知識をもとに、都と土佐を結ぶ航路上の舞台として沼島を選び、この話を作り出したのであろう。『太平記』は、琵琶法師（びわほうし）が語る『平家物語』と同様に、「太平記読み」と呼ばれる遍歴の芸能者によって全国的に語り伝えられてきた。いつの時点かは定かではないが、こうした人々の活動によって、沼島でもこの話が語り継がれるようになっていったのではないだろうか。



沼島八幡神社から見た淡路島



沼島女郎(『淡路国名所図絵』)

そして、こうした話が現地に定着していく上でも、沼島が海上交通の拠点であったことが大きな役割を果たしたのだろう。「海から、いままで見たことのないような高貴な人がやってきたときの驚きが、この伝説の根っこになっているのではないか。」島を案内してくださった神宮寺（じんぐうじ）住職の中川宜昭師はそうおっしゃっていた。海上交通の要衝であった沼島には、時折、普段は会うこともないような高貴な人がやってくるのが実際にあったのではないか。そうした時に島の人々が抱いた印象の記憶が、やがてこの話を自分たちの地域の伝説として受け止めさせ、さらに魚の由来をも付け加えて語り継がせるようになっていったのだろう。

この伝説は、中央の世界で作り上げられた伝説が、地域の中でも受け入れられ、地域に合わせたアレンジを加えながら語り継がれてきた例といえる。紀行文「犬と人」で紹介した猿神退治などの忠犬物語や、紀行文「岩と樹木」で紹介した「おりゅう柳」伝説と同様である。

用語解説

【『播磨鑑』】はりまかがみ

宝暦12（1762）年ごろに成立した播磨の地理書。著者は、播磨国印南郡平津村（はりまのくにいなみぐんひらつむら＝現在の加古川市米田町平津）の医者であった平野庸脩（ひらのつねなが、ひらのようしゅう）。享保4（1719）年ごろから執筆が始められ、一旦完成して姫路藩に提出した宝暦12年以降にも補訂作業が進められた。著者の40年以上にわたる長期の調査・執筆活動の成果である。活字化されたものは、播磨史籍刊行会校訂『地志 播磨鑑』（播磨史籍刊行会、1958年）がある。

【梶原景時】かじわらかげとき

？ 1200。相模国（さがみのくに＝現在の神奈川県）の武士。治承4（1180）年の源頼朝（みなもとのよりとも）挙兵のとき、平家方として戦ったが、石橋山の合戦後、洞窟に隠れていた頼朝を見逃し、後に頼朝に重用されるようになったとされる。

頼朝が弟の範頼（のりより）、義経（よしつね）を派遣して源義仲（みなもとのよしなか）や平家との戦いを進めると、軍勢の一員として派遣された。元暦2（1185）年、四国へ向けて渡海しようとした時に義経と論争を起こしたとされ、また平家滅亡後、義経を頼朝に讒言（ざんげん）し、その結果頼朝と義経の中が断絶したとされるなど、義経との不和が語られてきた。ただしその一方で、一の谷の合戦では子息の景季（かげすえ）を救うために、再度敵中へ突撃したなどの美談も語られている。

頼朝が没した直後の正治元（1199）年、新将軍頼家（よりいえ）に、結城朝光（ゆうきともみつ）が謀反を企てていると讒言したが、逆に有力御家人66人連名の弾劾文を出され失脚した。翌年1月、謀反を企てて京都に向かったが、駿河国で現地の武士に阻まれ、討ち死にした。

【五輪塔】ごりんとう

供養塔、墓塔として造られることが多かった仏塔の一種。石製のものが多く残る。下から順に、基礎にあたる方形の地輪（ちりん）、円形の水輪（すいりん）、笠形の火輪（かりん）、半球形の風輪（ふうりん）、宝珠形（ほうしゅがた）の空輪（くうりん）の五段に積み、古代インドで宇宙の構成要素と考えられていた、地、水、火、風、空（五大、ごだい）をあらわす。密教の影響が強く、石塔としては平安時代末期からの遺品が知られている。

用語解説

【足利義植】あしかがよしたね

1466 1523。室町幕府10代将軍。初めの名は義材（よしき）、ついで明応7（1498）年に義尹（よしただ）、さらに永正10（1513）年に義植（よしたね）と改名した。延徳2（1490）年に将軍となり、近江国（おうみのくに＝現在の滋賀県）の六角（ろっかく）氏、河内国（かわちのくに＝現在の大阪府東部）の畠山（はたけやま）氏の討伐を進めたが、明応2（1493）年、管領（かんれい）細川政元（ほそかわまさもと）のクーデターによって将軍職を失った。

その後越中国（えっちゅうのくに＝現在の富山県）に移って畠山氏を頼って京都奪回を目指すが失敗。ついで周防国山口（すおうのくにやまぐち＝現在の山口県山口市）の大内義興（おおうちよしおき）を頼り、細川氏の分裂に乗じて永正5（1508）年に大内義興・細川高国（ほそかわたかくに）とともに京都に復帰し将軍職に返り咲いた。

しかし、自らを擁立した細川高国、大内義興の専横に不満を持ち、永正10年に京都を出奔して近江国甲賀（こうか＝現在の滋賀県甲賀市）に移る。この時は大内義興の譲歩により帰京するが、大永元（1521）年に再び細川高国と不和となり淡路国に出奔、将軍職を失った。その後阿波国（あわのくに＝現在の徳島県）へ移り、大永3（1523）年に没した。

【後醍醐天皇】ごだいごてんのう

1288 1339。文保2（1318）年即位。元亨元（1321）年に父後宇多法皇の院政が停止され、以後親政を行う。正中元（1324）年、後醍醐の倒幕計画が発覚し、側近の日野資朝（ひのすけとも）らが処罰される（正中の変）。さらに元弘元（1331）年、再度の倒幕計画が発覚したため、京都を脱出し笠置山（かさぎやま）に立てこもるが、幕府軍に敗れた。幕府方は光厳天皇を即位させ、後醍醐は隠岐国（おきのくに＝現在の島根県隠岐諸島）に流罪（るざい）となった。

しかし、元弘3/正慶2（1333）年、後醍醐は隠岐を脱出、このころ近畿周辺で活動していた護良親王（もりよししんのう）、赤松円心（あかまつえんしん）、楠木正成（くすのきまさしげ）らの勢力に、討伐のために幕府から派遣されていた足利高氏（あしかがたかうじ）らの有力御家人も加わり、5月に六波羅探題（ろくはらたんだい）を攻略、同じころ関東でも新田義貞（にったよしさだ）が鎌倉を攻略し、鎌倉幕府は滅亡した。

帰京した後醍醐は建武の新政を始めるが、天皇専制を目指す性急な改革は社会の反発を招き、建武2（1335）年、鎌倉北条氏の残党蜂起（中先代の乱）の鎮圧のために東国へ向かった足利尊氏が、鎌倉で後醍醐から離反を明らかにしたことで崩壊した。後醍醐方は一旦は尊氏を破るが、九州へ落ち延びた尊氏方は勢力を盛り返し、建武3（1336）年5月の湊川（みなとがわ＝現在の神戸市兵庫区）の戦いに勝利し、ついで京都を占領した。後醍醐は比叡山（ひえいざん）に立てこもり抗戦するが、足利方の勤めによって三種の神器を引き渡して和議を結ぶ。足利方は、光厳上皇の院政のもと、光明天皇（こうみょうてんのう）を即位させ、尊氏は建武式目（けんむしきもく）を定めて室町幕府を開いた。

しかしその直後、後醍醐は大和国吉野（やまとのくによしの＝現在の奈良県吉野町）に脱出して朝廷を開いた。これ以後、京都の朝廷（北朝）と、吉野の朝廷（南朝）が並立しての抗争が続く。後醍醐は、皇子や重臣たちを全国各地へと送り、北朝方に対抗させた。しかし劣勢が続く中、暦応2/延元4（1339）年に病により吉野で死去した。

用語解説

【『太平記』】たいへいき

南北朝内乱を描いた軍記物。後醍醐天皇（ごだいごてんのう）による倒幕計画から始まり、幼い足利義満（あしかがよしみつ）の補佐役に細川頼之（ほそかわよりゆき）が就任するころまでを描く。

南北朝時代後半までに、室町幕府による校閲を含めて、何段階かの書き継ぎ、改訂を経て成立していったと見られている。作者は「小嶋法師（こじまほうし）」とする史料があるが、その実像についてはよくわからず、また何段階かの書き継ぎがあったとすれば複数の作者を想定する必要があるが、その他の作者についてもよくわかっていない。

【尊良親王】たかよししんのう

? 1337。後醍醐天皇の第一皇子。元弘元（1331）年に父天皇が鎌倉幕府打倒の兵を挙げると、それにしたがって笠置山に立てこもり、ついで楠木正成の河内の居城へ移った。しかし、10月に捕らえられて土佐国幡多（とさのくにはた = 現在の高知県中村市付近）へ流罪（るざい）となった。

建武の新政が始まると帰京したが、建武3（1336）年に反旗を翻した足利尊氏（あしかがたかうじ）が京都を攻め落とすと、弟の皇太子恒良親王（つねよししんのう）、新田義貞（にったよしさだ）とともに越前国（えちぜんのかくに = 現在の福井県東部）に下り、金ヶ崎城（かねがさきじょう = 現在の福井県敦賀市）に入った。しかし、翌年3月、足利方の攻撃によって金ヶ崎城は落城、両親王も自害した。

なお、名前の読みについては、「たかなが」とも読まれてきている。この点については、本用語解説の「大塔宮護良親王（おおとうのみやもりよししんのう）」の項目を参照されたい。

【『平家物語』】へいけものがたり

鎌倉時代前半に成立した軍記物語。平家の興隆と滅亡を、仏教的な無常観を底流に置きながら記した書物。著者については、天台座主慈円（てんだいざすじえん）の周辺の人物が執筆したとの説などが注目されているが、確定的な説はない。『保元物語（ほうげんものがたり）』、『平治物語（へいじものがたり）』、『承久記（じょうきゅうき）』とともに、「四部合戦状（しぶかつせんじょう）」とも称される。これらの書物は、一定の事実を示す史料や当事者の証言なども参照しながら執筆されたと考えられている。したがって、記述の中の事実を記す部分と物語的な創作の部分との区別は、それぞれについて吟味する必要がある。

参考書籍

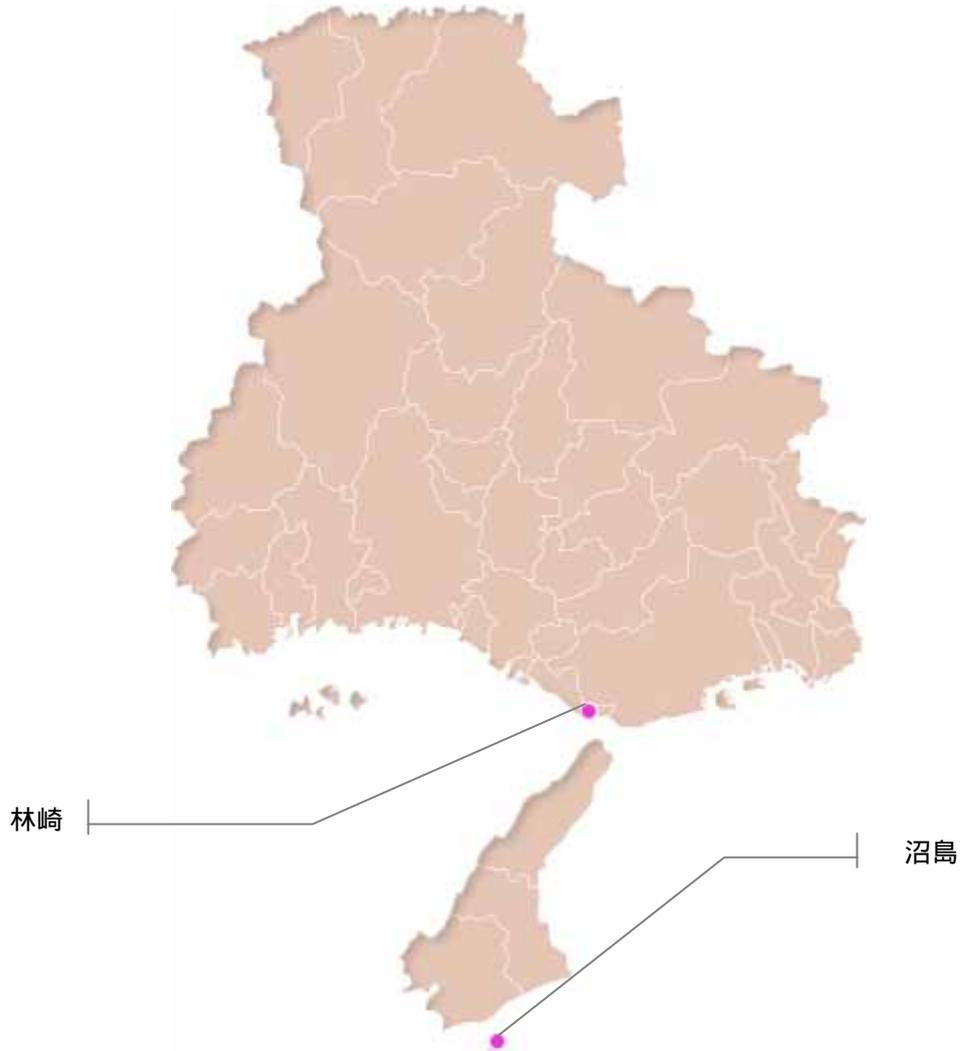
伝説の参考書籍

書籍名	刊行年	著者名	発行者
日本伝説 明石の巻	1918 (1978復刻)	編著: 藤沢衛彦	日本伝説叢書刊行会
兵庫の民話(日本の民話 25)	1960	編集: 宮崎修二郎、徳山静子	未来社
郷土の民話 東播編	1972	編集: "郷土の民話"東播地区編集委員会	兵庫県学校厚生会
郷土の民話 淡路編	1972	編集: "郷土の民話"淡路地区編集委員会	兵庫県学校厚生会
兵庫の伝説	1980	編著: 兵庫県小学校国語教育連盟	日本標準
むかしばなし南淡	1981	編集: 南淡町教育委員会	南淡町教育委員会
兵庫の伝説 1	1981	編集: 有井基、絵: のざきジョー	神文書院
日本伝説大系 8 北近畿編	1988	編集: 福田晃	みずうみ書房

歴史・文化の参考書籍

書籍名	刊行年	著者名	発行者
太平記 2(日本古典文学大系35)	1961	校注: 後藤丹治, 釜田喜三郎	岩波書店
播磨鑑	1958	著者: 平野庸修、校訂: 播磨史籍刊行会	播磨史籍刊行会
淡路国名所図絵	1894 (影印版1995)	暁鐘成	臨川書店(影印版)
太平記の研究	1938 (1973復刊)	後藤丹治	河出書房(復刊: 大学堂書店)
伝説の兵庫県	1961 (2000再刊)	西谷勝也	神戸新聞総合出版センター(再刊)
沼島物語	1970	編集: 沼島壮年会	沼島壮年会
沼島 沼島地区民俗資料緊急調査報告書	1971	編集: 兵庫県教育委員会文化課	兵庫県教育委員会
日本の伝説 43 兵庫の伝説	1980	宮崎修二郎、足立巻一	角川書店
明石の昔話	2007	八瀬久	友月書房

所在地リスト



林崎	明石市立石、林、ほか
沼島	南あわじ市沼島

ひょうご歴史ステーション「ひょうご伝説紀行」は、兵庫県立歴史博物館により管理・運営しております。サイトで使用するテキスト・画像などのコンテンツ全般の著作権は当館に帰属し、無断での複写・転用・転載などを禁止いたします。

ひょうご伝説紀行 妖怪・自然の世界
<http://www.hyogo-c.ed.jp/~rekihaku-bo/historystation/legend3/>

編集発行 兵庫県立歴史博物館
〒670-0012 兵庫県姫路市本町6-8 079-288-9011

第1刷 2009年4月1日

ひょうご伝説紀行
妖怪と自然の世界



益気の八十橋
天まで届く岩の段



おりゅう柳
柳の精との悲しい恋

伝説

益気の八十橋
天まで届く岩の段
おりゅう柳
柳の精との悲しい恋

紀行

岩と樹木
・岩石信仰
・峰相山の亀岩
・檀特山頂の岩
・「おりゅう柳」伝説

関連情報

用語解説
参考書籍
所在地リスト

伝説

益気の八十橋 天まで届く岩の段

加古川市平荘町池尻（かがわしへいそうちょういけじり）に、升田山（ますだやま）と呼ばれる山があります。この山の東面には、「益気の八十橋（やけのやそはし）」と呼ばれる岩場があります。奈良時代には、このあたりは「益気の里」と呼ばれていたため、こうした名前がついているのです。

益気の八十橋は、下から見あげると、岩が階段のように連なっていて、まるで天に登っていく階段のように見えます。古代の人々はこの岩場を、たくさんの神々が天上と地上とを行き来する階段だと考えました。この話は、奈良時代の初めに編集された『播磨国風土記（はりまのくにふどき）』という書物にのせられていて、つぎのように記されています。

益気の里には石の橋がある。むかしむかし、この橋は天まで届いていて、たくさんの人々が登ったり、降ったりして、天上と地上とを行ったり来たりしていた。それで、「たくさん」という意味の「八十（やそ）」を付けて、「八十橋」と言うのである。

なお、ここでは「八十橋」と書かれていますが、『播磨国風土記』のころは、階段のことも「橋」と呼んでいました。

（『郷土の民話』東播編をもとに作成）

伝説

おりゅう柳 柳の精との悲しい恋

むかしむかし、今の養父市高柳（やぶしたかやなぎ）の北の山に一本の大きな柳の木がありました。もう何百年もそこに立っているような、とても大きな木でした。

山の北側にある九鹿（くろく）には、おりゅうという近所でも評判のきれいな娘がいました。おりゅうは高柳の造り酒屋へつとめに通っていて、その行き帰り、いつも決まってこの大きな柳の下でひと休みをし、長い髪（かみ）をとかしなおしていたのでした。

ある日のこと、いつものように髪をとかしていたおりゅうは、ふと人の気配を感じて顔をあげました。そこには若い侍（さむらい）が立っていて、おりゅうにほほえみかけていました。その日から、二人はこの柳の下で毎日出会うようになりました。楽しげな二人の様子は、いつしか村の人々のうわさにもなっていました。

ところがそのころ、都で三十三間（さんじゅうさんげん）のお堂を建てるために、材木を諸国から集めるとのうわさが流れ、まもなく、この柳の大木を切り出すようにとの命令が届きました。その日から柳の大木は、風もないのに枝をふりみだし、ごうごうと大きな音をたてて鳴りひびくようになりました。

やがて、国の役所から大勢の人々が村に着き、柳の切り出しをはじめました。しかし、斧（おの）を入れたはずの切り口が、次の日になるといつの間にかふさがっていて、仕事は一向にはかどりません。おかしいと思った人々が、夜通し柳を見はっていると、切りくずがひとりでに飛んでいって、切り口をもと通りにうめてしまっていたことがわかりました。

そこで人々は、次の日から夜になる前に、切りくずを焼いてしまうようにしました。それから仕事ははかどり、とうとう数日後に柳は切りたおされました。それに合わせるように、おりゅうも体調をくずしていきました。

切りたおされた柳を都まで運ぶために、また大勢の人々がやってきて、柳を引きはじめました。しかし、いくら人数を増やして引いても、柳はびくとも動きませんでした。困った人々は村の長老に相談しました。すると長老は、「おりゅうを呼んでくれば、動くかもしれない。」と言いました。

呼ばれてやってきたおりゅうは、病みつかれた姿で、そっとやさしく柳の木はだをなでました。すると柳は静かに坂を降りをはじめました。おりゅうが毎日会っていた若い侍は、この大きな柳の精霊（せいれい）だったのです。

（『兵庫の伝説』第一集をもとに作成）

紀行 岩と樹木

岩石信仰

古来、日本人は岩を信仰する感覚を持っていた。全国各地で、山肌に露出した岩盤を信仰の対象としているところは数多い。県域でも、たとえば播磨一宮伊和神社は山自体がご神体である。こうした信仰の対象となっている岩盤を、一般的には「盤座（いわくら）」と呼んでいる。ここでは、そうした岩にまつわる話をいくつか紹介しよう。



益気の八十橋



岩盤

益気（やけ）の八十橋（やそはし）は、『播磨国風土記』で神々が天上と地上を行き交う階段であったと記されている岩場である。八十橋の加古川対岸には、「ひょうご伝説紀行 語り継がれる村・人・習俗」の「禊墓と加古川下流の風景」でも紹介した日岡山（ひおかやま）がある。

南北朝時代に著された『峰相記（みねあいき）』には、竜山（たつやま）の生石（おうしこ）の女神と高御位山（たかみくらやま）の男神は夫婦であったが、男神が日向からやってきた女神を見初めて通いつめるようになったため、嫉妬した女神は加古川の対岸の日岡山に移り住んだ、という伝説が載せられている。古代のこの地域の人々は、こうした神々が天上と地上を行き来すると考えていたのだろう。



中腹の祠



祠から見た日岡山



加古川市街地方面



髯崎の屏風岩

同じような話は、たつの市新宮町にある「髯崎（はしさき）の屏風岩（びょうぶいわ）」についても記されている。これは、『風土記』では「御橋山（みはしやま）」と呼ばれ、大汝命（おおなむちのみこと）が米俵を積んで橋を建てたので、御橋山と名付けた、との由来が記されている。

この屏風岩は、岩の割れ目に入り込んだマグマが冷えて固まった「岩脈（がんみゃく）」と呼ばれるもので、国の天然記念物にもなっている。ここでは流紋岩ガラス質軽石凝灰岩（りゅうもんがらがらすしつかるいしぎょうかいがん）の中に石英安山岩（せきえいあんざんがん）の岩脈が入り込んでいる。岩脈の部分が周辺の岩石より固いため、風雨に削り残されて露出してできあがったものである。

峰相山の亀岩

紀行文「姫山の地主神」でも紹介した『峰相記』の舞台となった峰相山にも、岩にまつわる伝説がある。山頂から西南にのびる尾根筋に「亀岩（かめいわ）」と呼ばれる巨岩がある。『峰相記』によれば、この岩には割れ目に水がたまっていて、崇神天皇（すじんてんのう）13年という大昔、この岩の上に香稻が4本生えた。朝廷はこの種子を全国に配るよう命じ、当時の香稻はすべてこの種子がもとになっている、という。そして、これをまつたのが、峰相山の鎮守の第一であった稲根明神（いなねみょうじん）である、とされている。なお、崇神天皇13年とは、『日本書紀』の記述を西暦にあてはめると紀元前85年になるが、あてにならない。

亀岩に登ると、たしかに岩の小さなくぼみに水がたまっていた。また、いくつかのくぼみにはススキがしっかりと根を下ろしていた。岩の上には三角形の小さな岩がまつられている。『峰相記』には、当初はこの岩に稲根明神の社殿を建てたとされている。この記述を意識した誰かが置いたものであるだろうか。

稲根明神は、現在は稲荷神社として峰相山の南麓、姫路市石倉（いしくら）にまつられている。境内には鞍状の形をした岩である「石の鞍（くら）」がまつられており、「石倉」という地区名の由来となっている。こちらも岩石信仰である。

檀特山頂の岩

もうひとつだけ岩の話を紹介しておこう。太子町には檀特山（だんとくさん）という山があり、山頂にたくさんのくぼみがついた岩が露出している。登った人が必ず目をとめたであろうこの岩には、二通りの由来伝説がある。

ひとつは『播磨国風土記（はりまのくにふどき）』のもので、岩上のくぼみは、大昔、応神天皇（おうじんてんのう）がこの山頂から国見（くにみ）をしたときの杖の跡であるとするものである。しかし、この伝説は中世に変容する。



石倉 稲荷神社



石ノ鞍



亀岩遠景



亀岩の上



亀岩から南を望む



檀特山頂の岩



南を望む



西を望む

中世になると、檀特山の西北側一帯は、奈良の法隆寺（ほうりゅうじ）の領地である鵜荘（いかるがのしょう）という荘園になっていた。鎌倉末期に描かれた鵜荘絵図（法隆寺蔵）では、この山頂に「黒小馬蹄跡（くろこうまひづめあと）」、「小馬縹松（こうまつなぎのみつ）」と記されている。「黒小馬」とは、一般的な聖徳太子（しょうとくたいし）伝説で、太子の乗馬として登場する「甲斐（かい=現在の山梨県）の黒駒」のことである。つまりこの絵図では、檀特山頂の岩のくぼみは、法隆寺を建立した聖徳太子が領地の視察をした際の、乗馬の蹄の跡ということになっているのである。

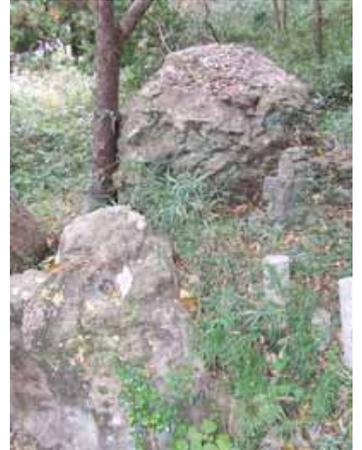
檀特山と聖徳太子の話は『峰相記』にも記されている。ここでは、鵜荘は聖徳太子が推古天皇（すいこてんのう）から与えられたものとされていて、現地を視察した聖徳太子が、荘園の四方に境界を示す石を埋め、檀特山に登って松に馬をつないだなどと記されている。

このように、檀特山頂の岩の由来は、奈良時代初めの『風土記』では応神天皇の杖跡と言われ、この地域が法隆寺の荘園となっていた中世になると、聖徳太子の乗馬の蹄跡とされるようになっていた。時代によって伝説が変化していくことが、確実な史料によって裏付けられる事例である。

このほか、檀特山の麓の矢田部には、聖徳太子の説法に感動して、ひとりでに転がり落ちたとされる岩がある。この岩は、「太子の感動岩」と呼ばれている。

さらに周辺の鵜荘域には、この山から聖徳太子が投げた（あるいは手のひらの上からはじいた）という「太子の投げ石（はじき石）」伝説が伝わっている。この話は、中世鵜荘の境界を示す「ぼう示石（ぼうじいし）」（ ）と結びつけて解釈されたこともあった。『峰相記』では、聖徳太子が四方の境界にぼう示石を埋めたと記され、鵜荘絵図では、境界上の主要な箇所にはぼう示石と見られる印が付けられている。中世のころ、荘域の境界を示す石が設置されていたことはたしかだ。

（ ）「ぼう示石」は、正しくは「榜示石」と表記しますが、インターネット上では正しく表示されない可能性があるため、ひらがなで表記しています。



矢田部の太子の感動岩



佐用岡平方の太子の投げ石

しかし残念ながら、現在この地域で伝えられている「投げ石」は、そのほとんどが鵜荘の境界とは一致しない。どうやら中世のぼう示石と、現在の「太子の投げ石」は別のものである。ただし、両者はともに聖徳太子伝説と結びつけられている。

檀特山頂の岩の由来が、応神天皇から聖徳太子に代わっていった背景には、中世にこの付近が法隆寺の荘園となっていたことがある。法隆寺側の人物が、この荘園を上手に治めるために、聖徳太子の伝説を編み出し、地域に定着させていったと考えられるのである。

「投げ石」は動かすとなたりがある、と伝えられ、近年まで田んぼの真ん中やあぜ道などで人々に見守られて残されてきた。たしかに、「投げ石」の中には、奇妙な文様らしき刻み目があるものもあれば、田んぼの中にぽつりと立っているものもあって、何かいわくがあると思わせるものが多い。冒頭に記したように、日本人には岩を見ると信仰する気持ちを持っていた。そうした気持ちと、荘園領主である法隆寺がもたらした聖徳太子信仰とが結びついて、今日まで伝説として残されたのであろう。



鵜北山根の太子の投げ石



林神東南の太子の投げ石社

「おりゅう柳」伝説

つぎに、樹木にまつわる伝説を紹介しよう。但馬に伝わる悲しい恋の物語が「おりゅう柳」伝説である。柳の巨木が立っていたというトガ山の「池の沢」、おりゅうが住んでいたという九鹿（くろく）、また勤めに通っていたという酒屋のある高柳など、伝説に登場する舞台の配置は、現地の実地の位置関係と矛盾なく理解できる。なお、話者によっては、おりゅうは高柳から九鹿の谷にあった提灯屋、もしくは酒屋に通っていたとする話も語られている。



池の沢 おりゅう柳跡

この地域でこの話が語られていたことを示す古い史料としては、享保12（1727）年の高柳高照寺の縁書がある。この『高照寺縁書』には、柳を見送った後のおりゅうに関する伝説も記されている。その後のおりゅうは髪をおろして尼僧（にそう）となり、各地を勧進（かんじん）してまわって橋を架けたといい、九鹿の谷をさかのぼった今井（いまい）にある橋がそれであるという。また、今井にまつられている観音菩薩は、信心が強く尼僧としての務めに励んだ、おりゅうその人の姿であるとされている。



高柳の集落と旧山陰道

おりゅう柳伝説は、但馬各地でも高柳周辺を舞台とした話として伝えられている。地域に深く根を下ろした伝説と言える。しかし、人間と恋仲になっていた柳の木が、三十三間堂の棟木として伐採されてしまうという、おりゅう柳とよく似た話は、北は宮城県から南は佐賀県まで、全国的に数多く見られることも指摘されている。ただし、全国的に見ると、柳の精霊が女性で、人間の男性と恋をするという話が多く、おりゅう柳とは、主役の男女が逆であるものが一般的である。



九鹿からトガ山を望む

これらの話は、江戸時代前半の古浄瑠璃（こじょうり）、『熊野権現開帳（くまのこんげんかいちょう）』がもとになっているとされている。『熊野権現開帳』はその後、宝暦10（1760）年大坂豊竹座初演の『祇園女御九重錦（ぎおんにようごこのえにしき）』へと改作されて現在に伝わっている。これらの浄瑠璃作品でも、柳の精霊が女性で、人間の男性と契りを交わす話となっている。

ところで、この浄瑠璃をめぐる比較的多くの研究があり、その源流については、鎌倉後期の公家日記の中に書かれていた説話までさかのぼることが明らかになっている。



九鹿の集落

その説話とは、三十三間堂を建立した後白河法皇（ごしらかわほうおう）が、熊野本宮（くまのほんぐう、和歌山県田辺市）に参詣した際、自らの前世は熊野本宮の僧侶蓮華房（れんげぼう）でありその遺骨が滝尻にある、との夢のお告げを受け、その通りに遺骨が見つかったので都に帰って三十三間堂を建立した、というものである。これが永享12（1440）年の仏教書『五重聞書』では、蓮華房の髑髏（どくろ）に柳が刺さっていた、という話に変わり、柳が登場するようになる。ここから江戸時代前半の『熊野権現開帳』へと展開していくとされている。

そして、『熊野権現開帳』以降に話の主題となっていく、柳の精霊と人間との結婚話にも、もとになった中国の古典があるという。中国元代（13世紀中ごろ～14世紀中ごろ）の歌劇である元雜劇（げんざつげき）の中に、『岳陽楼（がくようろう）』およびその改作である『城南柳（じょうなんやなぎ）』という2つの作品がある。そこには、柳などの樹木の精霊が人間となり、仙人の導きによって昇仙するまでが描かれていて、『熊野権現開帳』に見られる、柳の精霊と人間との結婚という筋書きは、これらの作品をもとに発展させたものではないかと指摘されているのである。

おりゅう柳は、おそらく地方回りの語り物の上演などを通して、江戸時代の中ごろから但馬養父に地域の伝説として定着していったのであろう。そして、この話を伝える古い史料が寺院縁起であるということは、物語のこの地域への定着に、地域の宗教者がかかわっていたことを示唆している。なお、この寺院縁起は享保12（1727）年のもので、『祇園女御九重錦』の初演（1760年）よりは古いので、話はそれ以前に但馬に伝わっていたことになる。

但馬のおりゅう柳伝説に登場する舞台は、現地の実際の状況と矛盾なく配置されており、『熊野権現開帳』や『祇園女御九重錦』などの中央の浄瑠璃作品と比べて、主役の男女が入れかわっている。主役の男女入れかえが但馬の独自性かどうかは、今後なお類話を収集するなどして検討していく必要があるが、いずれにしても、この伝説は、中央で創造された演劇作品に、地域の宗教者が若干のアレンジを加えることで、地域に定着するようになったものと見てよいだろう。

このように、おりゅう柳にも、ほかの伝説の中にも見られたように、全国的によく知られていた原話があった。よくできた話にはこうしたことも多いようだ。そして、紀行文「犬と人」の猿神退治伝説や犬寺伝説と同様に、その原話をたどっていくと、ついに中国までたどりついた。紀行文「河童」で紹介した河童は、遠くギリシャ神話とも共通性があるという。説話・伝説の世界は、しばしば海を越えて広がっていく。



今井の集落



今井橋



八柱神社境内の観音堂

用語解説

【『播磨国風土記』】はりまのくにふどき

律令国家（りつりょうこっか）の命令によって編纂された古代播磨の地理書。霊亀元（715）年前後に編纂されたものと見られている。現存するものは、三条西家（さんじょうにしけ）に所蔵されていた古写本で、巻首の赤石（明石＝あかし）郡の全部、賀古（加古＝かこ）郡冒頭の一部と、巻末の赤穂郡（あこうぐん）の全部の記載が欠落している。活字化されたものは、日本古典文学大系新装版『風土記』（秋本吉郎校注、岩波書店、1993年）のほか、全文を読み下した、東洋文庫145『風土記』（吉野裕訳、平凡社、1969年）などがある。

【流紋岩】りゅうもんがん

火成岩のうち、マグマが急激に冷えて固まった火山岩の一種。成分のうち二酸化ケイ素が70パーセント以上のものをいう。

【軽石凝灰岩】かるいしぎょうかいがん

凝灰岩とは、火山灰が堆積してできた岩石。そのうち、軽石を主な構成物質とするものを軽石凝灰岩と呼ぶ。そのもとになる成分は、流紋岩質か安山岩質となる。

【石英安山岩】せきえいあんざんがん

火成岩のうち、マグマが急激に冷えて固まった火山岩の一種。二酸化ケイ素が63～70パーセントのもので、「デイサイト」ともいう。

【『峰相記』】みねあいき

峰相山鶏足寺（みねあいさんけいそくじ＝現在の姫路市石倉の峰相山山頂付近にあった寺）の僧侶が著した中世播磨の宗教・地理・歴史を記した書物。原本は本文冒頭の記述から貞和4（1348）年ごろに成立したと考えられる。現存する最善本は揖保郡太子町（いぼぐんたいしちょう）の斑鳩寺（いかるがでら）に伝わる写本で、奥書から永正8（1511）年2月7日に書写山別院（しょしゃざんべついでん）の定願寺（じょうがんじ）で写されたものであることがわかる。活字化されたものは、『兵庫県史』史料編中世4（兵庫県史編集専門委員会、1989年）や、全文口語訳をした、西川卓男『口語訳『峰相記』 中世の播磨を読む』（播磨学研究所、2002年）などがある。

【崇神天皇】すじんてんのう

『古事記』・『日本書紀』の神話では第10代の天皇とされる。実在の可能性が指摘されている最も古い代の天皇でもある。

用語解説

【応神天皇】おうじんてんのう

『古事記(こじき)』・『日本書紀(にほんしょき)』の神話では第15代の天皇とされる。母の神功皇后(じんぐうこうごう)が朝鮮半島に出兵したときは、母の胎内にあり、帰国後筑紫(つくし=現在の福岡県付近)で生まれたと記される。また、朝鮮半島からの論語(ろんご)・千字文(せんじもん)の伝来なども応神代の記事として見える。

実在の可能性を考える説もある天皇で、河内(かわち=現在の大阪府東部)を拠点とする新王朝の創始者とする説や、4世紀から5世紀に中国へ使者を送ったと中国の歴史書に見える、いわゆる「倭の五王(わのごおう)」の一人に比定する説などもある。日本最大級の古墳の一つである大阪府羽曳野市(はびきのし)の誉田御廟山古墳(こんだごびょうやまこふん)が、古来その陵墓とされてきた。また、後世には父仲哀天皇(ちゅうあいてんのう)、母神功皇后とともに、八幡信仰の三祭神の一つともされるようになっている。

【聖徳太子】しょうとくたいし

574 - 622。推古天皇(すいこてんのう)の摂政(せつしょう)・皇太子。本名は厩戸王(うまやどのおう)。仏教への信仰が厚く、四天王寺(してんのうじ)や法隆寺(ほうりゅうじ)を建立したほか、経典の注釈書も著したとされる。また、冠位十二階(かんいじゅうにかい)や十七条の憲法を制定するなど、摂政として政治改革にも努めたとされる。ただし、こうした国政上での活躍は、奈良時代における創作である、などとする説もある。

聖徳太子をめぐるのは没後、さまざまな伝説が語られるようになった。平安時代中ごろ成立の『聖徳太子伝暦(しょうとくたいしでんりゃく)』は、そのころまでにできあがっていた諸伝説を集成したもので、以後の聖徳太子信仰の展開に大きな影響を与えた。

【古浄瑠璃】こじょうり

浄瑠璃の成立は、15世紀後半のころと見られているが、当初は、今日のような人形芝居を伴わない、伴奏にのせた語り物の形をとっていた。その後、17世紀後半に竹本義太夫(たけもとぎだゆう)が義太夫節と呼ばれる曲風を創造して人気を博す。この義太夫節から今日に伝わる人形芝居を伴う浄瑠璃が発達していった。古浄瑠璃とは、こうした義太夫節成立以前の段階の浄瑠璃を指す。

【三十三間堂】さんじゅうさんげんどう

京都市東山区にある仏堂で、正式には蓮華王院(れんげおういん)本堂と呼ぶ。蓮華王院は、長寛2(1164)年に後白河上皇(ごしらかわじょうこう)が、平清盛(たいらのきよもり)に命じて、自身の離宮である法住寺殿内に造営した寺院。鳥羽上皇(とばじょうこう)が清盛の父平忠盛に造営させた得長寿院(とくちょうじゅいん)にならって、三十三間の細長い堂に、1,001体の観音像が安置された。なお、後白河が造営した蓮華王院は、建長元(1249)年の火災で焼失し、現在の堂は文永3(1266)年に再建されたものである。

用語解説

【後白河法皇】ごしらかわほうおう

1127 92。鳥羽上皇（とばじょうこう）の第4皇子で、若い頃は「今様（いまよう、当時の流行歌）」に凝るなど芸能を好み、周囲からは天皇の位を継ぐ器とは見られていなかったという。しかし、近衛天皇（このえてんのう）の死去にともない、崇徳上皇（すとくじょうこう）の皇子の即位を望まない鳥羽上皇の意向もあって久寿2（1155）年に天皇となる。ついで、保元3（1158）年に皇子の二条天皇（にじょうてんのう）に譲位して上皇となり院政を行った。

治世中は、保元の乱（1156年）、平治の乱（1159年）、その後の二条天皇との対立、続く平清盛（たいらのきよもり）の勢力拡大、源平が戦った治承（じしょう）・寿永（じゅえい）の内乱と鎌倉幕府の成立に至るまで、数多くの戦乱とめまぐるしい政治の変動が起こる動乱の時期であった。後白河はこの中で次々と現れてくる新勢力と対決、妥協をしつつ、数々の危機に瀕しながらも、最終的には院政・公家政権の一定の維持に成功した。建久3（1192）年3月没。

【熊野本宮】くまのほんぐう

和歌山県田辺市にある神社。現在の正式名称は熊野本宮大社。同県新宮市（しんぐうし）にある熊野速玉大社（熊野新宮）、同県那智勝浦町（なちかつうらちょう）にある熊野那智大社と合わせて、「熊野三山」と呼ばれ、古くから信仰されてきた。とくに平安後期の院政期には、院をはじめとする多くの貴族が参詣を繰り返すようになり、これ以後、熊野参詣は次第に社会の諸階層に広まっていった。

【元曲】げんきょく

中国元代（13 14世紀）に盛んになった雑劇、歌謡の総称。他の時代に比べてこのジャンルで優れた作品が多く、元代の文学を代表するものとして評価を受けている。

参考書籍

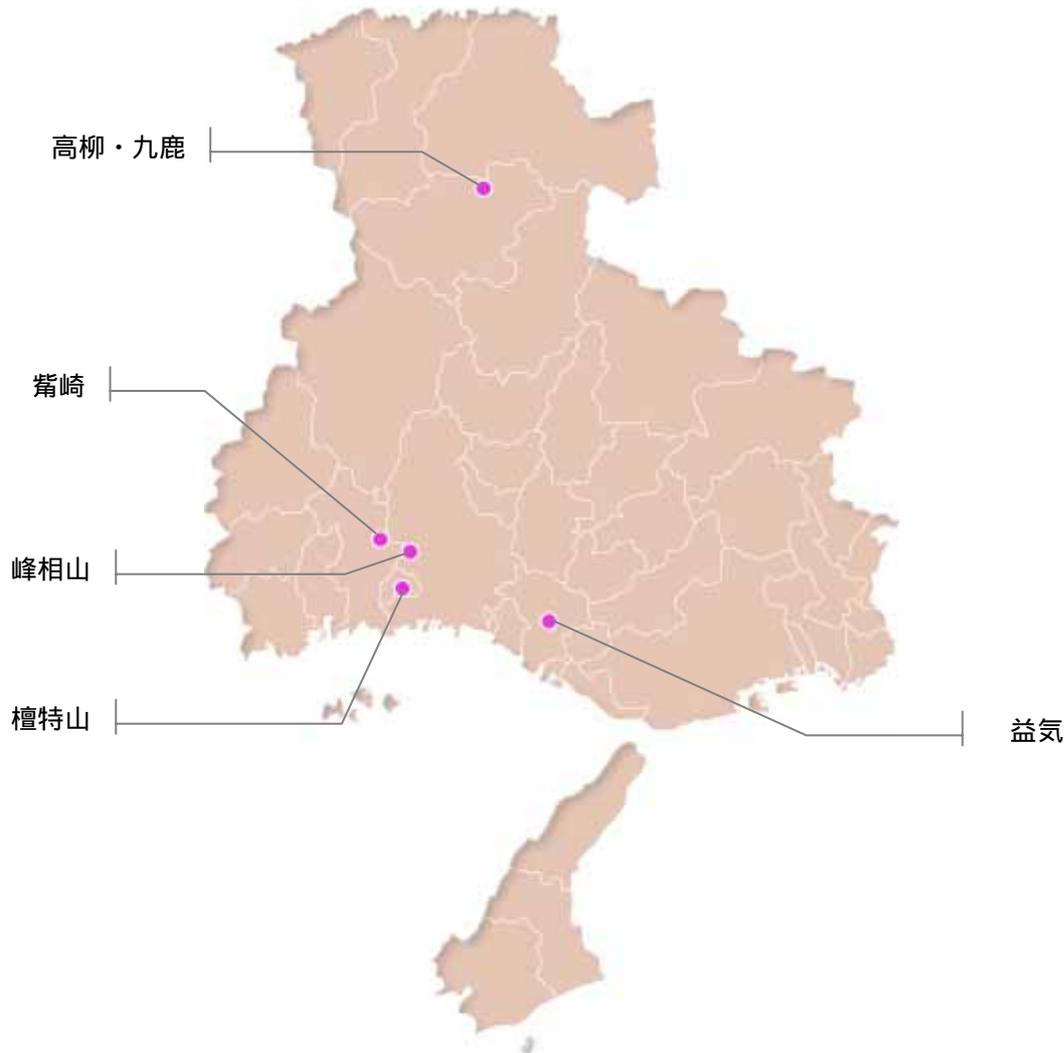
伝説の参考書籍

書籍名	刊行年	著者名	発行者
日本伝説 播磨の巻	1918 1978復刻)	編著：藤沢衛彦	日本伝説叢書刊行会
兵庫の民話(日本の民話 25)	1960	編集：宮崎修二郎、徳山静子	未来社
郷土の民話 東播編	1972	編集："郷土の民話"東播地区編集委員会	兵庫県学校厚生会
兵庫の伝説	1980	編著：兵庫県小学校国語教育連盟	日本標準
兵庫の伝説 1	1981	編集：有井基、絵：のざきジョー	神文書院
八鹿のむかし話	1982	編集：ふるさと文庫編集委員会	八鹿町
兵庫のむかし話釈講	1983	著：船知慧、さしえ：森崎伯霊	中央出版エージェント
日本伝説大系 8 北近畿編	1988	編集：福田晃	みずうみ書房
伝承八鹿	1992	編集：八鹿町老人会連合会	八鹿町老人会連合会
但馬八鹿町の民話と唄・遊び	1996	編著：稲田浩二、鶴野祐介	手帳舎

歴史・文化の参考書籍

書籍名	刊行年	著者名	発行者
播磨国風土記(収録:日本古典文学大系新装版『風土記』)	1993	校注:秋本吉郎	岩波書店
峰相記(収録:『兵庫県史』史料編中世4)	1989	編集:兵庫県史編集専門委員会	兵庫県
播州府中記(収録:『播陽万宝知恵袋』上)	1988	編纂:天川友親、校訂:八木哲浩	臨川書店
播州八十岩橋記(収録:『播陽万宝知恵袋』上)	1988	編纂:天川友親、校訂:八木哲浩	臨川書店
祇園女御九重錦(収録:叢書江戸文庫37『豊竹座浄瑠璃集』3)	1995	校訂:伊藤馨	国書刊行会
播磨鑑	1958	著者:平野庸修、校訂:播磨史籍刊行会	播磨史籍刊行会
播州名所巡覧図絵	1974	著者:秦石田、校訂:井口洋	柳原書店
増訂 印南郡誌 前後編	1916 (1973復刻)	編纂:兵庫県印南郡役所	兵庫県印南郡役所(復刻:名著出版)
伝説の兵庫県	1961 (2000再刊)	西谷勝也	神戸新聞総合出版センター(再刊)
八鹿町の文化財	1969	編集:八鹿町公民館	八鹿町公民館
八鹿町史 上	1971	編集代表:中島喜市	八鹿町役場
播磨伝説風土記	1976	編集:読売新聞社姫路支局	姫路駟路の会
聖徳太子の榜示石	1976	谷岡武雄	学生社
日本物語通観 16 兵庫	1978	責任編集:稲田浩二、小沢俊夫	同朋舎
日本伝説大系 3 南奥羽・越後編	1982	編集:野村純一	みずうみ書房
日本伝説大系 9 南近畿編	1984	編集:渡邊昭五	みずうみ書房
唱導と王権 得長寿院供養説話をめぐりて(収録:水原一編『伝承の古層』)	1991	阿部泰郎	桜楓社
木霊婚姻譚 その成立背景 (収録:『梅花日文論叢』3号)	1995	前田久子	梅花女子大学大学院日本文学会
「鵜荘(ぼう)示石」についての覚書(収録:大山喬平教授退官記念会編『日本社会の史的構造』古代・中世)	1997	小林基伸	思文閣出版
熊野の鬮體と柳 三十三間堂創建説話群について(収録:『国文学 解釈と教材の研究』44-8号)	1999	中前正志	学燈社
播磨 山の地名を歩く	2001	編集:播磨地名研究会	ひめしん文化会、神戸新聞総合出版センター
フィールドガイドブック 新宮町の自然	2001	編集:新宮町自然調査団	新宮町教育委員会
「卅三間堂棟由来」(「祇園女御九重錦」)の構想と文政期以後の上演(収録:『早稲田大学大学院文学研究科紀要』第3分冊、52号)	2007	内山美樹子	早稲田大学大学院文学研究科

所在地リスト



高柳・九鹿	養父市八鹿町高柳、九鹿、ほか
紫崎	たつの市新宮町紫崎
峰相山	姫路市石倉
檀特山	太子町矢田部、ほか
益気	加古川市東神吉町升田

ひょうご歴史ステーション「ひょうご伝説紀行」は、兵庫県立歴史博物館により管理・運営しております。サイトで使用するテキスト・画像などのコンテンツ全般の著作権は当館に帰属し、無断での複写・転用・転載などを禁止いたします。

ひょうご伝説紀行 妖怪・自然の世界
<http://www.hyogo-c.ed.jp/~rekihaku-bo/historystation/legend3/>

編集発行 兵庫県立歴史博物館
〒670-0012 兵庫県姫路市本町6-8 079-288-9011

第1刷 2009年4月1日

参考書籍（全編）

一般的な参考書籍

書籍名	刊行年	著者名	発行者
兵庫県大百科事典 上・下	1983	編集：神戸新聞出版センター	神戸新聞出版センター
日本伝奇伝説大事典	1986	編集：乾克己、他	角川書店
角川日本地名大辞典28 兵庫県	1988	編纂：「角川日本地名大辞典」編纂委員会	角川書店
日本歴史地名大系29-1・2 兵庫県の地名 1・2	1999	編集：平凡社地方資料センター	平凡社
日本民俗大辞典 上・下	1999・2000	編集：福田アジオ、他	吉川弘文館
日本説話伝説大事典	2000	編著：志村有弘、諏訪春雄	勉誠出版

参考サイト（全編）

種別	サイト名	URL
官庁	姫路市ホームページ	http://www.city.himeji.lg.jp/
	尼崎市ホームページ	http://www.city.amagasaki.hyogo.jp/
	三田市ホームページ	http://www3.city.sanda.hyogo.jp/
	鳥取県岩美町ホームページ	http://www.iwami.gr.jp/
	市川町ホームページ	http://www.town.ichikawa.hyogo.jp/
	丹波市教育委員会ホームページ	http://edu.city.tamba.hyogo.jp/
	篠山市ホームページ	http://www.city.sasayama.hyogo.jp/
	福崎町ホームページ	http://www.town.fukusaki.hyogo.jp/
	たつの市ホームページ	http://www.city.tatsuno.hyogo.jp/
	佐用町ホームページ	http://www.town.sayo.lg.jp/
	神河町ホームページ	http://www.town.kamikawa.hyogo.jp/
	神戸市ホームページ	http://www.city.kobe.lg.jp/
	南あわじ市ホームページ	http://www.city.minamiawaji.hyogo.jp/
博物館・資料館	ネットミュージアム 兵庫文学館	http://www.bungaku.pref.hyogo.jp/
	那珂ふれあい館ホームページ	http://www.takacho.jp/nakafureai/
	柳田國男・松岡家顕彰会記念館ホームページ	http://www.kinenkan.town.fukusaki.hyogo.jp/
	西宮ふるさと民話 西宮市立郷土資料館ホームページ	http://www.nishi.or.jp/homepage/siryo/minwa/minwa.html
寺院	永沢寺ホームページ	http://youtakuji.net/
	法楽寺ホームページ	http://www.inudera.com/
	神呪寺ホームページ	http://www.ne.jp/asahi/kabutoyama/kanno-ji/
	鷲林寺ホームページ	http://www5b.biglobe.ne.jp/~jurinji/
神社	播磨国総社 射楯兵主神社ホームページ	http://www2.ocn.ne.jp/~sohsha/
	広田神社ホームページ	http://www.geocities.jp/hirotahonsya/
その他	国際日本文化研究センター 怪異・妖怪伝承データベース	http://www.nichibun.ac.jp/YoukaiDB2/
	ハートにぐっと北播磨 兵庫・北播磨観光ポータルサイト	http://www.kita-harima.jp/
	淡路島 洲本八狸物語	http://www.sumoto-cci.org/yadanuki/
	明石観光協会ホームページ	http://www.yokoso-akashi.jp/